

2015年度

# 教師海外研修プログラム(マラウイ)

## 報告書



2016年 (平成 28年)



独立行政法人 国際協力機構  
九州国際センター (JICA九州)

# 目 次

## I. 研修概要

参加者リスト	5
派遣前研修スケジュールとその様子	6
現地研修スケジュールとその様子	8
帰国後研修スケジュールとその様子	9
実践授業報告会	11

## II. 海外研修報告書

宮ヶ迫 麻 美	15
松 下 由 佳	19
石 井 美 保	23
佐 伯 幸 治	29
中 島 和 哉	34
柴 田 邦 博	38
岡 留 真 吾	42
古 賀 富士子	49

## III. 授業実践例報告書

宮ヶ迫 麻 美	59
松 下 由 佳	67
石 井 美 保	75
佐 伯 幸 治	85
中 島 和 哉	92
柴 田 邦 博	98
岡 留 真 吾	105
古 賀 富士子	117

※ 教員、および児童/生徒の原文を活かして掲載しています。一部表現や体裁のばらつきがありますがご了承ください。

※ 過去の実践事例を、JICA 九州のホームページに掲載しています。

<http://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html>



# I. 研 修 概 要



## 参加者リスト

### 参加教員

	県	所 属	氏 名	担当科目
1	鹿児島	鹿児島県立聾学校	宮ヶ迫 麻 美	数 学
2	熊 本	菊陽町立菊陽中学校	松 下 由 佳	英 語
3	長 崎	大村市立西大村中学校	石 井 美 保	英 語
4	宮 崎	宮崎県立佐土原高等学校	佐 伯 幸 治	地歴公民 (地理・世界史)
5	佐 賀	佐賀県立唐津東高等学校	中 島 和 哉	地理歴史 (地 理)
6	佐 賀	佐賀県立武雄高等学校	柴 田 邦 博	英 語
7	鹿児島	さつま町立盈進小学校	岡 留 真 吾	国 語
8	福 岡	福岡県立福岡高等視覚 特別支援学校	古 賀 富士子	外国語 (英 語)

### 同 行 者

	県	所 属	氏 名
1	福 岡	JICA 九州	立 野 敬 子
2	福 岡	社会福祉法人雪の聖母会 聖マリア病院	山 崎 裕 章

## 派遣前研修スケジュールとその様子

### ■ 7月4日（土）

時間		内 容	担 当
10:20		受 付	
10:30	5	司会及び担当スタッフ紹介	JICA九州 桑江 職員
10:35	5	JICA九州 JICA九州課長 挨拶	JICA九州 田中 課長
10:40	20	JICA事業概要、教師海外研修趣旨説明	JICA九州 桑江 職員
11:00	30	自己紹介（アイスブレイキング） 4つの窓→交流 ①名前（コース） ②どこから？（学校名） ③次に生まれるとしたらどこの国？ ④海外研修で持って帰りたい「お土産」は？	ファシリテーター： 松本亜樹 氏
11:30	45	開発教育とは？ ・「開発」の意味について（What） ・何をめざすのか？（Why） ・どのような手法があるか？（How）	ファシリテーター： 松本亜樹 氏
12:15	60	休 憩（ランチ）	
13:15	60	マラウイ国概要	聖マリア病院 山崎 氏
14:15	10	休 憩	
14:25	100	現地研修スケジュール詳細説明 （途中適宜休憩）	聖マリア病院 山崎 氏 JICA九州 立野 職員
16:05	60	授業実践のために「現地での視点の整理」 ・現地でやりたいこと（ブレインストーミング） ・ランキング（拡散→収束） ・発表（自分の問題意識を明確にする） ・Q & A	ファシリテーター： 松本亜樹 氏
17:05	5	事務連絡（明日のスケジュール等）	JICA九州 立野 職員
17:10		終 了	

## ■ 7月5日（日）

時 間		内 容	担 当
9：00	30	事務手続き（渡航、保険、留意点他）	JICA 九州 桑江 職員
9：30	60	教師海外研修 過年度参加者からの経験談	福岡 先生
10：30	90	参加者ミーティング （役割分担、研修までの準備）	JICA 九州 立野 職員 松本亜紀 氏 山崎 氏（相談対応）
12：00	60	休 憩（昼食）	
13：00	30	参加者ミーティング（続き。もし必要であれば）	
13：30	30	ふりかえり & 今後（渡航当日と帰国後）の流れ 確認 アンケート記入	JICA 九州 立野 職員
14：00		閉会の挨拶	JICA 九州 田中 課長
14：35		解 散	

## 現地研修スケジュールとその様子

月 日	曜日	内 容	宿泊地
8月 1日	土	福岡発 香港乗換	機中
8月 2日	日	マラウイ (リロングウェ) 着	リロングウェ
8月 3日	月	午前：大使館表敬 / 事務所オリエンテーション (事業概要、安全対策、日程確認) 午後：(技プロ) 一村一品プロジェクト / 青年海外協力隊員活動視察 OVOP ショップ / スーパー買物 / 両替	リロングウェ
8月 4日	火	午前：青年海外協力隊員 (数学教育) 活動視察 (ムセチェ中高等学校) (無償) リロングウェ中等教員養成学校建設現場視察 午後：(技プロ) 中等理数科教育強化プロジェクト	リロングウェ
8月 5日	水	午前：交流授業 (ミトゥンドウ教師研修センター・小学校) 午後：国連世界食糧計画 (WFP) 事務所訪問	リロングウェ
8月 6日	木	(リロングウェ→ムジンバ) 午前：陸路移動 午後：青年海外協力隊員 (公衆衛生・薬剤師・行政サービス) 活動視察 (ムジンバ県南部病院)	ムジンバ
8月 7日	金	午前：(草の根技協) 子供にやさしい地域保健プロジェクト活動視察 午後：青年海外協力隊員 (エイズ対策) 活動視察 (ビバンガララ・ヘルスセンター)	ムズズ
8月 8日	土	午前：青年海外協力隊員 (障害者支援) 活動視察 (バンダウエ視覚障害児支援学校・近隣小学校) 午後：(技プロ) 持続可能な土地管理促進プロジェクト活動視察	ムズズ
8月 9日	日	(ムズズ→リロングウェ) 午前：陸路移動 午後：資料整理	リロングウェ
8月 10日	月	9:00 JICA 事務所報告 10:30 JICA 事務所発 13:10 リロングウェ発	ヨハネスブルグ
8月 11日	火	12:30 ヨハネスブルグ発 (CX748) →	機中
8月 12日	水	香港乗換 福岡着	

## 帰国後研修スケジュールとその様子

### ■ 8月22日(土)

時 間		内 容	担 当
10:30		受 付	
11:00	5	あいさつ	JICA九州 田中 課長
11:05	5	帰国後研修の流れについて	JICA九州 桑江 職員
11:10	50	マラウイ研修のふりかえり ・各先生 ① マラウイ研修で最も印象に残ったこと ② マラウイで意外に思ったこと ③ マラウイで見つけた「日本とのつながり」 の中からテーマを選び、5分でプレゼンする。 (①～③はどれか選んでもいいし、3つを織り交ぜてもよい)  ・同行者 対象：立野、山崎さん	EDU 松本亜樹氏
12:00	60	ラ ン チ	
13:00	90	貿易ゲーム ① 貿易ゲームを体験 ② 貿易ゲームの振り返り ③ 貿易ゲームのやり方	EDU 松本亜樹氏 福岡 先生
14:30	10	休 憩	
14:40	180	教材案作成 ① 目的の整理（この教材を通して何を伝えたいか？） ② 教材を作る ③ 教材の活用法を考える (適宜休憩あり)	EDU 松本亜樹氏
17:40	5	事務連絡（明日の日程確認等）10分程度	JICA九州 桑江 職員

■ 8月23日(日)

時 間		内 容	担 当
9:30	10	集合、模擬授業準備など	
9:40	140	模擬授業 グループ or 個人? 発表●分+コメント・意見交換 10分  ※途中適宜休憩	EDU 松本亜紀氏
12:00	60	ラ ン チ	
13:00	60	模擬授業 つづき	
14:00	30	ふりかえり ① アンケート記入 (5分) ② 一人一言 (3分×8人)	JICA九州 立野 専門囑託
14:30	5	今後に向けて	JICA九州 田中 課長
14:35		解 散	

## 実践授業報告会

時 間	プログラム	担 当
13:00～13:05	挨拶	JICA九州 市民参加協力課 瀧沢 課長
13:05～13:10	全体説明	2015年度教師海外研修 参加者
	実践授業報告（一人当たり10分報告+10分 質疑応答⇒20分）	
13:15～13:35	①先生	
13:35～13:55	②先生	
13:55～14:15	③先生	
14:15～14:35	④先生	
14:35～14:45	休 憩	
14:45～15:05	⑤先生	
15:05～15:25	⑥先生	
15:25～15:45	⑦先生	
15:45～16:05	⑧先生	
16:05～16:20	休 憩	JICA九州 市民参加協力課 桑江 職員、立野 専門嘱託
16:20～16:40	開発教育の実践に関する情報共有	
16:40～16:50	休 憩	
16:50～17:50	開発教育における様々な手法の紹介	ファシリテーター Edu 松本亜紀氏
17:50	終 了	



## Ⅱ. 海外研修報告書



学 校 名	鹿 児 島 聾 学 校
-------	-------------

氏 名	宮 ヶ 迫 麻 美
-----	-----------

担 当 教 科	数 学 科
---------	-------

## 1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

置かれた環境に依存することなく、自分にとっての幸せを追求し、笑顔で暮らせる力。無いものをなげくのではなく、無いものは自分で作りだす知恵を持ち、努力する力。

## 2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

まず、日本では当たり前のように思っていること（生活の中にあるものや、教育の中でごく自然に身に付いていること）が当たり前ではない世界がある、ということ、身をもって知ることができました。一方で人々の様子や話から、ものや知識の豊かさと幸せとを感じるということとは必ずしも同じではないということを実感することができました。

また、海外ではたくさんの日本人がいろいろな分野で、強い思いをもって活躍をしているということを改めて確認するとともに、実際にその現場を見て、声を聞くことができました。

視察を通して体感できたこれらのことから、改めて教育の大切さを実感するとともに、自身の価値観の幅も広がりました。子供たちにも私自身が見聞きしたこと、そのとき感じたことを伝えていきたいと思います。

## 3 教育指導への活用について

児童生徒の実態に合わせて教材を組み立てることで、国際理解教育を進められるようにしたいと思います。進めるに当たって、普段児童生徒は海外のことをなかなか身近なこととして捉えづらい様子が見られる中で、今回、聴覚特別支援学校の視察もさせていただいたので、同じ障害のある児童生徒の学校生活について触れることで、その他のことについても少しでも身近に感じられるよう工夫したいと思います。

また、授業という枠にとらわれず、平日頃から国際的なことを話題にしたり、今回の視察で学んだことを掲示物等利用して知らせたりすることで、校内で広く国際理解教育が進められるようにしたいと思います。

## 4 研修に関する全般的な所感／意見について

事前事後研修も含め、大変充実した研修でした。特にマラウイでは、個人では決して行くことができない場所に行き、貴重なものを見たり話を聞いたりすることができ、大変勉強になりました。

共に研修に参加した先生方は、県に教科に校種とそれぞれ違い、普段決して出会えないメンバー

でもあり、多様な考えや意見を聞くこともまた刺激になりました。事後研修では、教科や校種の枠にとらわれない教材作りや意見交換ができ、学校での活用に向けての参考になりました。

## 5 JICA に対する要望・提言

個人では決して作り出すことのできない貴重な場を与えていただき、ありがとうございました。事前の研修等で必要なものや知識等しっかり伝えていただき、また現地でも十分に用心を促していただいたおかげで、何事もなく健康・安全に研修を終えることができました。研修全般を通して、私たちの意見や興味・関心に合わせて柔軟な対応を取っていただいたことにも大変感謝しています。

## 6 今後の本研修参加者へのアドバイス

毎日さまざまな情報が入ってくるので、その都度メモをとることが大事です。いろいろと準備をしておくことは必要ですが、イメージしていたとおりにはいかないのもまた研修だと思えます。やりたいこと、やりたくないこと、それぞれ思いや考えがあると思いますが、全部集団での行動となるため協調性がとても大切です。お互いに心地よい環境を作れるよう、何事も柔軟に考えられるようしておくとうよいと思えます。

## 7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月3日(月)	在マラウイ日本国大使館 表敬訪問  JICA マラウイ事務所訪問  OVOP 事務局・ショップ、 青年海外協力隊視察	改めて代表としてこの研修に参加していることを実感し、身が引き締まる思いがした。国の抱える教育の問題を初めて具体的に耳にし、深刻な現状を知った。ねたみ文化の話も印象的だった。 マラウイの歴史や現在の状況について説明していただいたり、滞在時の注意事項について説明していただいたりすることで、これからの研修へ向けての期待が高まった。 品質管理からラベルデザインまで、一つの商品を作り上げるために、様々な視点で開発が行われていることを知った。よりよい製品作りに向けての意識付け、モチベーションをどうやって上げるのかということへの大変さを感じた。ショップに売られている製品はどれもよく仕上がっていたが、話でもあったように製品の良さをどのようにPRして市場拡大

日 時	訪 問 先	所 感
8月4日(火)	<p>ムセチュ中高等学校(中等理数科教育強化プロジェクト)青年海外協力隊視察</p> <p>リロングウェ中等教員養成学校建設現場視察</p> <p>航空管制人材育成プロジェクト/太陽光を利用したクリーンエネルギー導入計画視察</p>	<p>を目指していくのかも、また難しい課題であると感じた。</p> <p>予定外に生徒を集めてくださっており、授業の様子を見せていただいたり、交流をしたりすることができて嬉しかった。生徒たちが生き生きと活動をする様子が印象的だった。理数科教育が強化されていることの裏にある現地の教育の実態も聞けて、改めて数学教育の大切さを考えさせられた。</p> <p>たった一人の日本人でこれだけ広大な敷地を、たくさんの人を動かし、学校を建設しているということに驚いた。建設中の建物はとても立派なもので、完成したのも見てみたいと思った。昼食時間になったら働いていた人々が一斉に塀の外へ行き、シマを作り始めた様子も印象的だった。</p> <p>空港長直々に話をさせていただいたり、普段見られない空港の内部を見せていただいたりすることができて大変興味深かった。管制塔がたった一人で、またアナログな形で管理されていることに驚いた。電力が不足しがちなマラウイにおいてソーラーの活用は大変有効であり、よいと思ったが、一方で毎日ほこりを掃除しなければならないという状況に、現状維持のためには負担も大きなものであると感じた。3年後、新しくなった空港が楽しみだと思った。</p>
8月5日(水)	<p>ミトゥンドゥ小学校交流授業</p> <p>国連世界食糧計画事務所訪問</p>	<p>封筒作りでは、初めて使うという「のり」の感触に驚いた様子を見せながらも色や配列を工夫して楽しそうにデコレーションしていた。外での活動は、特に長縄をすさまじい速さで回し、日本とは逆側から入っていく様子に身体能力の高さを感じた。物に対して敏感に反応する子供たちの様子に、援助の在り方について考えさせられた。子供たちの元気さと笑顔が強く印象に残った。</p> <p>食糧をいきわたらせるために、様々な機関が様々な取組をしているということを改めて実感した。学校で食事を与えることや持ち帰る食糧を配ることが学校へ行かせるきっかけになっているということには複雑な思いがした。</p>
8月6日(木)	<p>ウィリアム・カムクワンバくんの作った風車、自宅視察</p>	<p>計画に入っていなかった場所であったが、私たちの希望を受けて加えていただいた。本で読んでいたものを、見ていたものを、目の前で見られるということには感慨深いものがあった。自宅はこの風車に</p>

日時	訪問先	所感
	<p>ムジンバ県南部病院青年海外協力隊視察</p> <p>現地 NGO 視察</p>	<p>より恵まれた環境に変わってきている様子が伺えたが、本でイメージしていたものよりも過酷な現実がそこにあり、そんな中でのこの風車を作ったことがいかにすごいことかということに改めて実感できた。</p> <p>病院無償化ということは、誰もがためらわず病院受診をできていいことだと思っていたが、その一方で無償化することによる問題点も聞くことができ、自分では考えにも及ばなかった視点で勉強になった。1歳5カ月で2.4kgという入院中の赤ちゃんも強く印象に残った。</p> <p>素晴らしい歌での歓迎が嬉しかった。自分たちのコミュニティを自分たちでよくしていくという意識に、活力を感じた。オープンがない状況下で、工夫してパンを焼いている様子やそのおいしさも印象的だった。</p>
8月7日（金）	<p>エディンゲニヘルスセンター子供にやさしい地域保健プロジェクト視察</p> <p>エンバングウェニ病院青年海外協力隊視察</p>	<p>日本では考えられないような道を長時間に渡って移動した先で、たくさんの日本人が生き生きと活動されていた。栄養についての重要性を分かってもらうためにはどうすればいいのか、苦労しながらも様々な工夫を行っていることが分かった。話を聞くうちに、医療の分野でありながらも教育との関連性を感じるとともに、その重要性についても改めて実感した。</p> <p>HIV 感染拡大防止に向けていろいろな取組をする中で、文化的なことや宗教的なことなどに関する障害は話を聞くまで考えたこともなかった。先進国の中で日本だけが HIV 感染者が増加傾向にあることを知り、正しい知識を身に付けることの大切さを実感した。</p>
8月8日（土）	<p>バンダウエ聴覚障害児支援学校青年海外協力隊視察</p> <p>ムズズ郊外（持続可能な土地管理促進プロジェクト）試験圃場視察</p>	<p>聴覚障害のある子供たちの厳しい教育環境や社会環境について知ることができた。いろいろな国からの支援がある中で、補聴器の無償提供については、管理の悪さや転売で使用している生徒は少ないとのことに残念さを感じた。</p> <p>自分たちの土地を自分たちでよりよいものにしていくという取組が素晴らしいプロジェクトであると感じた。今年度の干ばつでもよく育つという成果が得られたとのことで、今後の広がりが楽しみであると感じた。</p>

学 校 名

菊陽町立菊陽中学校

氏 名

松 下 由 佳

担当教科

英語科

## 1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

人間は一人では生きていけない。人は支え、支えられながら生きていくものだと思います。マラウイの人同士、マラウイ人と日本人の相互、そして今回の研修で私は同行していただいた日本人のメンバーにも、とても支えていただきました。多くの支えがあって私は生きていることを痛感しました。それは、日本での生活もそうです。家族、同僚、友達、仲間たち、生徒たち…。本当にたくさんの人に私は支えられていることを改めて実感することができました。私が思う「生き抜く力」とは、共に生きる力ではないかと思います。「共生力」です。その時に、性別、年齢、生活様式、文化、言葉等が違えば、相手のことを思い、考えて動く。そしてその力は日本の思いやりやおもてなしの心ではないかと思います。大切な日本の心を見つめ直すことのできた研修でした。

## 2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

今回の研修で自分がちっぽけなことを痛感しました。言語力も相手を思いやる心もまだまだ未熟です。人間一生勉強だと思っています。だから人生はおもしろいと思っています。子供たちに伝えたいことは、世界は広いことと、日本のすばらしさです。日本人としての誇りが持てるような授業を創っていきたいと思います。そして、故郷を大切に、世界視野でものごとを見て、考えられる日本人に私自身なっていきたいし、同じ思いの次世代の日本人の育成に関わっていきたいと思っています。

## 3 教育指導への活用について

教師であることは、多くの次世代の日本人の前で話をする機会をたくさんいただいています。教科で言うと、英語ではただ単に英語の文法を教えるだけでなく、国際理解の視点に立った生きた英語の授業を展開していきたいと思っています。また、道徳の内容項目4-(9) 愛国心や4-(10) 国際理解でも今回の研修で自分が感じたことを子供たちに伝えていきたいと思っています。若いときに外から客観的に日本を見ることは貴重な体験です。島国日本だからこそ、国際的な視点に立つためには、海外を経験することはとても有意義だと思います。総合的な学習の時間や学活でも、国際的な視点を持つことはキャリア教育につながります。年間計画や全体計画を明確にし、国際理解教育を推進していきたいと思っています。

---

## ④ 研修に関する全般的な所感／意見について

個人の旅では見ることのできない内容で、とても興味深いものでした。毎日のスケジュールがハードでしたが、実りあるものになりました。途中、半日でも余裕があると、整理する時間がとれるかなと感じました。JICA の始まりそのもののお話も聞けて良かったです。研修にもあると有意義かなと思いました。

---

## ⑤ JICA に対する要望・提言

JICA の始まりについて、歴史や意義等、当時の様子等のお話が聞けると幸いです。

JICA で今回の研修のように、若い世代（中学生や高校生）を対象としたプログラムがあると、若い世代が外から客観的に日本を見る機会になると思うので、より多くのそういった機会があるといいのではないかと思います。

---

## ⑥ 今後の本研修参加者へのアドバイス

体調管理が大切です。私は食べ物で苦労しましたが、何でも食べられる人は大丈夫だと思います。日本食（インスタント食品やお菓子）を持って行きました。準備物や心得は、事前の研修や事前に参加された方の資料からわかるかと思います。

広い世界の中で、針をつつくようなピンポイントに自分がいる。それが、日本かマラウイか、そう考えると世界がおもしろいと思いますよ。

## 7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月1日(土) ) 2日(日)	福岡発—香港・ヨハネスブルク経由—マラウイ着	まず、福岡発が2時間遅れからのスタート。海外の航空会社の文化を感じた始まりだった。ロングフライトであったが、無事にマラウイに着き、一安心した。マラウイでは大統領と同じ時間帯に空港に到着し、大統領歓迎のマラウイの音楽や踊りが見られて良かった。空港は簡素な感じであった。
8月3日(月) 8:30~ 11:00~ 13:30~ 15:00~ 16:15~	大使館表敬訪問 JICA 事務所訪問 OVOP 事務所訪問・面談 OVOP ショップ視察 ショッピングモール	大使館では、マラウイという国について話を聞くことができた。教育が重要であると思った。JICA 事務所では、マラウイで活躍する日本人のことや、JICA で働いている方の熱い思いを聞くことができた。OVOP とは、大分県の一村一品運動の取り組みのことである。各分野の専門家が丁寧に支援していることがわかった。村を知ることや経営面で興味深いものであった。
8月4日(火) 9:30~ 11:00~ 13:30~ 14:30~	ムセチェ中高等学校視察 養成学校建設現場視察 カムズ国際空港視察 航空管制学校視察	ムセチェ中高等学校では、理数科教育に力を入れておられた。夏休み中に学校に来てくれた子ども達の目はキラキラしていた。養成学校は規模の大きさに驚いた。教育に力を入れようとしていることが分かる。その現場を仕切っているのが日本人であった。世界で活躍する日本人はカッコいい。現場を知り、共に働く姿が素敵だった。カムズ空港や航空管制学校は日本が計画的に支援していることがわかった。一つ一つ丁寧に仕事をする日本人を誇りに思った。
8月5日(水) 9:30~ 14:30~	ミトゥンドゥ教師研修センター・小学校視察・交流授業 WPF 視察・面談	小学校では英語が通じなかったが、伝えたい思いがあればジェスチャー等で通じ合えることを再確認できた交流会であった。教育の大切さを痛感した視察であった。WPF では、どんな支援をしているかをお聞きすることができた。世界中で、各方面で団体を作り、途上国に支援している人達がたくさんいることに気づかされた。世界は広いし、人はやさしいと感じた。
8月6日(木) 13:00~ 15:15~	午前中、北部へ移動 ムジンバ県南部病院見学 現地 NGO 視察	マラウイの病院の現状を知ることができた。薬が常備されていないことや、無償で受診できるが、患者は強く意見が言えないという弱者であることが新しい発見であった。プライベートは保障されてい

日 時	訪 問 先	所 感
		るのが少し心配なくらい院内を視察させていただいた。教育と同様に、医療の必要性も感じた。現地 NGO を訪問の際は、歌と踊りで歓迎され、手作りパンやお茶でもてなされ、愛情を感じた。日本の自治体のような団体で、日本にももっと残すべきではないかとなつかしくなった。
8月7日(金) 10:00～ 14:00～	エディンゲニヘルスセンター視察 エンバングウェニ病院視察・HIV患者との対話	現地の医療で必要なことを考え、支援されていることがわかった。青空教室での母親学級や乳児の身体測定は印象的であった。マラウイの人は歌でいろいろなことを覚えるという文化を上手に活用されていた。ソーラーパネルの設置により、冷蔵庫を置き、ワクチンの接種がより簡単にできる施設を作られたのも驚いた。HIV患者との対話も日本ではできないことではないか。貴重な話をたくさん聞くことができた。今後に生かしていきたいと痛感した。そこで働く隊員の話も現地の方に耳を傾け、同じ目線で話し、大きな愛を感じた。
8月8日(土) 9:30～ 15:00～	バンダウエ聴覚障害児支援学校視察・交流 ムズズ郊外プロジェクト試験場視察	マラウイに支援学校があること自体に驚いた。マラウイの教師の立場がもっと保障されると教育全体が潤うのではないかと思った。日本を考えると、今の自分の使命が明確になったとても貴重な体験ができた。ムズズ郊外の持続可能な土地改良プロジェクトは、大変興味深いものであった。現地に必要なことを考えさせられた。その土地を知り、人を知り、必要なことを支援することが大切だと思った。
8月9日(日)	移動 (ムズズ～リロングエ)	北部から、首都へ戻る途中、マラウイ湖やバオバブの木を見ることができ、アフリカに来たんだなと実感した。大自然はやはり良い！！
8月10日(月) 9:00～ ～12日(水)	JICA事務所訪問・報告 リロングエ発—ヨハネスブルク・香港経由—福岡着	マラウイでもたくさんの人に支えてもらった。人は一人では生きていけない。たくさん愛情を感じ、感謝の気持ちでいっぱいであった。短い滞在であったが、実りあるマラウイ訪問であった。たくさんを感じ、始めて知ることたくさんあり、日本のことも客観的に見つめ直すことができた。とても貴重な経験をすることができた。

学 校 名

大村市立 西大村中学校

氏 名

石 井 美 保

担 当 教 科

英 語 科

## 1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

- 現状を受け入れ、ありのままに生きること。
- 毎日を懸命に生きること。目の前のことに向き合い、それを乗り越えること
- 笑顔で何事にも明るく前向きに取り組むことが、良い方向へ導くということ。

## 2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

### 【自身の成長につながったこと】

- 「開発」や「支援」は想像していた以上に難しいことも分かったが、興味・関心が高まった。
- 「教育」の価値を改めて知り、教員という仕事の重みとやりがいを感じる事ができた。

### 【子供たちに伝えたいこと】

- 途上国の子供たちは不幸ではないが、日本の子供たちは恵まれすぎていること。
- 英語が使えると、より多くの情報を受信することも、発信することもできるということ。
- 教育を受けられることの喜び。教育の重要性。教育が国を豊かにするという事。

## 3 教育指導への活用について

### 【道 徳】

中学校道徳指導要領に示されている項目4-(10)「世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する」において、視聴覚教材として、マラウイの街の様子や協力隊員の活動の様子を示しながら自分にできることを考えさせる教材として活用したいと考えている。

### 【英 語】

現地の子供たちの英語のスピーチの聞き取りを行い、考え方の違いを知らせる。マラウイという国の学習を通して、異文化理解に繋げ、先入観や固定観念をなくす一歩としたい。

### 【平和・人権教育】

マラウイで出会った人たちとの話をし、生活の様子を生徒に伝えていく中で、真の「平和」とは何なのか、「幸せ」とは何なのかを考えさせたい。答えを出すことはできないと思うが、そういったことを考えていく中で、今の自分の生活について見直す機会を持たせたいと考えている。

## 4 研修に関する全般的な所感／意見について

今回の研修は、多くの場所を訪問し、多くの日本人や現地の方と出会い、話すことができ、本当に学びの多い研修となった。教員になる前から開発途上国には興味を持っていたが、個人旅行では絶対に行くことのできない場所を安全に視察することができ、非常に有難かった。

「支援」や「開発援助」について今までも考えてきたが、この研修を通して、改めて簡単なことではないということを痛感した。研修前には「幸せ」や「豊かさ」について自分なりの答えを見つけないかと思っていて、むしろ分からなくなってしまう。しかし、こうやって現地に赴かなければ気付かなかったことや感じられなかったことだったので、今後また多くの経験を積み重ね、考えを深めていきたいと思っている。また、自分自身が見たもの・感じたものを今年の学校の生徒達だけでなく、今後出会う生徒すべてへ還元し、マラウイという国についての理解を深めていきたいと思っている。

最後に、研修に同行していただいた立野さん・山崎さんには非常に感謝しています。お二人のおかげで、マラウイでの研修が安全で実り多きものになったと感じています。お世話になりました。本当にありがとうございました。

## 5 JICA に対する要望・提言

- 事前研修の際には、名札があると参加者同士の話もスムーズになるかと思います。
- 安全に配慮して研修を組み立てていただき、有意義な研修になりました。
- 参加者の要望に可能な限り答えていただくなど、柔軟に対応していただき、感謝しています。
- 多くの現場を視察することができ、非常に有難かったですが、研修の中日あたりに振り返りの時間がとられるとより充実するかと思います。(事前研修で考えていた授業イメージと、実際に視察してからの思いは変わっていくため・・・)

## 6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- とにかく健康面が第一に大切だと思います。健康な状態でないと、研修に集中出来ず、他の参加者にも迷惑がかかります。また、視察していく際にも、視野も狭まってしまうように思います。
- 協調性を持って研修には参加してほしいと思います。他の参加者と話をする中で得られることもあります。自分の主張をするだけでなく、集団での研修ということを自覚し、視野を広げる姿勢で臨むことが必要だと感じました。また、参加者間のチームワークが上手くいけば、研修の密度ももっと高まると思います。
- 思いがけないところで現地の人と交流するチャンスがあるかもしれません。いつでも交流できるネタを準備しておくことをお勧めします。
- 帰国後に、授業で必要な写真などに気付くことがあります。些細なものでも写真に収めておく

となにかに利用できることがあるかもしれません。また、写真よりも映像の方が臨場感がでると思います。ビデオ機能とカメラ機能がついたカメラを持参されるとすぐに撮影できるかと思しますので、ぜひ持参してみてください。

## 7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月3日（月）	在マラウイ日本国大使館 表敬  JICA マラウイ事務所オリ エンテーション  一村一品運動実施能力強 化プロジェクト（OVOP）	<p><b>【大使館】</b> 西岡大使の「貧困を救うのは、教育と保健」という言葉が心に残った。教育という仕事は、国のために重要な役割であるということ再認識した。 また、日本の子供は苦勞をしていないため、外に出たときに苦勞をすともおっしゃっていた。中学生に世界のことを少しでも伝えていきたいと思う。</p> <p><b>【JICA 事務所】</b> 徳橋所長のお話の中で「長期的にマラウイに必要なのは、教育である」ということがあった。研修を通じて、その部分を見ていこうと思った。また、支援をする際には、相手に考えてもらうこと、そして納得してもらうことが重要であり、諦めない姿勢を持ち続けなければならない。</p> <p><b>【OVOP】</b> 現在は協力隊員の手が加えられ、商品開発に取り組んでいるが、隊員の帰国後にも残る活動をしていく必要がある。商品を販売する店を訪問した際には、以前は出来なかったという商品説明をマラウイ人スタッフが正確に出来ていたので、支援の成果がでていると感じた。</p>
8月4日（火）	中等理数科強化プロジェクト	<p><b>【中等理数科教科プロジェクト】</b> 教師の問いかけに、多くの生徒が反応している姿が印象的であった。学習意欲を感じた。しかし、隊員の方の話を聞くと、日本と同じように意欲にはムラがあるという実態もあるとのこと。途上国の子どもは学習へ意欲的であるという偏見だったのかもしれない。</p>

日時	訪問先	所感
	航空管制人材育成プロジェクト	<p><b>【中等教員養成学校建設現場視察】</b> 立派な学校が建設中であった。このような施設だと、学習する意欲も高まるように思う。また、このような施設建設のプロジェクトによって雇用も生み出され、安定した収入を得られていた。昼食休憩で、ヘルメットに水を入れて、シマをつくる作業員の姿も印象的であった。</p> <p><b>【航空管制人材育成プロジェクト】</b> 空港長自らが空港や航空管制学校の案内をしてくれた。日本の支援によって空港が建設されたことはマラウイにとって、とても大きなことだと感じた。空港内のいたるところに「From the people of Japan」と書かれたステッカーが貼られ、空港長から言われた日本人への感謝の言葉も印象に残っている。</p>
8月5日（水）	<p>ミトウンドウ小学校交流授業</p> <p>国連世界食糧計画事務所訪問</p>	<p><b>【ミトウンドウ小学校交流授業】</b> ここでは、子ども達の笑顔が印象的であった。人懐っこく、到着後すぐに話しかけてくれた。学校の教室は、簡素な作りで、長椅子にぎゅうぎゅう詰めで座っていた。机は足りておらず、教科書なども全員が持っているわけではないようだった。</p> <p>また、交流活動で封筒を作成している時に、日本のシールを貼ってあげると、争うように手を出してきた。また、紙に漢字を書いて渡そうとすると、多くの子供が集まってきた。日本文化への興味ともとれるが、「もの」への執着のようにも思えた。</p> <p>こちらで勤務されている富高隊員の話によると、この日子ども達は何ももらえなかったことに不満を持っていたそうである。先進国の支援の在り方について、考えさせられた。</p> <p><b>【WFP】</b> WFPでは、給食配給のプログラムや、難民支援など幅広く活動を行っていることを知った。また、このような国連機関にも協力隊員が勤務されているということに驚いた。張本隊員がプログラムを行っている各地を周り、調整していることで円滑に活動ができていくように思った。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
8月6日(木)	ムジンバ県南部病院  NGO (Kurya ndiko uku) 視察	<p><b>【ムジンバ県南部病院】</b> 公立の病院では医療費や薬品代はすべて無料ということを知り、日本よりも待遇が良いように思った。しかしながら、無料であるが故に患者の立場が弱く、診察を受けるために長時間待たされるなどということもあるという実態も知った。また、私立の病院もあり、そちらはすべて自費のため、待遇は良いとのことであった。</p> <p><b>【NGO 視察】</b> こちらで働く女性は皆パワフルであった。子ども達が教育を受けられようとするために多くの活動をしているとのことであった。私たちがこちらを訪問した時に、歌を歌いながら歓迎してくれた姿も印象的であった。現地語の歌であったため、意味は分からなかったが、懸命に歌ってくれる姿に気持ちを感じた。どんなに言葉や文化が違っていても、強い思いを持っていれば、相手に伝わるのだと思った。</p>
8月7日(金)	子どもにやさしい地域保健プロジェクト視察  エバングウェニ病院視察 (HIV 患者との対話)	<p><b>【子供にやさしい地域保健プロジェクト】</b> 子どもの身体測定を行っていた。数値などの継続したデータは地域開発において重要である。しかし、現地ボランティアに測定・記録を任せていると、間違いが起きている実態もある。ここで数学教育の重要性を感じた。また、支援をしていく時には、大人の協力が必要となるが、大人を変え、動かすためには、子どもを笑顔にし、信頼を得ることが第一歩であることがよく分かった。</p> <p><b>【エバングウェニ病院】</b> HIV 患者との対話から、HIV に感染しても明るく、オープンに生きられるということが分かった。日本人もより深く HIV について知っていくことが必要だと思う。</p>
8月8日(土)	バンダウエ聴覚障害児支援学校	<p><b>【バンダウエ聴覚障害児支援学校】</b> 日本の特別支援学校では1人の教師あたり4人程度の生徒を見るが、ここでは、1人の教師が20人以上の生徒を見るようになっている。また、教科書も全員分があるわけではなく、音楽・体育・美術などの技能教科の価値に対する理解も不十分であるという実態であった。ただ、それを補うように教師は工夫</p>

日 時	訪 問 先	所 感
	<p>持続可能な土地管理促進プロジェクト</p>	<p>をしていた。恵まれた環境の日本で教育を行う立場の自分の在り方についても見直さねばいけないと感じた。</p> <p><b>【持続可能な土地管理促進プロジェクト】</b> このプロジェクトの説明を聞き、現場を視察していくと、これこそがマラウイ人が最も求めている支援のように感じた。相手の需要にあった支援を適切な方法で行うことが重要であるということが分かった。</p>

学 校 名

宮崎県立佐土原高等学校

氏 名

佐 伯 幸 治

担 当 教 科

地 理 歴 史

## 1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

ズバリ私が思う「生き抜く力」とは「自信」である。昨今の「知識基盤社会」や「グローバル社会」といわれる現社会では、アイデアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性が増大進行しており、我々日本人の取り巻く生活様相・習慣は急速かつ大きく様変わりしている。そういった状況の中で、いかにそうした状況に耐えうる「生きる力」を日本の生徒に育み備えるかは教育界の課題であるため、今回、私は日本人が失いつつある生きるための心意気や工夫を学びたいと思い研修に参加させていただいた。マラウイは予想どおり、貧困や都市部と農村部の格差、人口爆発など様々な問題に直面しており、必死になって生活する人々や何とかして教育を受けようとする子供たちの姿を拝見し、最貧国の現状を体感した。しかしながら、そうした状況であっても、我々が訪問する度に最高の「笑顔」で出迎え、臆することなく、堂々とマラウイ流で我々をもてなす姿に、「自信」がみなぎり、人生を楽しむ「生きる力」が輝いて見えたのは私だけでしょうか。日本やマラウイ、そして世界で目まぐるしく変化するこの混沌とした現況の中で、多様な価値観の中でも自分の価値観を見失わずに生きていけるといふ「自分」をもっていることはたいへん素晴らしく、すごいことだと気づかされました。世界のどこにいても生き抜くことができるためには、自分を信じる力、つまり「自信」をもつこと、そして「自信」を育む教育こそ重要であると実感した研修であった。

## 2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

改めて「百聞は一見にしかず」のことわざのように、現地に赴くといったフィールドワークの重要性を再認識させられた研修であった。まさにマラウイでの研修は、普段の授業で世界の地理や歴史を教え、かつ海外に出向く経験が少なからずある私ですらも、想像を超える驚きの連続であった。そうした直面した問題や状況の現状に触れる中で、まず無意識のうちに持っている固定観念や自分の偏見に、はっと気づかされる機会に恵まれ、またそれらの状況理解や解決のために、様々な方々の意見を聞きつつ、様々な視点や角度で徹底的に考えた経験は、自分自身の想像力や洞察力の幅を広げ、深化させるなどの成長につながった。また生徒たちには、どんな貧困や苦境の状況であっても、夢や生きる希望、あこがれを抱くことが大切だと伝えたい。そう思う理由として、マラウイの人々は、目の前の厳しい現実を直視し、熟知たる考えの上で、夢や希望を持っている。そして、夢や希望を持っているからこそ、一歩ずつではあるが努力して叶えようとする過程の中においても、前向きに「笑顔」が絶えず、そこには幸せが溢れていたからである。ぜひ生徒には、絶え間ない努力が求められる社会を走り続けるために、夢や生きる希望、あこがれを抱き、幅広い物事への興味を喚起させ、理想や夢に向かって自発的に取り組むことで、生きる喜びや楽しみを感じつつ、人生をみんなで謳歌してもらいたい。

### 3 教育指導への活用について

生徒が思い描いた未来を切り開いていくために、我々教師が実践しなければならないことは、一人ひとりの主体性を引き出し、生徒の可能性を開花させることである。そのためには権謀術数で多様化するこの不確実な未来を、生まれ育った環境など「機会の格差」にかかわらずあらゆる生徒が「生き抜く力」を身につけ、より良い社会を創りあげる一社会人に育成しなければならない。そのため、教師はこれらの「生き抜く力」を身につける学びの機会をつくっていかねばなりません。今回、このような素晴らしい研修を受けることができ、いかに生徒に還元していくか多種多様なアプローチはあるが、まずは生徒の物事の本質を見抜く洞察力、判断力を磨く取り組みを行いたい。しかしながら、生徒の実態は現社会情勢の理解不足だけではなく、興味、関心すら示さない生徒が多いのも事実であり、また客観的事実に基づいて推測した将来像（方向性）を描くことのできる生徒は多くはないといっても過言ではない。だからこそ、今回、マラウイで得た多様な教材を利用して、持続発展教育（ESD）、特にフォトランゲージを実践することで、様々なものごとの「違い」を発見することで、「何故？」という疑問を抱かせ、答えを見つける喜びや新たな疑問を生み出すきっかけを体験させることで、物事の本質を知りたいという好奇心を伸ばし「生きる力」を育みたい。

### 4 研修に関する全般的な所感／意見について

変化し続ける社会や環境に対応していくためには、大人になってからも学びの姿勢が必要になる。生徒にその重要性を教え諭す立場である教師なら尚更である。今回、個人旅行では行けない他国の学校現場や JICA のプロジェクトの現状を実際に肌で感じることができ、大変貴重な充実した研修であった。特に振りかえると未だに思い出すのが、学校交流での児童生徒の「笑顔」です。本当に子供の「笑顔」に癒され、元気が出ました。また若い日本人が国際貢献のため、協力隊員として、遠い異国の地で懸命に尽力されていることにたいへん感動した。私も何か国際貢献できないか真剣に考えたほど心を揺さぶられました。最後に日頃はあまり接点のない県外及び様々な校種、教科の先生方、JICA の方々と一緒に様々な視点から話げできたことも大きな成果でした。

### 5 JICA に対する要望・提言

我々の安全を第一優先しながらも様々な点で御配慮いただき、研修を無事に終えたことに感謝しております。また我々の要望にも快く対応していただいたことで、最初の計画になかった綺羅星の湖（The Lake of Stars）」といわれる世界遺産のマラウイ湖も見学でき、記憶に残る素晴らしい経験をすることができました。事前研修で、過去に参加された先生のアドバイスが要所でとても有効で役立ちました。十分に充実したマラウイ研修でしたが、できればもう数名の先生の様々なお助言があると、更なるに成果があがるのではないかと思います。

## 6 今後の本研修参加者へのアドバイス

マラウイは本当に遠かった。しかも飛行機は満席で、随分、気力体力が必要でした。出発直前に1日仕事を休んで、体調を整えて参加して良かったとつくづく思っています。また写真や動画をたくさん撮影したが、小まめに大小容量の違うSDカードを持っていたので、帰ってきてからの整理がしやすかったです。またバッテリーも予備を持って行って助かりました。最後にマラウイの気候は寒かったです。体調が悪くなる方々もいて、私自身ももう少し厚手の衣類を持参すればよかったと反省しています。ただし、スーツケースの重量制限がある（オーバーしたらお金がかかる）ので、考えながら準備して下さい。

## 7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月3日（月）	在マラウイ日本国大使館 表敬  JICA マラウイ事務所訪問  一村一品運動実施能力強化プロジェクト（OVOP）／青年海外協力隊（品質管理・デザイン）視察	○西岡周一郎大使には現状と課題について詳しく説明していただく中で、貧困を解消するためには、「教育と医療」の充実が欠かせず、日本としてはその点を重点に支援しているとお話を頂戴した。また国家予算の30%強の予算を教育に充てているマラウイ政府もその点は重々承知しているが、人口爆発中のマラウイでは、教師や学校など人やモノが足りず、特に数学等の学力不足から統計や規格に対する考えが甘く、物事が計画的に進められない様は、南アフリカのLDC地域では珍しくないことに驚いた。 ○青年海外協力隊の歴史は古く、1971年から40年以上に渡り延べ1600名を越える隊員の派遣実績を有し、現在も約70名の隊員がマラウイ国内の幅広い分野で活躍し、両国の架け橋として、大変大きな貢献をしていることに感動した。 ○都市と農村との経済格差が拡大する中、農村の貧困を少しでも改善するため、大分県の一村一品運動を参考に付加価値の高い特産品を生産し、農村の収益構造の改善を目指しているが、品質管理やマーケティング、デザインの観念がなく隊員の方々のご苦勞は相当なものだと察した。
8月4日（火）	中等理数科教育強化プロジェクト／青年海外協力隊（数学教育）視察	○竹内隊員の授業では、生徒が活発に授業へ参加している姿を拝見し、SMASSEが着実に成果を上げていることに感銘を受けた。また生徒とボール遊びで交流したが、屈託のない笑顔が印象的で、癒された。だが、詳しく現状をお聞きすると、教師の待遇の悪

日時	訪問先	所感
	<p>リロングウェ中等教員養成学校建設現場視察</p> <p>航空管制人材育成プロジェクト/太陽光を利用したクリーンエネルギー導入計画(完工)視察</p>	<p>さがそのまま教師の授業に対するモチベーションの低さに繋がっており、課題も多いとのことを知った。</p> <p>○素晴らしい校舎が建設され、マラウイの教育が少しでも良い方向に向かっていってほしいと願う一方で、建設工事自体はインド企業が請け負い、ネパール人の監督のもと工事が進んでいることを知り、グローバルを感じた。またマラウイ人の作業員の日給が160円で、日本人との経済格差を目の当たりにした。</p> <p>○空港長自ら説明及び巡検にお付き合いくださり、たいへん光栄であった。おかげで普段は空港の中は撮影禁止であるが、思いっ切り写真を撮らせていただいた。これも JICA の支援に対する感謝の表れだと実感した。</p>
<p>8月5日(水)</p>	<p>ミトウンドウ教師研修センター・小学校交流授業</p> <p>国連世界食糧計画(WFP)事務所訪問</p>	<p>○夏休み中でどれだけの児童が集まってくれるか、また交流授業が上手くいくかなどドキドキであったが、富高隊員のご支援もあり、児童たちの物怖じしないフレンドリーな振る舞いに時間を忘れて、とても楽しい一時を過ごさせていただいた。</p> <p>○食は命に直結するもので、WFPの取り組み如何でマラウイの貧困が左右される中、日本の若者が政府やNGOと連携し、業務管理や食糧配給計画などその中枢で活躍していることに感激した。</p>
<p>8月6日(木)</p>	<p>ムジンバ県南部病院訪問 青年海外協力隊(公衆衛生・薬剤師・行政サービス)視察</p> <p>現地NGO(Kurya ndiko uku)視察</p>	<p>○想像していたより随分、施設等は良かったが、医薬品等の不足や職員による物品の横領、診察等の費用が無料である故に、かえってものが言えず、患者が不利益な状況が生まれていることの説明を聞いて、この国の現状をまじまじと考えつつ、改めて日本の医療体制の素晴らしさに気づかされた。</p> <p>○マラウイでは幾度も女性がポジティブに活動されている場に立ち会ったが、この団体も女性の方々が中心となって、自立のため、様々な取り組みを実施している姿を拝見した。美味しい焼きたてのパンや紅茶を頂戴し、心もお腹も満たされ、このような温かいもてなしを受け、さすが「Warm Heart of Africa」の国だと感動した。</p>
<p>8月7日(金)</p>	<p>ジェクトエディングニヘルスセンター 子供にやさしい地域保健プロ視察</p>	<p>○母親が我が子の健やかな成長を願い、遠い道のりを歩いて健康診断、栄養指導を受けている姿は愛に満ちあふれていた。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
	エンバングウェニ病院 青年海外協力隊（エイズ 対策）視察	○日本以上にエイズ教育は熱心で、十分に知識はあるものの、貧困で有るが故に、様々なかたちでエイズに感染している人たちがいることを知り、衝撃的であった。
8月8日（土）	バンダウエ聴覚障害児支 援学校 青年海外協力隊 （障害者支援）視察  ムズズ郊外プロジェクト 試験圃場 持続可能な土 地管理促進プロジェクト 視察	○全寮制のこの学校で、学校施設や部屋等を見学させていただいたが、決して十分ではない環境の中で、親元を離れて必死に生きる術を身に付けようと努力する生徒を見て、日本の生徒にこの現状を見てもらいたいと強く思った。  ○貧困を解消するための、まず一步は主食であるメイズの増産が必要で、マラウイの乾いた大地でいかに持続可能な生産方法を確認するかがプロジェクトの目的で、その対策としてたい肥の改良が行われていた。地理選択の高校生ならば、授業で得た知識から様々な対策案が出ると思うが、「言うは易く行うは難し」で、マラウイの国民性や地理的歴史的背景を考慮しなければそう易々と成果があがらないことを知った。全体的な研修でも言えることだが、当事者に直接話を聞くことで、謎が解け、理解が深まる巡見の重要性を再確認した。

学 校 名

佐賀県立唐津東高等学校

氏 名

中 島 和 哉

担 当 教 科

地理歴史科（地理）

## ① 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

- ・ 「生きているだけでまるもうけ！」  
→笑顔で生きることの大切さ
- ・ 「あれがない” “これがない”と嘆かず、自分たちで作る！ 造る！ 創る！」  
→風力発電やボールなど自分たちで作ることで幸せになる

## ② 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

- ・ 多角的な視点で物事を見ることの大切さ、自分の目で見ることの大切さ！  
→自分の目で見ることによって今までの自分の価値観や物の見方を変えたり、または間違っていたと確信したり、自分で世界を広げることができる（自分自身も生徒も）

## ③ 教育指導への活用について

- ・ 地理の授業の各分野（地形・気候・産業・生活文化・人口問題・環境問題など）で今回の研修で見聞したことを話すことができる（フォトランゲージへの活用も含めて）
- ・ 地理の授業にとどまらず、総合学習の時間などで生徒のキャリア教育に活かすことができる

## ④ 研修に関する全般的な所感／意見について

このような素晴らしい研修を準備していただいた JICA 九州様をはじめとして、研修に同行いただきさまざまなアドバイスを頂いた山崎さんには大変感謝をしております。今後の教員生活の糧になるものを数多くインプットすることができました。またさまざまな校種の教員と共に研修できたことが、この研修の成果をより深いものにしたと確信しています。多角的な視点で物事を見ることができ、多くの事を吸収することができたと思います。このつながりを今後も大切にしていきたいです。

## 5 JICA に対する要望・提言

今回の研修では予定になかった研修に対してもフレキシブルに対応していただいたことで、本当に素晴らしい研修を過ごせたと思っています。安全に配慮することが大前提ですが、今後も研修に参加される先生方の意見を取り入れていただくと、より良い研修になるものと思います。

## 6 今後の本研修参加者へのアドバイス

事前に下調べをしていくことももちろん大事ですが、実際に現地で見えて感じることを最優先にしてもいいのかなと思います。そこで見て感じたことが、生徒が考えること・感じることにつながるような気がします。とにかく自分の**五感で感じる!** それが一番大切なことです。

## 7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月3日(月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 在マラウイ日本国大使館</li> <li>・ JICA マラウイ事務所</li> <li>・ 一村一品プロジェクト</li> </ul>	<p>日本大使館では西岡大使を表敬訪問した。そこでは大使の目から見たマラウイの現状(学校や先生について、日本とのつながりなど)を聞くことができた。これはのちにマラウイ研修のさまざまな場面で垣間見ることができた。</p> <p>一村一品プロジェクトでは、基本的に自給自足の国で、商品を作りそれを販売し持続的な発展につなげること、日本の商品クォリティを伝えることの難しさを感じた。しかし着実に成果として表れているというのを聞き、支援の重要性を実感した。また佐賀県出身の寺崎 SV の活躍には大きな刺激を受けた。</p>
8月4日(火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ムセチェ中等教育学校</li> <li>・ リロングウェ中等教育学校教員養成学校建設現場</li> <li>・ 航空管制人材育成プロジェクト</li> </ul>	<p>ムセチェ中等教育学校では理数科教育の竹内隊員の活動を見学した。そこでは生徒に真摯に向き合い教鞭をとる竹内隊員の姿に感銘を受けた。また生徒たちも楽しそうに授業を受けていた姿が印象的であった。その後の交流では日本から持参したボールを贈呈し、それを使ってアフリカの子どもたちと初めての交流をした。言葉が通じなくても気持ちが通じることを実感した。</p> <p>その後中等教育学校教員養成学校の建設現場を視察した。ここではマツダコンサルタンツの大貫さん</p>

日時	訪問先	所感
		<p>がただ一人の日本人として設計の仕事に従事されていた。彼の「自分の造った建物がこの地に残ることが誇りです。」という言葉に、仕事への情熱を感じた。</p> <p>午後はカムズ国際空港へと向かい、空港内を視察した。空港自体もそうであるが、空港内のさまざまなシステムを日本のODAで構築していることがわかった。また航空管制人材育成プロジェクトでは、田中専門家の活躍はもちろんであるが、マラウイ人が自分たちで育成していくことができるプログラムを構築していることが非常に興味深かった。自立を促すことが支援の一番大切なことだと感じた。</p>
8月5日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ミトゥンドゥ小学校</li> <li>・ WFP 事務所</li> </ul>	<p>ミトゥンドゥの小学校ではこの研修の大きな目的の一つである交流授業を行った。最初はお互いに戸惑いがあったものの徐々に打ち解けていく雰囲気が非常に嬉しかった。限られた時間の中で限られたことしかできなかったが、心に残る交流となった。</p> <p>WFPの事務所では、現在のマラウイの置かれている状況、マラウイにおけるWFPの活動についての説明を受けた。ここで活躍する張本隊員の英語力や仕事に対する姿勢に大きな刺激を受けた。また支援の在り方と自立を促すことの両立の難しさを感じた。</p>
8月6日(木)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カスング郊外風力発電(ウィリアム君の実家)</li> <li>・ ムジンバ県南部病院</li> <li>・ 現地 NGO (Kurya ndiko uku)</li> </ul>	<p>当初計画にはなかったカスング郊外の自家風力発電設備を見に行く機会を得た。日本の英語の教科書にも取り上げられているウィリアム・カムクワンバ君の実家である。実際に彼の造った風車を目の当たりにし、まさに「生き抜く力」を感じることができた。また帰国後、英語の先生との情報共有をできたことは非常によかった。</p> <p>ムジンバ県南部病院では、施設を見学したが、日本の医療施設との違いに衝撃を受けると同時に、その医療施設すら利用できない人が大勢いることに支援の重要性を感じた。</p> <p>その後視察したNGOでは地域のコミュニティ支援の現場を見ることができた。マラウイの女性の力強さを垣間見ることができた。このような小さな力が今後のマラウイを動かしていく大きな力になることを願っている。</p>
8月7日(金)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ エディングニヘルスセンター</li> <li>・ エンバングウェニ病院</li> </ul>	<p>この日も当初予定にはなかった、ISAPHが建設・設置した太陽光発電とワクチン保存用の冷蔵施設を視察した。このような地域に根ざした草の根支援が</p>

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>重要であると感じた。</p> <p>エディンゲニでは、ISAPHの活動と木村隊員の活動を見ることができた。どちらも村の子どもたちの成長を見守り支援するものであった。村人に接する隊員の姿や、それを受け入れている村人の姿に大きな信頼が生まれていると感じた。この活動により状況がドラスティックに変わることはないかもしれないが、この活動で広まった知識や考え方が地域に広まっていけば、子どもたちの生活は大きく変化するのであろう。</p> <p>エンバングウェニ病院では山内隊員の活動に触れることができた。HIV感染者との対談ではHIVと向き合い生きる姿を見ることができた。また山内隊員はHIVの感染拡大防止活動はもとより、感染者のケアに力を入れているところが興味深かった。</p> <p>この日はISAPHや木村・山内両隊員の活動を拝見し、日本の国際協力の底力を強く感じることもできた。</p>
8月8日(土)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バンダウェ聴覚障害児支援学校</li> <li>・ ムズズ郊外土地改良試験圃場</li> </ul>	<p>バンダウェ聴覚障害児支援学校では、角田隊員の活動を見学した。日本のように十分な人材や施設・教材がないにもかかわらず、手作りの教材などを使い子どもたちの教育に尽力する姿勢には心を打たれた。</p> <p>ムズズ郊外土地改良プロジェクトでは、堆肥を使った土地の改良試験場を見ることができた。日本の技術を用い、マラウイの農業の持続的な発展に貢献していることに日本人としての誇りを感じた。お金をかけるのではなく、マラウイにあるものを利用することこそ、持続的な発展・開発につながっていくのだと感じた。</p>
ま と め	<p>この研修では、日本の途上国支援の本質を見ることができたと思う。</p> <p>現地のニーズに応じたものを、現地に入り込み支援する。しかも短期的・単発的な支援に終始するのではなく、今後現地の人材によって持続的に受け継がれるように支援しているところが、大きく印象に残っている。</p> <p>資本を大量に投下してインフラや箱モノを整備することも重要であるが、日本の支援のように「人材を育成する」、「国家（土地）を育成する」というソフトの開発を行うことが、真の途上国支援であると感じた。</p> <p>また協力隊員の姿勢にも感銘を受けた。自分の人生の一部を途上国支援に捧げ、自分の支援の何かを現地に残したいと活動する姿は、単純にまぶしくかっこいいものであった。今後私の教えた生徒の中から一人でもこのような活動に参加する生徒が出てくれることを願っている。また私自身も何らかの形で、国際貢献していきたいと考えるきっかけになった研修でした。</p>	

学 校 名

佐賀県立武雄高等学校

氏 名

柴 田 邦 博

担 当 教 科

英 語 科

## ① 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

### 「世界を小さく感じる力」

世界へ出ること、働くことを大仰に捉えるのではなく、近所に行く感覚で世界に出て行くことができたなら、たとえ日本で難しかったとしてもどこかで生きていけるはずだ。

## ② 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

### (1) 自身の成長につながったこと

- ① アフリカ大陸に初めて足を踏み入れたという事実。
- ② 他校種、他教科、他県の先生方と一緒に研修に参加したこと。

### (2) 子供たちに伝えたいこと

- ① 教育の重要性。とりわけ、算数・数学の重要性。  
 (マラウイに限ったことではないが、) 大人の認識を変えることは極めて難しい、ということをおっしゃっていた日本人が多かった。そういった意味で、子どもへの教育は国の発展に重要な役割を果たすのであろう。また、日常生活や国の基盤を作る上で、算数や数学の知識が必要であることを至る所で実感した。
- ② アフリカを一緒にくたに捉えないこと。  
 私を含め、多くの日本人は「アフリカ」を正しく理解しておらず、「アフリカ＝貧しい」「アフリカ＝暑い」といった一元的な理解にとどまっているように思われる。今回知ったマラウイの現状を伝えることでアフリカへの正しい理解へとつなげたい。

## ③ 教育指導への活用について

- (1) 文化祭で「ひとり万博マラウイ館」を開催し、マラウイへの理解促進、興味関心の喚起を図る。
- (2) 今回の研修を通して疑問に思ったことを英語ダイバート、ディスカッションの論題として活用する。
  - ① Which is happier, Malawian or Japanese?
  - ② Developed countries should stop donations to developing countries.
  - ③ Malawian government should promote economic development.
  - ④ All the medical expenses should be paid by the public.
  - ⑤ What can we do to end poverty?

## 4 研修に関する全般的な所感／意見について

研修先が「教育」「医療保健」「産業振興」「農業」など多岐にわたり、様々な角度からマラウイという国を捉えることができた。そして、図らずも「教育」という共通の課題が浮き彫りになった。社会の基盤を形成するのが教育であることを実感するとともに、自分自身がその教育に携わっていることへの責任の重さを痛感した。

## 5 JICA に対する要望・提言

- (1) 私たちの要望等に対し、現地の JICA スタッフの方々が柔軟に対応していただいた。大変な面もあるでしょうが、今後も今回のような対応をしていただくと参加者にとってはありがたいと思います。
- (2) 大変素晴らしい研修なのですが、まだこの研修の存在自体を知らない現場の先生方も少ないようです。ちなみに私の勤務校では、英語科の回覧としてこの情報が回ってきました。国際理解教育は特定の教科の教員が担うべきものではないので、教育委員会等管理機関と連携の上、該当の全先生に周知されることを強く望みます。

## 6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- (1) 今回、参加者の事前事後の連絡ツールとして google groups のメーリングリストを利用しました。  
gmail を利用している方には便利だったのですが、それ以外のメールを利用している方にとっては不都合な面もあったようです。
- (2) 訪問先で出会った隊員のビデオメッセージを撮っておくと、授業等で活用できると思います。
- (3) 隊員への日本のお菓子、食べ物のお土産は大変喜ばれます。特に、僻地で活動する隊員には歓声上がるほど大好評でした。他のメンバーが準備してくれたのですが、私もできるだけ持っていくべきだったと後悔しました。
- (4) 「旅の恥はかき捨て」と言いますし、勇気を持っているんな人と話しかけたほうがいいと思います。

## 7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月3日(月)	① 在マラウイ日本国大使館 ② JICA マラウイ事務所 ③ OVOP 事務所・ショップ	① 振り返ってみると、本研修はこの時に西岡大使からお聞きした話（国民性、この国が抱える課題など）を検証するものだったように思えた。その一つ一つが正しかった。 ② 徳橋所長のマラウイへの愛、未来にかける期待をひしひしと感ずることができた。 ③ 一村一品運動をビジネスとして成立させることの難しさを実感した。おおらかな国民性にビジネスマインドを植え付けようとする日本人スタッフの苦労はいかばかりか計り知れない。
8月4日(火)	① ムセチュエ中高等学校 ② リロングウェ中等教員養成学校建設現場 ③ カムズ国際空港、航空管制学校	① 授業見学だけでなく、15分程度教壇に立ち、「夢」についての授業を行うことができた。教壇から見たマラウイの中高生は日本の中高生と何ら違いはなかった。授業後の交流の時間では、「マラウイでは土葬だか、日本はどうか。」「神を信じるか。」「貧しい国に住む私たちは何を頑張ればよいか。」など意外な質問が多く、答えに窮することも多かった。 ② 日本の支援により、立派な学校が建設中だった。設備にふさわしい教員養成、教育実践が行われることを期待したい。 ③ 多くの国家機密を含むであろう国際空港の内部を惜しげもなく公開していただいたところに、日本及びJICAとマラウイの信頼関係を見た気がした。
8月5日(水)	① ミトゥンドゥ教師研修センター・小学校 ② 国連世界食糧計画(WFP)事務所	① 教室に入った時、(空席があるにもかかわらず)子供たちが席をつめて座っている姿が印象的だった。すし詰め状態で授業を受けている普段の様子が想像できた。屈託のない笑顔を見せていた子どもが、急に淋しい表情をうかべ、“Give me some gifts.”と言った。donationのあり方を考えるきっかけとなった。 ② 給食支援など子どもを対象とした支援プログラムに強い関心を持った。栄養改善だけでなく就学率向上の狙いもあるようだが、「たとえ給食で子どもたちが学校に来るようになったとしても、肝心の教育の質が高くなければ…」と担当者が言われていたことが心に残った。

日 時	訪 問 先	所 感
8月6日(木)	① William Kamkwamba 氏生家  ② ムジンバ県南部病院  ③ 現地 NGO (Kurya ndiko uku)	① 現地スタッフの計らいで、私がこの研修に参加するきっかけとなった William 氏の生家を訪れることができた。このことは、私にとってこの研修一番の収穫と言える。 ② 病室に入り、多くの患者の様子を視察できたことは、この国で患者の立場が弱いことと患者のプライバシー保護の考えがないことを示しているように思えた。 ③ まず最初の歓迎のダンスに心奪われた。おもてなしのパンの味も格別、リーダーの女性の英語や説明も秀逸で、どのようにして donation を獲得するかの術を心得ておられるようだった。
8月7日(金)	① エディングニヘルスセンター  ② エンバングウェニ病院	① 「表に子どもの身長体重を正しく記入する」「グラフから子どもの状態を読み取る」といった日本では当然のこともままならないようで、教育の重要性をまざまざと見せつけられた。また、同行者の山崎さんが、現地の NGO スタッフに短い時間の中で様々なことを伝えようとされている姿が印象的だった。 ② HIV 陽性者の話の中の“HIV positive doesn't mean the end of life.”という言葉が忘れられない。陽性者であることを公開し、前向きに生きていこうという意志が伝わってきた。
8月8日(土)	① バンダウエ聴覚障害児支援学校  ② ムズズ郊外プロジェクト試験圃場	① 「住居手当がない。」「新任の教師と（経験のある）自分と待遇が変わらない。」と現地の先生がぼやいておられた。教員の待遇を改善し、教員が誇りを持って教育に取り組むことがこの国の教育をよくすることにつながるのであろうと思われた。 ② コンポスト及び有機肥料の活用がマラウイ全土に広がることを願ってやまない。新しい農法への抵抗も不安視したが、収穫高が上がることを見せれば、現地の農民は理解してくれることを知り、やはり人間は実利には弱いのだなと感じた。
8月9日(日)	① カタベイ	① ルート変更によって、観光地カタベイを訪れ、マラウイ湖を満喫できた。この美しい観光資源を国家として活かさない手はないと思う。

学 校 名

鹿児島県さつま町立盈進小学校

氏 名

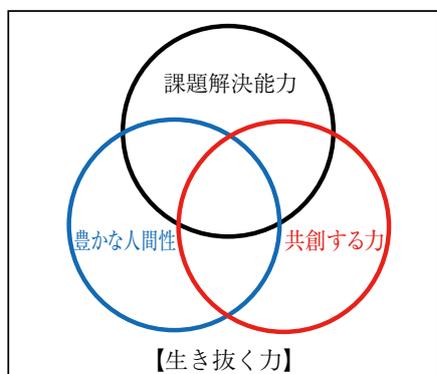
岡 留 真 吾

担当教科

国語科

## 1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

気候変動と環境問題、現在の70億人の世界人口が、2050年後には90億人になると予想されている人口爆発、それに伴って食糧不足、水不足、石油枯渇によるエネルギー不足の問題が叫ばれている。さらには東日本大震災などの予期せぬ自然災害、60才が中年となってしまうであろう超高齢化社会、情報化社会とグローバル社会の一層の進展に伴い生じてくる未知なる課題など、これからの予測不能な社会に乗り出していく子供たちが備えるべき能力を一言で表すものとして「生き抜く力」がふさわしいのではないかと感じる。



私は「生き抜く力」を左図の3要素として捉えた。一つ目に「課題解決能力」である。これからの社会では、「答えのない問題や課題」「かつて経験したことのない問題」に自分で解決方法を見出す力がいっそう求められるからだ。

2つ目に「共創する力」である。グローバル社会の進展に伴い、現代の世の中は、性別、国籍、年齢、個性、宗教や文化、価値観等、多様な立場の人間が一緒にチームとして協働する社会と言える。そこでは、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えること

ができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たし、他者と協力、協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することのできる人間が求められているからだ。

3つ目に「豊かな人間力」である。エネルギー、食料、水を分け合う時代から権利を求めて奪い合う世の中の到来が見えている。上述した未知なる課題が次々に出てくる先行き不透明で予測不能な世の中がやってくるような気がしてならない。どんなに個人の課題解決能力、共創する力が優れていても、迫り来る困難や苦しさに打ち勝つ強さがないと生き抜くことはできない。いわばこれからの世界は「逆境を跳ね返す強さとたくましさ」「苦しさを苦しきとも思わず、逆に幸せなのだ。」と思える人間としての心の豊かさが必要になってくると考える。

私はマラウイで出会った全ての子供たちの目にたくましさを感じ、笑顔に美しさを感じた。「なぜなのだろう。」と2週間ずっと考えていた。中には家族を支えるためにたばこ農園等で働き続けて学校に通えない子供たち、重たい水を何時間もかけて運ぶ子供たち、栄養の質も量も十分とは言えない食事をとらざるを得ない子供たち、ゲームやおもちゃなどあるはずもない子供たち。それでも、ビニール袋を利用して自分でボールを作り、サッカーを心の底から楽しむ子供たち。GNI270ドルと貧困が課題であるにもかかわらず、「自分の今の生活は幸せだ。」と感じることのできる心の豊かさ。この豊かな人間性は、日常生活が便利であればあるほど、物が豊かであればあるほど醸成しにくいものだと感じる。私の学級の子供の中にも、「時間がないから、学校まで親に送ってもらいました。」「今の一番の悩みは宿題が多いこと。」「勉強が面倒くさいし、だりい。」「外に出ると暑いので家でゲームをする。」「どうせ無理だし。やっても意味ないし。」などと漏らす子供が多い。今の日本人に一番欠けているものだと感じる。

3つの要素全てを持ち合わせていないとこの先行き不透明な世の中を生き抜いていくことはできない。この研修を通し、「生き抜く力」とは、この3つの要素を全て兼ね備えた力（ベン図で言う真ん中の部分）であると考える。

## 2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

私がこの視察を通して自分自身の成長につながったことは、以下の3つを感じ取ることができたことである。子供たちに伝えたいことも同様である。

- ① 「豊かな人間力」～本当の幸せに気付く力
- ② 世界の中の日本を意識し、適切な行動を考え実践すること
- ③ 読書のみならず絶えず見聞して自分を高めること

①は、先に述べたとおりである。②については、水不足問題・食糧不足や栄養不足問題・不十分な医療制度等のために、マラウイにおける5才未満児の死亡率が8.3%（日本は0.3%でおおよそ28倍 出典「ユニセフ世界子供白書2013」より）であること。その裏で、食料輸入に頼りっぱなしの日本が、世界の食糧価格の高騰に拍車を掛けていること。年間640億m<sup>3</sup>のバーチャルウォーターを世界から輸入していること。先進国日本の経済・貿易・政治等が、世界の様々な問題と連動しており、「私たち日本人には関係ない話。」ではもはや済ますことはできなくなっている。世界に頼らざるを得ない日本の現状。だからこそ、自国の利益のみを追求する国になるのではなく、他国の幸せと平和のことも考え、行動できる品格ある日本人であるべきだと思った。

③については、私は常に自己研鑽に努め自身の見方や考え方を更新していくようにしている。そして教育分野だけでなく、政治・経済等今まで知らなかった知識を身に付けて視野を広げるようにしている。そのためには、読書が欠かせない。

しかし、本視察を通して、読書では決して味わうことのできないことを体験することができた。現地で見聞きすること、肌で感じることに「なぜだろう。」と疑問を覚えたり、帰国後に「あれは、どういうことだったのだろう。調べてみよう。」と知識欲が高まったりしたことである。40代になり、若い頃に比べて読書量が増えたと同時に、実際にいろいろな場所に足を運んで見聞きすることが少なくなった。テレビやインターネットで見る情報は人事の意識でしか見ることができなかった。「百聞は一見にしかず」である。今後も絶えず体験すること、自分自身で足を運び五感で感じてみることを大切にしたい。

## 3 教育指導への活用について

以下の3点で授業化が期待できる。

- ① 2で述べたことが、道徳における自己の生き方を考える指導に生かすことができる。
- ② 6年生社会科における「日本とつながりの深い国々」の中で『日本とマラウイの文化や習慣の違いに気付くとともに、ODAやNGO等でマラウイの人々と共に生きていくには、異なる文化や習慣を理解し合う事が大切である。』ことを目標にした授業化が期待できる。

- ③ 6年生社会科における「明日の世界と日本の役割」の中で、『JICAのマラウイに対する国際協力の実態を調べる。WFPの食料援助計画を取り上げることで国際連合の働きを調べる。日本とマラウイの国際交流について意欲的に調べる。それらの活動を通して世界平和の大切さと日本が世界において重要な役割を果たしていることを考え、世界の平和を守るために大切なことは何か、自分の考えをもたせる』ことを目標にした授業化が期待できる。

## 4 研修に関する全般的な所感／意見について

怪我や病気をする仲間が一人もおらず、終始笑顔で充実した研修を終えることができた。同行していただいた聖マリア病院の山崎さん、JICA九州の立野さんをはじめ、本研修に御尽力いただいたJICAの全てのスタッフの皆様にここに御礼を申し上げる。

## 5 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月3日 (月)	マラウイ 日本大使館 大使講話	「今の日本は、もっと世界の中の日本を自覚しなければいけない。日本の子供たちには一度海外に出て、海外から見た日本の姿や日本の責任について考えて欲しい。」との大使の言葉があった。日本の高校生や大学生、さらには教員の初任者研修などでこのような研修があれば、「世界の中の日本」を意識できる日本人の育成が図られると感じた。
8月3日 (月)	JICA 事務所 所長講話	「25年前にザンビアである日本の隊員が『車を作れる国にしたい。』と語ったときに皆から笑われたそうである。しかし、今では携帯の工場ができています。GNIが2年連続で最下位のマラウイだが、教育の整備次第で必ず豊かになれる。」との所長の言葉が印象に残った。戦後日本が国際的な援助を多分に受けて復興してきたように、国際社会における日本の役割がここにあると感じた。
8月3日 (月)	OVOP 事務局視察	村の特産物を生かして収入を最大限得る活動の支援を協力隊員が展開している。「品質の向上、十分な供給量、機械のメンテナンス、帳簿管理、市場開拓などの具体的な援助を行っており、一定の成果を出している。『もっと工夫すればさらに利益が上がる。』そのような意識を村人が持てない現状をどう打開していくかが課題である。」と隊員が述べられていた。技術の知識伝達に終わるのではなく、村人の意識改革に目を向けていることが素晴らしいと感じた。工夫した商品同士を互いに見せ合ってコンテストを開くなど競争原理を取り

日 時	訪 問 先	所 感
		入れたり、たくさんの利益を出している村と自分たちの村の現状を比較させて困り感をもたせたりするなどの創意工夫がさらに必要であると感じた。
8月4日 (火)	ムセチェ 中等理数科教育強化プロジェクト／青年海外協力隊（数学教育）視察	隊員の中等数学科の授業を参観した。チョーク & トークと言われように教室の学習環境が十分整っていなかったり、教材・教具を準備する予算がなかったりすること。また、隊員との話の中で現地の数学の先生は、図形感覚に未熟であったり、負の概念を理解していなかったりなど先生方の授業力の資質・能力にも驚かされた。
8月4日 (火)	リロングウェ中等教員養成学校建設現場視察（ムセチェ）	平成16年に「ドマシ教員養成校改善計画」での5億6800万円の無償資金協力を続いているODAの政策の一部である。日本のODAの規模の大きさに驚いたが、先のムセチェで聞いた理数教育の不十分さを考えると、マラウイが発展していくための大事なプロジェクトと言えよう。日本の松田コンサルタントが現場建設指導に当たっており、その建設技術の素晴らしさに感動した。
8月4日 (火)	航空管制人材育成プロジェクト／太陽光クリーンエネルギー導入計画視察	マラウイの空港整備、ETCシミュレーター等のハイテク機器の提供など航空管制人材育成のJICAプロジェクトの説明を受けた。JICA専門員である水政氏が、「マラウイの理数教育のひずみがこのプロジェクトに顕著に出ている。飛行機の進入角度をマラウイの方に計算するように求めるが、高校で習う関数の基礎ができていないために、求めることができない。飛行速度から到着時刻を計算することができない。技術支援といっても一朝一夕にはできない難しさがあるんだよ。」とおっしゃられたのが印象に残っている。改めて理数教育の大切さを実感した。氏の「日本の子供たちに必要な力は、耐性である。何事も物事はうまくいかないようにできている。粘り強く解決していけるように、我慢を強いる教育を熱望する。」の言葉には同感であった。
8月5日 (水)	ミトゥンドゥ教師研修センター、小学校にて交流授業	「幸せなら手をたたこう」を英語とチェワ語で子供たちに披露した。一緒にリズムをとってくれたり歌ったりしてくれたことが嬉しかった。さらには個別で準備していた折り紙、手紙制作グッズなど子供たちが喜んで取り組んでいた。しかし、とある先生が余った折り紙を子供たちにプレゼントしていたが、物を与えるとなると子供たちが一気に押し寄せて半ば混乱状態になった。物質的に豊かではないこの国においては、遊びにおいてさえも「ボランティアや支援者がいなくなったとしても、自分たちで課題を見つけ解決していける力、自分たちで自立していくだけの力」を身に付けることの支援が大切なのだと改めて感じた。

日 時	訪 問 先	所 感
8月5日 (水)	国連世界食糧計画 (WFP) 事務所訪問	WFP では国内の栄養失調児等の保健栄養改善プログラムに取り組んでいる。主な活動としては、 ① 2才以下の栄養失調児への調査 ②給食プログラム ③ 5年生から8年生までの女の子と孤児の男の子への食べ物の持ち帰り計画 食べるものが足りずに栄養状態のよくない子供たちがたくさんいるという現実、どうも他人事のように思えなかった。マラウイの主食であるメイズ（とうもろこし）は、日本では輸入している8割が畜産の飼料として使われている。今後予想される人口爆発、食料不足と食料自給、水の枯渇、先進国と発展途上国のフェアトレード等世界の中の矛盾を大きく感じた。
8月6日 (木)	首都リロングウェから 北部へワゴンで移動	「風をつかまえた少年」の主人公として一躍有名になったウィリアム＝カムクワンバ氏の家に途中立ち寄っていただいた。彼は、14才の頃に家が貧しくて学校に行けなくなった。彼は、食糧不足に悩む家庭を助けるため、一人図書館に通いつめ独学で風力発電システムを学び、廃材を使って風力発電を成功させた。そして、その発電システムを使ってスプリンクラーを作って両親の農業を助けたそうである。実際に家に行くと、彼が自転車のダイナモ等を利用して作った発電機が残っており感動した。教育が受けられない状況下においても、貧困に負けずこのように自らの力で解決していける子供はごく珍しいといえる。それでも、このような不撓不屈の精神、誰かのために自ら学ぼうとする精神をもった子供たちを育成していくことを目標に教育にあたらなければいけないと感じた。
8月6日 (木)	ムジンバ県南部病院 視察	この病院で薬剤師として働いている隊員に活動内容や病院の中を説明していただいた。医療サービスや仕事観における現地スタッフの向き合い方とのズレに苦労されていたようだ。現地スタッフの一つ一つの行動の裏側にあるシステムや社会体制まで汲み取り、協力隊員として何が残せるのか考えて行動することの難しさを改めて感じた。
8月6日 (木)	現地 NGO (Kurya ndiko uku) 視察	現地コミュニティー組織である CBO の中で最も活動状況のよい場所を視察できた。パン作り、民芸品作り、寄宿寮の自己建設など、CBO 全体が一つの方向に向かって一致団結している印象を受けた。やはり適切なリーダーシップを発揮できるリーダーの存在が大きいのだろうと感じた。

日 時	訪 問 先	所 感
8月7日 (金)	エディングニヘルスセンター視察	<p>5才未満の子供の身長や体重を測定する活動等を通して、保護者が子供の栄養教育に関心をもち、進んで栄養改善の食事づくりができるようにするための取組を日本のNGO団体や協力隊の方が支援している。以下のような課題点がある。</p> <p>① 理数教育のひずみが出ており、現地の母親が数値のメモリをよむことができなかつたり、数値を見ての変容が分からなかつたりする。</p> <p>② 地理的・経済的に恵まれていない家庭は、子供を連れてくることができず、栄養失調児がいたとしても対処できない。</p> <p>③ 現地ボランティアやヘルスアシスタントが育っていない。</p> <p>等、人材・物資・システムともに不十分な環境の中でも、現地の母親の心の中にまで入り込んで、ほんのわずかな子供の成長を見逃さない日本人隊員の気概に感動した。</p>
8月7日 (金)	エンバングウェニ病院視察 HIV感染者との対話	<p>CBOの中には、HIV陽性者のサポートグループも存在する。そのサポートの手伝いをしているムジンバ県社会福祉事務所で隊員として活躍する山内さんの話を聞くことができた。一夫多妻、男尊女卑の風潮、貧困、正しい知識の不足等あらゆる課題が複雑に絡み合った問題であると感じた。ただ、HIV感染者との対話の中で、当人が目標や生きがいをもって毎日を過ごしていること、またそのお手伝いに日本人隊員が尽力している現実にも希望を見い出すことができた。</p>
8月8日 (土)	バンダウェ聴覚障害児支援学校視察	<p>隊員として働いている角田さんの言葉で印象に残っていることに、</p> <p>「自閉症その他障がいをもっている子供への偏見が多い。障がいをもっている子供のおよそ半分は母親がその事実を隠して、学校まで通わせていない。今、特別支援学校に行っている子供は氷山の一角です。」「この先生方は、先ほどは皆さんに偉そうに自分の学校の説明をしていたけど、普段はちゃんとやってないですよ。こういうときだけやっているように見せているだけですよ。」と言われたことだ。女性に対する差別のみならず、障がいを抱えている子供への偏見。さらには、教育施設の整備や教職員の資質向上。課題は山積みである。「この国が発展していくための重要な政策は、教育である。」とはよく言われることだが、バランス感覚のある人権意識、充実した医療と農業（食糧問題）全てが整っていることが前提条件であるとも感じた。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
8月8日 (土)	ムズズ郊外プロジェクト農業試験場視察	マラウイにおける農業政策の充実、土地管理技術の全国普及を目標にマラウイの大地に適応した有機農法の研究をJICAが現地スタッフと共同して行っている。マラウイの土に適合した有機肥料はどんな配合がベストなのか研究過程を説明してくださった。懸念される人口爆発、それに伴う食糧危機問題など、世界の問題は日本の問題と言える。食糧自給率が40%を切ってしまった日本。その多くをアメリカから輸入している日本。資本のある国だけが食料を買い占め、そうでない国は食料を奪い合う時代を誘発したアメリカの市場戦略に加担してしまった日本。今、各国の食糧自給率を上げるために世界の中の日本が果たす役割は大きいといえ、この取組の素晴らしさを感じた。
8月9日 (日)	マラウイ湖見学	世界遺産であるマラウイ湖を見学できることになった。海を思わせるような果てしなく続く水平線。白い砂浜とエメラルドグリーンの水がとても美しいマラウイ湖。この湖には魚の種類が豊富で、チャンボと言われ一般の食卓にも登場する食用魚が有名だそうで素直に驚いた。さらには、熱帯魚のようなカラフルな魚も数多く生息し、ダイビングスポットでもある。日本にも観賞魚として広く輸入されている。ここには、住血吸虫と言われる寄生虫が生息しており、水に入った人などの皮膚から体内に侵入し、様々な症状を引き起こしている。現地人がこの湖で体を洗ったり、欧米人が薬を飲んでダイビングしたりという光景を見たが、やはり住血吸虫で今だに苦しんでいる方も多いいという。驚きを隠せなかった。
8月9日 (日)	ワゴンにて陸路リロングウェに移動	途中でバオバブの木を見学。大木には10トンもの水分を幹にたくわえており、乾季になると葉を落とし休眠する。自然の素晴らしさに感動する。
8月10日 (月)	JICA 事務所にて研修報告(1人3分報告)	今研修にて一番心に残ったことは、日本から飛行機で丸一日かけてたどり着いたマラウイ。その首都のリロングウェからさらに信じられないくらいのダート道を5時間かけてたどり着いた北部ムジンバ県エディングニ。「こんなところに日本人がいるのか。そして店もない、ガスもない、風呂もないこの地で栄養失調児のために頑張っている日本の青年がいるのか。しかもこんな隊員がマラウイに100人近くも…。」と素直に驚いた。領土問題・環境問題・食糧問題・難民支援・国連平和維持活動等、日本は世界の国々と密接につながり合っている。いわば「世界の中の日本」という意識をさらにもたなければいけないと感じた。そのような子供たちを育成していかなければいけない。

学 校 名

福岡県立福岡高等視覚特別支援学校

氏 名

古 賀 富 士 子

担 当 教 科

英 語 科

## 1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

日本から遠く離れた、コンビニも自販機もなく、水、電気、トイレにも不自由する厳しい住環境の国、マラウイで私が見つけた「生き抜く力」とは、敗戦後、廃墟の中から立ち上がった日本人と似たパワフルな姿であった。「他と比較などせず、目の前の現実をありのまま受け入れ、そこから出発する力」である。子どもたちの笑顔はキラキラしていて、カメラを向ける私たちに人懐っこく近づいてくる。幼い妹弟を背中におぶって学校に通い、自分でビニールを集めボールを作って遊び、ジュース、ボール、トマトや乾燥ねずみなど様々な物を生活のために路上で売っていた。また、教員養成学校建設現場で働く労働者は、1日160円の給料で働き、昼休みになるとヘルメットに水を汲んで行き、自ら火を起し、湯を沸かし、シマ（とうもろこしの粉をのり状にしたマラウイ人の主食）を作り食べていた。物が無いことを嘆いても何も生まれない。物がなくても、そこにある物から何かをつくり出そうとする力が彼らにはあった。「自力で生きているたくましさ」を感じた。また、海外に出て、私は遠く離れたところから日本と比較することができた。既存の枠や常識にとらわれない多くの価値観に接する機会をもつことができた。その中で、自分とは異なる価値観を持つ人を頭から否定せず、異なる価値観を受け入れ、つきあっていこうとする力こそ、グローバル化の進む現代に生きる私たちに、必要な「生き抜く力」であることを知った。そして、「国際理解は、最終的には人間理解になり、生き抜く力になっていく」ということを学んだ。

## 2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

日本とは、かけ離れた生活スタイルをもつ「マラウイ」というアフリカの一国を知ったことで、「日本人はどれほど豊かな生活をしているのか」ということを改めて気付かされた。また、それまで自分がいかに固定観念に縛られ、一方的な見方をしていることが何と多いかと気付いた。日本の外から、私たちの国を、学校を、自らを客観視することで、自分の視野が狭いことを学んだ。生徒たちにも、目先のことばかりではなく、世界的視野をもって、「世界の問題を日本の問題、日本の問題は自分の問題」として考えることが大切だと一番に伝えたい。そして、人の話を聞いただけで、それを鵜呑みにせず、「百聞は一見に如かず」で、何事も、自分の五感で確認することの大切さを生徒たちに伝えていきたい。また、今回初めてJICAの隊員や専門家の方々の活動を視察することができた。日本が世界のいろいろな国や地域で、さまざまな技術支援を行っていることを生徒たちに伝え、幅広い授業の糧としていきたい。そして、本研修全体を通して、何よりも教育が大切であることを改めて確信した。教育者として心新たに、日本の将来をつくる生徒たちに、自分が学んだことを丁寧に伝えていきたいと思う。

### ③ 教育指導への活用について

今回、マラウイで撮影した写真や動画の他、マラウイで入手したものすべてを教材として、

#### (1) 教科の授業（英語）において

マラウイの発明家 William Kamkwamba を取り上げている教科書が何冊もあるので、生徒の習熟度に応じた英文を選んで読んでいき、それらを通して、マラウイ国についてだけでなく、William Kamkwamba の生き方について考えさせたい。

#### (2) 総合学習や生活単元の時間において

異文化理解や国際協力、国際貢献など、さまざまな視点から、また、キャリア教育の視点から、特に、キャリア発達の「人間関係・社会形成能力」を育成するために、今回得た見聞を教材活用していきたい。

#### (3) その他

全校集会、図書部の読み聞かせ会、保健部の保健だより、掲示板を活用して、マラウイで学んだことを、全校生徒に伝えていきたいと思う。

#### ※指導における配慮点

- ・ 生徒は視覚障害を有するので、全盲生でも動画・画像をイメージできるように、的確な言葉で説明を加え、触地図や模型等を作成して、触覚を用いて理解できるような工夫をしていきたいと思う。
- ・ シマ作り、マラウイのお菓子の試食や紅茶の試飲、巻きスカート（チテンジ布）の試着、頭上でバケツを運ぶ体験など、マラウイを五感で感じる活動を取り入れたい。また、『どっちが幸せか、マラウイ人それとも日本人?』というテーマに、相対する意見を両方の立場からそれぞれの理由を考え、ディベート活動に発展させ、最後に、マラウイの学習のまとめとして、William 君に電子メールを送信するなど、生徒自らが積極的に授業に参加できるような授業を組み立てていきたいと考えている。

### ④ 研修に関する全般的な所感／意見について

一言で言うと本研修は、とても安全な研修であった。初めてのアフリカ、しかも最貧国ということで健康面や衛生面でかなり神経質になったが、実際に行くとそうでもなかったように思う。勿論、それなりの対策をして臨んだので何も起こらなかったわけであるが、危険な場面に遭遇することも、体調を崩すこともなく無事に帰国することができた。一日一日の内容がとても濃く、立ち止まる暇がなく、始まったら最終日まで一気に時間が流れたように思う。要望としては、本研修の募集をあと一、二週間早めて、研修の準備や、特に予防接種のための時間を与えて欲しい。

## 5 JICA に対する要望・提言

今回、本研修に参加することができて、心より感謝している。このような研修があることをこれまで知る機会がなかった。JICA の役割がいかに大切であるか、日本人の世界への貢献を具体的に示し、文科省とタイアップして、もっと本研修について宣伝していただきたいと願う。

## 6 今後の本研修参加者へのアドバイス

「JICA つくばの H26 年度報告書」を必読されるがよい。研修の準備段階で、私たちだけではなく生徒たちがどういう準備をして、実践授業でどのように派遣先の子どもたちと相互理解させるか、「報告書」にはさまざまなヒントが書かれている。出発前に、可能な限り実践授業のことを具体的に考えておくと、現地で必要な写真や動画が撮影できる。数多く撮ったつもりでいたが、教材として使えるものを選ぶ際に、「もっとこの場面を撮っておくべきだった」と、後々思うことが多くなる。また、体力が重要である。長時間フライトやラフロードでの長時間ドライブは、想像以上に体に堪えるので、日頃から運動をして体を鍛えておいたがよい。

## 7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8 月 3 日 (月)	① 在マラウイ日本国大使館 表敬 ② JICA 事務所オリエン テーション ③ 技プロ OVOP 運動視察  (手書きの領収書)	○「マラウイ人は向上心がなく現状満足型である」 「マラウイ人は争いを好まぬ、アフリカの温かい心を持 っている国民」であると説明があった。西岡大使も徳橋所 長も、マラウイをととても愛されており、現地での生活 を楽しんである印象を受けた。 ○ 大分の一村一品運動を参考に、マラウイで商品開 発に励まれている隊員の方々の奮闘ぶりを知ることが できた。将来、観光で人を呼びよせ、土産物として販 売し、購入してもらうには、商品開発・改良や宣伝方 法など数多くの問題が山積している。特に、価格表示 がないこと、手書きの領収書には唖然としてしまっ た。マラウイで「お客様は神様です」は、通用しない。

日 時	訪 問 先	所 感
8月4日(火)	<p>① 技プロ 中等理数科教育強化プロジェクト視察</p>  <p>(制服を着用した生徒たち)</p> <p>② 教員養成学校建設現場視察</p>  <p>(安全第一を呼びかけた看板)</p> <p>③ 技プロ 航空管制人材育成プロジェクト(カムズ国際空港)視察</p>  <p>(エレベーターなしの管制塔)</p>	<p>○ 生徒たちは、熱心に授業を聴いて問題を解いていた。「教育を受けて豊かになる」という彼らの意欲・希望が伝わってきた。生徒たちとの交流で、生徒に夢を聞いたが、女子生徒は看護師、男子生徒はエンジニアとの答えがほとんどであった。生徒たちの意欲とは反対に、教員の意欲が低く、学校に来ない、また来ても授業をしないという話に驚いた。そんな中で、マラウイ人の先生方とコミュニケーションをとりながら、生徒の学力向上のため奮闘されている隊員の方々のご苦勞に頭が下がる思いだった。</p> <p>○ 13億円をかけ、来年9月開校予定の教員養成学校が日本人専門家の指揮の下、毎日900名の労働者が雇われ建設中だった。来年、ここにどんな学生が集まってくるのか。この国の子どもたちに学力をつけ、看護師、エンジニア以外にもたくさんの夢を語る子どもたちを育てる教員が、この新しい養成学校から育てて欲しいと強く思った。</p> <p>○ 本空港は、開港して33年が経ちかなり老朽化し、国際空港としての国際基準も満たしておらず3年以内に改善するように指摘されている。管制塔内にはエレベーターがなく、最上階まで階段で上っていく。また、管制塔にはレーダーもなく、1日にたった3便しか飛行機は離着陸せず、たった一人の管制官が飛行機の離着陸を統制している。この現状を知り、飛行機事故があってもおかしくないのではと恐ろしく思えた。</p>
8月5日(水)	<p>① 小学校交流(ミトゥンドゥ教師研修センター)</p>  <p>(妹をおぶって登校する子ども)</p>	<p>○ 小学校交流では、子どもたちのたくましさ、生きていく厳しさのようなものに触れることができた。事前研修で、「ものをあげると争いになる」と注意されていたが、封筒作りのために持参した小さな容器を、制作後、我先にとその容器を取り合い、小さな手でぎゅっと握り締めていた。妹弟をおぶっている子どものそうした姿には、圧倒され言葉がでなかった。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
	<p>② 国連世界食料計画事務所訪問 (WFP)</p>  <p>(WFPの看板 - イギリス英語)</p> <p>・ 買い物 (shoprite)</p>	<p>○ マラウイの人口は1,600万人で、人口増加中で、今後人口爆発による食料不足が懸念されている。国民の多くが電気も水もないところで生活し、それでいて衛生面をどこまで徹底できるか疑問だが、マラウイは、5歳未満児の死亡率や、マラリアやエイズでの死亡者数が多い国である。2050年には、3人に1人が、2100年までには2人に1人がアフリカで生まれると、予測されている。女子を中心とした健康と家族計画に関する教育を向上させ、5歳未満児の死亡率を減らしていかなければならないと思った。</p> <p>○ shopriteは、南ア系のスーパーである。食品や日用雑貨、家電まで一通り手に入るが、南アからの輸入品ということもあり、価格は日本並みかそれ以上のものが多かった。車でここに来て大量に買い物をする人たちと、中古の下着や靴、食品などが売られている路上マーケットで買い物をする人たちでは、明らかに暮らし向きが異なるのであろう。マラウイは、一部において先進国の顔ももつ不思議な国だ。</p>
8月6日(木)	<p>① William君作の風車見学</p>  <p>(絵本「風をつかまえた少年」より)</p> <p>② NPO 法人 ISAPH 冷凍冷蔵庫とソーラーパネルの見学</p> <p>③ ムジンバ県南部院視察</p>  <p>(病室)</p>	<p>○ 日本の高校の英語の教科書に、マラウイの発明家のWilliam君の話が載っている。奇跡的に、彼の自宅を訪ね、彼が作った風車を見ることができた。また、飢饉を乗り越え家族を励まし続けたWilliam君のお母さんや妹さん、風車作りを手伝った従兄弟のジェフリー君にお会いすることができて、感無量だった。</p> <p>○ このヘルスポスト(健康施設)にワクチンを冷蔵保存できるようになり、遠くまで行かずに安定的なワクチン接種の体制を整えることができるようになってきている。地元の聖マリア病院が母体であるNPO法人ISAPHは、マラウイで乳幼児の総合的健康増進のために長年活動されていることを知ることで嬉しく思った。</p> <p>○ 日本の病院との一番の違いは、病院内で高齢者の姿を全く見かけなかったことだ。マラウイの平均寿命は54歳なので、主な入院患者は、病気の乳幼児や出産を待つ妊婦さんだった。マラウイでは、子どもと女性のために病院があるかのように感じた。想像していたよりも院内は衛生的で、一つ一つのベッドの頭上には、ホテルの部屋と同様、蚊帳が下がっていた。「これぞ、マラウイだ！」</p>

日時	訪問先	所感
	<p>④ 現地 NGO 視察</p>  <p>(手作りのパン)</p>	<p>○ ここの CBO (住民の住民による住民のための組織) に到着し、私たちが車から降りるやいなや、歌と踊りでもてなしてもらった。これぞ、「Warm heart of Africa (アフリカの温かさ) だ!」と感じた。皆がそろいの巻きスカート (チテンジ布) を着用していた。活動内容の説明の後、別室で、手作りのパンや飲み物で、私たちをもてなしてくれた。本当に、自分たちの客として迎えてくれ嬉しかった。最後に、この CBO で製作し販売されている布バッグを購入した。ここでも、現金収入を得るために、地元の人々と協力して作業をされていた。ここ CBO の訪問で感じた温かさは、まるで、一昔前の日本の温かさのようだった。</p>
<p>8月7日 (金)</p>	<p>① エディンゲニ ヘルスセンター視察</p>  <p>(体重計測中)</p> <p>② エンバングウェニ病院・エイズ対策視察</p> <p>③ 隊員さんのお宅訪問</p>  <p>(汲んできた水を太陽で温める)</p>	<p>○ 5歳未満児の身長・体重計測 (成長モニタリング) による栄養不良児の把握をしていた。大空の下、体重計を木の枝に吊下げ計測が行われる姿はなんとも異文化を感じた。計測だけでなく、離乳食 (お粥) の配付をして、母親に栄養を取ることの重要性を話す健康教育があっていた。指導者は説明をし、歌を歌いながら「お粥をあげましょう♪」と皆で一緒に歌う。テレビもないマラウイの人たちは、こうやってみんなで歌ったり、またある時は劇を見たりして、健康教育を受けている。</p> <p>○ HIV 感染やエイズを発症したことを、カミングアウトして生活していくことは、日本国内では差別の対象とされるのではないかと、心配が先にくる。それに比べて、マラウイの人はオープンである。病気を隠さずに、まずは自分で病気を受容し、回りの人もそれを排除せずに、受け入れてくれる心の大きさがあるように感じた。また、人が亡くなった時も、決して、医師の治療が悪かったからと病院を責めたりしないそうだ。死をそのまま受け入れるそうだ。</p> <p>○ 一軒家に住んでおられ、ウォッチマン (警備員) を夕方6時から朝の6時まで雇っているとのことだ。部屋は3部屋あり広かったが、水がない。家の外にシャワー小屋と穴式のトイレがあった。警備員にお金を渡して水運びはしてもらおうそうだ。また、鶏を何羽も飼っていて自分で捌いて料理もするということがあった。マラウイで自炊生活すると、人をたくましくパワフルにする。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
8月8日(土)	<p>① 聴覚障害児支援学校 視察</p>  <p>(壁に描いてあった手話)</p> <p>② 技プロ土地管理促進プロジェクト視察</p>  <p>(ぼかし肥)</p>	<p>○ 聴覚障害教育の資格を持った教員が数名しかおらず、保護者との面談も「個別の教育支援計画」も何もない中で教育が行われていた。これまで視察した学校もそうだが、いくら建物だけを造っても、肝心の先生がいなければ学校はただの箱である。教員の待遇面も改善する必要がある。意欲を持って子どもの教育に取り組む教員を増やすためには、政府がまずその体制づくりを行うことが重要である。この国の教育制度や内容に関しては、問題がまだまだ多い。</p> <p>○ 弥生時代から米作りをしている日本とは違い、狩猟民族だったアフリカは、イギリスの植民地になってから、とうもろこし栽培を始めた。一般の人も栽培するようになったのは独立後で、農耕の歴史はまだ短い。そんなマラウイで、日本の堆肥「ぼかし肥」が作られ、そのまま日本語の「ぼかし」と呼ばれ、農業に活かされている事実を知り、大変嬉しく思った。</p>



## Ⅲ. 授業実践例報告書



## つながるマラウイ ～世界の中の日本人～

宮ヶ迫 麻 美  
MIYAGASAKO ASAMI

県立鹿児島聾学校（鹿児島県）

担当教科：数学科（高等部）

●実践教科：総合的な学習の時間（他 英語 + a）

●時間数：8時間（+ a）

●対象学年：中学部、高等部 全学年  
（幼稚部、小学部）

●対象人数：65名

### カリキュラム

#### ■実践の目的

- マラウイについて知ることで、異文化への興味・関心を高める。
- 自分と世界とのつながりを感じることができる。
- 自分にとっての幸せとは何か考えるきっかけを作る。
- 自分の国のよさに気づき、世界の中の日本人という視点から自分の将来のイメージを膨らませる。

#### ■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<b>【1時限】</b> [高等部1年生対象] テーマ：私の見たマラウイ ねらい：異文化への興味・関心を高める。	○ プレゼン、対話形式授業 ・ 自分のイメージする「アフリカ」を考える。 ・ マラウイの場所や概要、暮らしについて知る。	・ パワーポイント ・ 写真 ・ マラウイの地図 ・ マラウイクワチャ
<b>【2時限】</b> [高等部1年生対象] テーマ：つながる世界 ねらい：自分と世界とのつながりを感じることができる。	○ プレゼン、対話形式授業 ・ マラウイの聾学校について知る。 ・ 自分たちと同じこと、違うことを考える。 ・ アフリカとのつながりを考える。	・ パワーポイント ・ 写真 ・ JICA ワークショップ資料
<b>【3時限】</b> [高等部1年生対象] テーマ：幸せってなんだろう ねらい：自分にとっての幸せとは何か考える。	○ プレゼン、対話形式授業 ・ 今の自分が幸せだと思うか考える。 ・ マラウイは世界最貧国とされているが、アフリカで1番幸せだと感じている国だということを知る。 ・ マラウイの人たちが幸せだと感じている理由を考える。 ・ 自分にとっての幸せを考える。	・ パワーポイント ・ 写真 ・ ワークシート

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<b>【4時限】</b> [高等部1年生対象] テーマ：5年後の私 ねらい：世界の中の日本人という視点で自分の将来について考える。	○ プレゼン、対話形式授業 ・ 異なる国の3つの世界地図を見る。 ・ 日本とマラウイの変わったもの、変わらないものを見る。 ・ 日本の変わらないものを考える。 ・ これから大事にしたいことを考え、5年後の私を考える。	・ パワーポイント ・ 世界地図 ・ 写真 ・ ワークシート
<b>【1時限】</b> [ 中学部全生徒、高等部重 複学級、高等部3年生、 専攻科を対象に各1時間 ] テーマ：世界のくらしと日本のくらし ねらい：異文化への興味・関心を高め、自分と世界とのつながりを感じる。	○ プレゼン、対話形式授業 ・ マラウイまでどうやっていくのか、時間はどのくらいかかるのかを知る。 ・ 自分たちのイメージする「アフリカ」を考える。 ・ 自分たちのイメージと比較しながら実際に教員が見てきたマラウイの写真を見る。 ・ マラウイの概要やくらしについて知る。 ・ マラウイの聾学校について知る。	・ パワーポイント ・ 写真 ・ マラウイの地図 ・ マラウイクワチャ
<b>【10月～2月】</b> 他教科連携 英語 テーマ：マラウイの聾学校生とやりとりをしよう ねらい：世界を身近に感じることができる。	○ 文通、ビデオレター ・ マラウイの生徒からの手紙の内容を読み取る。 ・ 自分のことを英語で自己紹介する。 ・ 文通相手に質問したいことを考え、英語で表現する。 ・ ビデオレターのやりとりをする。	・ ワークシート ・ 便箋 ・ 封筒 ・ 写真 ・ 映像
<b>図書館コラボ企画 掲示物</b> テーマ：アフリカを知ろう ねらい：異文化への興味・関心を高め、自分と世界とのつながりを感じる。	○ 展示、特設コーナー設定 ・ 教師が撮ってきたマラウイの写真を見る。 ・ マラウイの概要やくらしについて知る。 ・ マラウイの学校、聾学校について知る。 ・ マラウイをはじめとするアフリカのものを本に触れる。	・ 写真 ・ 広幅用紙を使用した掲示物 ・ アフリカに関する本 ・ チテンジ、ジャンベ、置物
<b>文化祭展示</b> テーマ：つながるマラウイ ねらい：異文化への興味・関心を高め、自分と世界とのつながりを感じる。	○ 展示 ・ 英語でやりとりしている手紙の展示 ・ 掲示物の展示	・ 広幅用紙等を使用した掲示物

## 授業の詳細

### 【1時限】私が見たマラウイ（高等部1年生対象）

＜教材1－パワーポイント（写真、動画含む）＞

#### ○ 主な学習活動

- ① 本時の学習内容を確認する。
- ② 世界地図でマラウイの場所を確認する。 ＜教材2－マラウイの地図＞
- ③ どうやっていくのか、時間はどのくらいかかるのか予想し、教師の実体験を聞く。
- ④ 自分たちのイメージする「アフリカ」を考える。
- ⑤ 教師が撮ってきた写真や動画、持ち帰ってきたものを見ながら、マラウイの概要やくらしについて知る。 ＜教材3－マラウイクワチャ＞
- ⑥ 本時を振り返る。

#### ○ 生徒の反応、様子

- ・ 自分が持っていたイメージとの違いや想像もしなかった話の内容に非常に驚いた様子で、教師の情報を聞くたびに驚きの声や感想等の発言など、大きな反応が見られた。
- ・ マラウイクワチャでは、同じ紙幣でも旧紙幣と新紙幣で違う点を見つけたり、それぞれの紙幣に描かれた絵の意味を質問したりする姿が見られた。
- ・ 写真や動画の一つ一つに非常に高い興味を示し、映像からいろいろな情報を読み取ったり、教師へ質問をしたりする様子が見られた。
- ・ 食事についての関心も高く、自分も食べてみたいという感想も多く聞かれた。

### 【2時限】つながる世界（高等部1年生対象）＜教材4－パワーポイント（写真、動画含む）＞

#### ○ 主な学習活動

- ① 写真を元にどこの国の様子か予想する。
- ② 本時の学習内容を確認する。
- ③ バンダウェ聴覚支援学校について知る。
- ④ バンダウェ聴覚支援学校の情報から、自分たちと同じこと、違うことを考える。
- ⑤ 日本の行っている支援について知る。
- ⑥ その他の自分たちの生活とアフリカとのつながりを考える。 ＜教材5－JICA ワークショップ＞

- ⑦ 本時を振り返る。

#### ○ 生徒の反応、様子

- ・ 遠く離れたマラウイにも自分たちと同じ障害のある生徒がいるということに親近感を感じるとともに、自分たちと同じような補聴器を使っているということに驚いたり、建物や生活の違いに興味を持ったりする様子が見られた。
- ・ 聴覚支援学校のことや支援のこと、ワークショップを通して、「世界にはたくさんのつながりがあるんだと感じた。」という感想が多数聞かれた。

### 【3時限】 幸せってなんだろう（高等部1年生対象）

＜教材6－パワーポイント（写真含む）、教材7－ワークシート＞

#### ○ 主な学習活動

- ① 今の自分が幸せだと思うか、その理由とともに考える。
- ② 本時の学習内容を確認する。
- ③ これまでのマラウイの学習を振り返る。
- ④ マラウイの厳しい教育や医療の現状を知る。
- ⑤ マラウイは世界最貧国とされているが、アフリカで一番幸せだと感じている国だということを知る。
- ⑥ マラウイの人たちが幸せだと感じている理由を考える。（個人→グループ→全体）
- ⑦ 自分にとっての幸せを考える。
- ⑧ 本時を振り返る。

#### ○ 生徒の反応、様子

- ・ 自分たちのくらしからみると、一見不自由そうに感じていたマラウイの人々が自分たちのことを幸せだと感じていることに、意外性を感じた様子の生徒もいた。
- ・ 自分が幸せだと思う理由に人との関わりについてあげていた生徒を中心として、物的な豊かさではなく心の豊かさについて着目する様子が多数見られた。
- ・ 自分たちの身の回りの人や物について改めて考えるきっかけになった様子で、学習のまとめではいろいろな視点から、自分の幸せについて考えた感想が多かった。

### 【4時限】 5年後の私（高等部1年生対象）

＜教材8－パワーポイント（写真含む）、教材9－ワークシート＞

#### ○ 主な学習活動

- ① 異なる国の三つの世界地図を見る。
- ② 本時の学習を確認する。
- ③ 日本とマラウイの変わったもの、変わらないものを見る。
- ④ 日本の変わらないものを考える。（個人→グループ→全体）
- ⑤ これから大事にしたいことを考え、5年後の私を考える。
- ⑥ 本時を振り返る。

#### ○ 生徒の反応、様子

- ・ いつも見ている世界地図と違う世界地図があることに驚いた様子であった。
- ・ 日本の変わらないものでは、目に見えるものにとどまらず、伝統的なマナーや風習など柔軟に考える様子が見られた。
- ・ 他国の文化を理解し、尊重する様子や発言が見られた。
- ・ 日本の文化についても改めて考えてみることで、そのよさや魅力を考え、語る様子が見られた。

## 【1時限】世界のくらしと日本のくらし

(中学部全生徒、高等部重複学級、高等部3年生、専攻科対象)

＜教材10－パワーポイント(写真、動画含む)＞

### ○ 主な学習活動(高等部1年生対象の1、2時限をまとめた内容)

- ① 写真を見てどこの国の様子か予想する。
- ② 本時の学習内容を確認する。
- ③ マラウイまでどうやっていくのか、時間はどのくらいかかるのかを予想をして、教師の実体験を知る。 ＜教材2＞
- ④ 自分たちのイメージする「アフリカ」を考える。
- ⑤ 自分たちのイメージと比較しながら実際に教員が見てきたマラウイの写真や持ち帰ったものを見る。 ＜教材3＞
- ⑥ マラウイの概要やくらしについて知る。
- ⑦ バンダウエ聴覚支援学校について知る。
- ⑧ 本時の学習を振り返る。

### ○ 生徒の反応、様子

- ・ 写真や情報の一つ出すごとに驚きの声や感想等の発言など、大きな反応が見られた。
- ・ 特に写真やバンダウエ聴覚支援学校の情報については高い興味や関心が見られ、じっと写真やスライドに見入ったり、気になったことを質問したりする様子が見られた。
- ・ マラウイクワチャやマラウイで購入した地図など、現地から持ち帰ったものにも物珍しそうにじっくり眺める様子が見られた。
- ・ 食事についてはシマを食べてみたいという感想が多く聞かれた。

## 【他教科連携 英語 ～マラウイの聾学校生とやりとりをしよう～】

### ○ 主な学習活動

- ・ マラウイの聾学校(バンダウエ聴覚障害児支援学校)の生徒と手紙の交換、ビデオレターのやりとり



マラウイからのビデオレター



手紙と一緒に送られてきたお菓子の試食

○ 生徒の反応、様子

- ・ 文通を始めるとの告知にとっても驚いた様子で、しかし嬉しそうにしており、テレビ電話をしてみたいなど、積極的に交流するためのアイデアを出す様子が見られた。
- ・ 手紙を書くときには、どうすれば自分が言いたいことを伝えられるか熱心に考える様子が見られ、また相手の分からない日本のことを伝えるために英文を工夫したり、撮影した写真等を手紙に添えるという工夫が見られたりした。
- ・ マラウイから届いた手紙も、できるだけ自分で読解しようとする姿勢が見られ、通常の学習以上に、積極的に辞書を活用するなどの姿が見られた。
- ・ 英語が勉強する科目というだけではなく、人に何かを伝えるための手段であるという実感ができた様子で、英語への興味や学習意欲が高まった生徒もいた。
- ・ ビデオレターでは自分の文通相手がどんな人なのかということに加え、それぞれが見せてくれた特技やマラウイの様子、マラウイで使われている手話、英語など、それぞれの生徒がいろいろなことに興味を持ちながら、とても楽しんで映像に見入る様子が見られた。

【図書館コラボ企画 ～アフリカを知ろう（掲示物と本を通して）】

○ 掲 示 物 <教材 11 >

- ・ マラウイに行ってきました！（地図&写真）
- ・ マラウイってどんな国？
- ・ マラウイの学校を見てみよう！

○ 展 示 物

- ・ 関連図書
- ・ チテンジ、ジャンベ、置物



- ・ 図書館だよりへの掲載（全幼児児童生徒配布プリント）

○ 生徒の反応、様子

- ・ 熱心に写真や文章に見入ったり、気になったことを職員へ聞きにきたりする姿が見られた。
- ・ マラウイをきっかけに、他のアフリカの国についても調べたり話題を広げたりする様子が見られた。
- ・ 展示されたマラウイの品を触ったり、ジャンベを叩いたりしながら、興味を膨らませる様子

が見られた。

- ・ 学部を超えて幼児児童生徒、職員、保護者で話をする様子が見られた。



幼稚園～高等部までの幼児児童生徒、職員、保護者が掲示物を見ている様子

### 【文化祭展示 ～つながるマラウイ（掲示物を通して）】

#### ○ 掲 示 物

- ・ 図書館コラボ企画で作成したもの<教材 11 >
- ・ JICA について、支援について
- ・ Pen Pal in Malawi ～マラウイの聾学校と文通始めました～  
(本校生徒が書いた手紙と送られてきた手紙、写真)



#### ○ 来場者の反応・様子

- ・ マラウイのことや文通のやりとりの様子を、興味深そうに見ていた。
- ・ 掲示物について質問や感想を述べる様子が見られた。

## 成果と課題

### ■ 成 果

- ・ 幼稚園から高等部の幼児児童生徒、職員、保護者と多くの人に触れてもらう機会を作ることができた。
- ・ 掲示物や授業から、世界や異文化への興味、関心を広げるきっかけを作ることができた。
- ・ 実際にやり取りをするという機会を設定できたことで、生徒がより世界を身近に感じたり、こ

れまで学習してきたことと実生活とのつながりを感じたりすることができた。

## ■ 課 題

- ・ 授業実践をするに当たってまとまった時間を確保することが難しく、単発の授業が多くなった。

## 参考資料・教材など

- ・ 教材1、4、6、8、10 パワーポイント資料の1部



- ・ 教材3 マラウイクワチャ



子どもたちに人気のあったマラウイクイズ  
(めくったら答えが書かれています)

- ・ 教材11 掲示物



## 引用文献

- JICA ワークショップ資料私たちの生活とアフリカとのつながりを考える, [http://www.jica.go.jp/hiroba/menu/education/ku57pq000006cqk3-att/work\\_1.pdf](http://www.jica.go.jp/hiroba/menu/education/ku57pq000006cqk3-att/work_1.pdf)
- THE WORLD BANK Poor but happy?, <http://blogs.worldbank.org/african/poor-but-happy>

## 世界の中の日本 ～マラウイから日本を考える～

■ 松下 由佳  
MATSUSHITA YUKA

■ 菊陽町立菊陽中学校（熊本県）

■ 担当教科：英語科

●実践教科： 1：英語（1時間目 / 全9時間）  
2：道徳（1時間）  
3：総合的な学習の時間  
（13時間目 / 全14時間）

●対象学年： 中学2年生

●対象人数： 36名(クラス)～178名(学年)

### カリキュラム

#### ■実践の目的

- 「共生」の意味や、真の国際理解とはどういうことなのか考えさせる。
- 「世界の中の日本人」といった視点を持たせ、自分の将来について考えを深める。
- 日常の中で国際理解の視点を持たせるため、多教科で扱う。

#### ■授業の構成

【時限】・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<b>【1時限】 英語</b> テーマ：Unit 4 Homestay in the United States ねらい：ホームステイの始まりについて知る	1, いろいろな国の生活様式やホームステイの様子を知る。 2, ホームステイの起源について知る。 3, 国際理解において大切なことをまとめる。	・ New Horizon2 （東京書籍） ・ マラウイ・オーストラリア・アメリカ等の写真
<b>【1時限】 道徳</b> テーマ：内容項目4－(10) 国際理解 「国境線が鍛える共生の思考」 ねらい：真の国際理解について考える。	1, 道徳の教科書を使用したり、マラウイの実際の様子を伝え、国際理解について考える。	・ 自分を考える （あかつき出版） ・ 私たちの道徳 （文部科学省出版） ・ マラウイ写真
<b>【1時限】 総合的な学習の時間</b> テーマ：「世界の中の日本人」 ～マラウイから日本を考える～ ねらい：「世界の中の日本人」という視点で将来について考える。	1, 将来を考える際、世界に目を向ける視点を持たせる。 2, 世界の中の日本人という視点を持たせる。	・ マラウイと日本の写真、動画等

## 授業の詳細

### 1：英 語（1時間目 / 全9時間）

単元名：Unit 4 Homestay in the United States

#### (1) 子どもの活動の流れ

- ① P 4 0～ホームステイのアドバイスから大切なことを読みとる。
- ② P 4 1～外国で始めて聞く「分からない言葉」があったらどうするか考える。
- ③ P 4 2～自分の意見をしっかり伝えることを大切にしている国について知る。
- ④ P 4 3～「人生は自分次第だ」ということに気付かせる。
- ⑤ ホームステイの始まりについて話を聞く。
- ⑥ マラウイでの生活の様子についてスライドを見ながら、話を聞く。
- ⑦ オーストラリアでのホームステイの様子を生徒に発表してもらう。
- ⑧ 国際理解（本国理解・他国理解）について話を聞き、思ったことをまとめる。

#### (2) 子どもの活動の成果・反応

興味深く写真を見たり、実際のホームステイの様子を熱心に聞いていた。初めて知ることが多く、たくさん質問がでたり、驚いた様子だった。以下は、授業後の生徒の感想である。

- マラウイの生活は日本と全く違うなと思った。トイレとお風呂が日本と違って驚いた。自分はマラウイで生活できるかな。
- オーストラリアは水が貴重なことがわかった。泡の皿を紙でふいて終わりだなんて受け入れられるかな。日本は水が豊富なんだと思った。それに熊本は水がおいしい。当たり前だと思っていたことが当たり前じゃなかった。
- アメリカに行ってみたいと思った。自分は一人で行けるかな？分からないとき聞くことが大切だと思った。すぐにはできないからふだんから心がけようと思った。
- ホームステイは英語の勉強のためかと思っていた。ホームステイのはじまりが、相手の国を理解するためにはじまったことを初めて知った。確かに、自分もオーストラリアでホストファミリーと一緒に暮らすと分かることがたくさんあった。相手を理解することと受け入れること、自分のことを伝えることが大切だと思った。ホームステイにまた行きたい。
- 自分は今まで外国に行きたいと思ったことはなかったけど、今日いろんな話を聞いて、行ってみたいと思った。怖いと思うこともあるけど、行った人は怖いより楽しいことが大きいんだと思った。まだ知らないことが多いなあ。



生徒がつくったオーストラリアでのホームステイの様子

## 2：道徳（1時間）

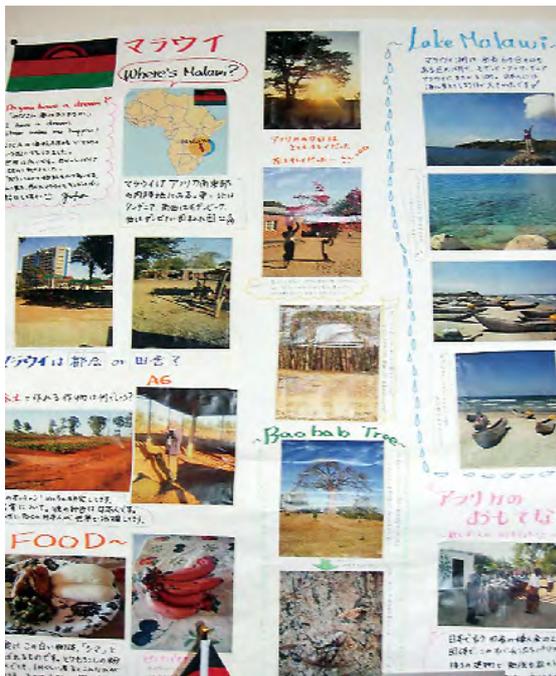
- (1) 題材：「国境線が鍛える共生の思考」
- (2) 内容理解：4－(10) 国際理解
- (3) ねらい：真の国際理解について考える。
- (4) 子どもの活動の流れ

過程	学習活動	○指導上の留意点 ☆発問
事前	0, 「海の向こうの意識」を読 んでおく。	○国際理解を学習する雰囲気をつくるため、事前に別 の資料を読ませておく。
導入	1, マラウイの写真を見て、 思ったことを発表する。 2, 「私たちの道徳」の国際理 解を読む。 3, めあてを確認する。	○途上国といったイメージのみを持つことがおかし いことに気付かせる。 ○副教材を活用して本時のめあてを押さえる。
展開	4, 資料を読む。 5, 資料から「国際理解」につ いて考える。	○わからないと思われる部分は解説しながら丁寧 に読む。 ☆「資料を読んでどんな印象を持ちましたか」 ☆「よそ行きの服とサイズの合わない服を見てどう 思いますか」 ☆「日本のものはほぼ輸入品で生活しています。自給 することは難しいのが現実です。（もし、貿易が止 まったらどうなると思いますか）このことをどう思 いますか」
まとめ	6, 「一人の人間」「世界の中の 日本人」として大切にしたい ことを考え、思いを共有 する。指導者の一意見も伝え る。	☆「広い世界で、あなたは日本人として生まれてきま した。日本の誇れるものは何でしょう。国際社会の 中で日本人として、あなたはどのように生きていき たいですか」 ○国際理解で、まず必要なことは自国理解、そし て他国を知ろうとする真剣なまなざしであることを 押さえる

### (5) 子どもの活動の成果・反応

やはり島国日本。海外での出来事は教科書の中の出来事のように捉えているようだったが、マラウイの実際の写真を見せたり、現地での様子を伝えると生徒の目がキラキラしていた。偏見でものごとを決めていることのおかしさに気付いたり、初めて知ることがとても新鮮な様子だった。将来海外に出てみたいと思った生徒も少なくない。以下は、授業後の生徒の感想である。

- 日本とマラウイの違いを理解した。日本では考えられないことが起こっていた。私たちは無関心だったと思う。知ることから始まると思った。
- 募金とかはどんな風に使われているのかな。小学校のとき、どこかにランドセルを送りました。どこに送ったかも覚えていません。自分のやっていることは自己満足なのかな。私は、もっと知りたいです。知ることの大切さを学びました。
- 固定観念をなくし、一定の考えだけでものごとを判断するのはやめようと思いました。僕も一度で良いから外の国から日本を見てみたいです。
- 私は今まで「ものをあげればいい」と思っていました。本当に一人ひとりのことを考えたら、もっといろんなことができると思います。今からでも遅くない。「自分は何ができるか」を深く考えていきたいです。
- ものやお金をあげることが、その人のためになるんじゃなくて、本当に必要なのは相手のことを理解することだということが分かりました。普段の生活にも言えることだと思います。
- 日本はいいことをしていると思う。けど、もっとできることがあると思う。もっと良い国になるために、自分の考えも深めていきたい。
- 国際貢献の本当の在り方ってどんなことだろう？はじめて真剣に考えた。将来、日本を出たら、日本のありがたみを自分で感じたり、日本という国についてもっと知っていききたいそして、国際貢献について答えを出したい。
- 違う国を見ると違う生活や文化がある。日本には日本のいいところがある。自分は日本のいいところをすぐには言えなかった。日本の文化をもっと知りたいと思った。そして、外国のことももっと知っていききたい。できることは相手のことを考えることだと思った。



マラウイの様子を伝える写真



～班で意見交換中～

### 3：総合的な学習の時間

#### (1) 単元名：「家族を見つめ、将来について考えよう」

小単元①進路学習（13時間目 / 全15時間）

次	学習内容	実施時期
1	オリエンテーション	6月
2	いろいろな仕事について調べよう	
3	自分の将来に向けて、計画を立てよう	
4	「働くために必要な力」とは？	7月
5	「働くために必要な力」をつけよう①	
6	〃 ②	
7	上級学校について調べよう①	
8	〃 ②	
9	自分の適性について知ろう（進路コンパス）	1月
10	自分の適性と今後の進路について考えよう	
11	「働くために必要な力」をつけよう③	
12	〃 ④	
13	自分の将来に向けて国際理解の視点でも考えを深めよう	【本時】
14	立志作文を綴って、クラスで語ろう（クラスミーティング①）	2月
15	クラスミーティング②	

#### (2) テーマ：「世界の中の日本人 ～マラウイから日本を考える～」

#### (3) ねらい：

- 国際理解の視点で、自分の将来を見つめ、考えさせる。
- 変化の激しい時代を生きていく中で、世界に目を向け視野を広げることは、より豊かに生きていくことになることに気付かせる。
- 日本の良さに気付かせる。

#### (4) 子どもの活動の流れ

過程	学習活動	○指導上の留意点 ☆発問
導入	1, マラウイと日本のそれぞれの今と昔の写真を見る。	☆「これはどこの国でしょう？どんな国だと思いますか」？ ☆「2つの国に共通するもの、異なるものは何でしょう」？
	2, めあてを確認する。	○衣食住で共通点、相違点を考えさせる。 ○客観的に「日本」を見つめることを伝える。
展開	3, マラウイの「今」を伝える。	○昔のまま生活していることのすばらしさと困難さを考えさせる。

過程	学習活動	○指導上の留意点 ☆発問
まとめ	4, 「日本の今」を考える。  5, 「夢追い人」の話を聞く。  6, 自分の将来について思いをまとめる。	○生活で便利さと人のつながりについて考えさせる。 ☆「日本の残したいものは何でしょう」 ☆「日本の世界に誇れるものは何でしょう」 ○一番伝えたいこと（日本に誇りを持ち、国際社会の中で世界平和に貢献できる日本人でありたいこと、仲間を増やしたいこと）を明確に示す。 ○夢の形はいろいろであることを伝える。

### (5) 子どもの活動の成果・反応

それぞれの国で変わらないものと変わったものと考えるとき、思考力が高まっていた。班でもよく討論していた。答えが出たあと、日本の良いところに気付き、生徒同士でよく話していた。授業後も、海外の話や日本のことで話が弾んでいてうれしい光景を見ることができた。以下は授業後の生徒の感想である。

- 人生遠回りをしてもいいと思った。自分も外国から日本を見てみたい。その前に日本のことをもっと知りたいと思った。マンガも日本の誇れる文化だと知って、うれしくなった。マンガ以外にもたくさんあると思う。日本が一番いいなと思った。
- 「文化」とは引き継ぐものだと思う。日本の文化を引き継ぐのは自分たちだ。平和学習で沖縄の地上戦のことを知り、語り継いでいきたいと思ったように、日本の文化も引き継いでいきたい。
- 日本の文化についてあまり知らない。まだ知らないことも多いから茶道とか習ってみたいと思った。和の心は良い！
- 昔のものを残していることは良いことだと思う。マラウイは残しているものがあるから、日本も残していきたいと思った。
- 日本は外国のものを取り入れるのもいいところだと思う。この前、修学旅行で沖縄に行き、首里城を見て、日本と中国の融合だと思った。日本の良いところはすべて変わることじゃなくて取り入れることかなと思った。
- この前、親の夢を聞いたら、海外旅行に行くことと言っていた。親がそんなこと思っていること知らなかった。一緒にどこか行ってみたい。夢って仕事だけじゃないんだなと思った。
- 私は国際理解にとっても興味があります。将来、海外で医療関係で働きたいです。今からできることは何か考えたいです。日本の残したいものも考えることが出来て良かったです。



←マラウイ紹介コーナー



↑ 茶道体験

## 成果と課題

### ■ 成 果

- 生徒の日常の会話にも、海外に目を向けた話題が増えた。
- 夢がないと話していた生徒が、自分の将来について語るようになった。
- 国際理解の情報を自分で得ようとしたり、JICAのエッセイに応募したりと、生徒の主体性が高まったり、国際的な視野が広がったことが分かる。
- 日本のことが好きな生徒、日本に誇りを持つ生徒が増えたことが日々の日記や授業の感想から分かる。
- 他の学習（平和学習や進路学習等）でも、世界の中の日本人といった視点で考える生徒が増えたことが授業の感想から分かる。

### ■ 課 題

- 全体的には国際理解に興味ある生徒が増えたが、個人差がある。
- ボランティアをしたいが具体的にどんなことができるのかわからないと言った意見があった。自分で情報収集する力をもっとつける必要がある。
- 国際理解教育を広げるために、誰でも使える教材づくりをもっと研究していきたい。
- 校内研修等で職員の研修の場を持ちたい

菊陽中2年生「14歳の夢」



マラウイの中学生の夢



夢を語り合う仲間



～クラスミーティング中～

マラウイの中学校



# マラウイを通じて、 「生き方」「幸せ」について考える

石井 美保  
ISHII MIHO

大村市立西大村中学校（長崎県）

担当教科：英語科

- 実践教科： 掲示物、道徳、英語、人権集会
- 時間数： 3時間（掲示物は4か月程度）
- 対象学年： 全生徒、教職員
- 対象人数： 約600名

## 図書館掲示物でマラウイ紹介

### カリキュラム

#### ■実践の目的

- 図書館前の廊下にマラウイに関する掲示や展示を行うことで、マラウイの概要を伝え、多くの生徒にマラウイという国を知らせ、興味を持つきっかけとする。

### 授業の詳細

《掲示・展示の様子》 10月から、約4か月間掲示・展示させてもらった。





### 《生徒の反応》



- ・ 立ち止まって見る生徒や友人と語り合う生徒も見られた。
- ・ 掲示物を見て、詳しく話を聞きたいと言ってきた生徒もいた。

## 成果と課題

### ■ 成 果

- ・ 担当学級、担当学年以外の生徒へマラウイのことを一部ではあるが、伝えることができた。
- ・ 図書館内ではなく、廊下に掲示したことで、普段図書館を利用しない生徒へも見せることができた。
- ・ 生徒だけでなく、教職員や学校へ来校する保護者に伝えるきっかけにもなった。

### ■ 課 題

- ・ 図書館前廊下をあまり利用しない生徒や、掲示物へ興味を持たない生徒は、全く見ておらず、存在も知らなかった生徒もいた。
- ・ 掲示物で伝えられる内容は、ほんの一部であり、文化や生活の紹介にとどまっている。

# 風をつかまえたウィリアム

- 実践教科： 道徳の時間
- 対象学年： 3年生
- 時間数： 1時間
- 対象人数： 38名  
(担任をしている学級の生徒)

## カリキュラム

### ■実践の目的

- 絵本「風をつかまえたウィリアム」を通じて、マラウイの生活について知らせる。
- 一人の人間に焦点を当てることで、遠い国ではなく、身近に感じさせる。
- 勤勉なウィリアム少年の生き方に触れ、自分自身の生活を振り返らせる。

### ■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<b>【1時限】</b> テーマ： ねらい：ウィリアム少年の 生き方を知り、マラウイ への興味を高める。	① マラウイのイメージを確認する。 ② 「風をつかまえたウィリアム」を読む。 ③ イメージの変化を確認する。 ④ 授業で考えたことをまとめさせる。	「風をつかまえたウィ リアム」

## 授業の詳細

### ① アフリカやマラウイ、マラウイ人のイメージを確認する。

#### 《生徒の反応》

##### アフリカやマラウイのイメージ

- ・発展途上国
- ・自然がいっぱいある
- ・砂漠
- ・スラムがある
- ・貧しい
- ・暑そう
- ・衛生面がよくない
- など

##### アフリカやマラウイのイメージ

- ・無口
- ・はだし
- ・身体能力が高そう
- ・黒人
- ・貧しい
- ・視力がいい
- ・民族衣装を着ている
- など

### ② 「風をつかまえたウィリアム」を読む。

マラウイの場所などの基本的なことを確認した上で、パワーポイントにしておいた絵本を読んだ。また、ウィリアム少年の故郷ウィンベ村の写真も見せて、より現実味のあるものとした。

### 《生徒の反応》

読み物資料として読ませる道徳よりも、実際のウィリアム少年の暮らしなどを示したこともあり、全員が集中して話を聞き、興味を持って授業に臨み、深く考える様子が見られた。

### ③ イメージの変化を確認する。

この話だけで、マラウイのイメージが定着しないように配慮をした上で、自分が思っていたイメージとの比較をさせた。

### 《生徒の反応》

- ・人は、優しそう      ・努力家      ・立派      ・細い人が多い
- ・風車などを自分で工夫して作るなんて、イメージと違った。
- ・勉強したくてもできない子がいた。

### ④ ウィリアム少年の生き方から学んだことや自分の生活について考えたことをまとめさせる。

### 《生徒の反応》

- ◆ 暗くなったら、すぐに寝なければならないということは、ウィリアムくんのように勉強したい子は勉強ができません。ゲームとかばかりしている自分が、改めて情けなくなりました。
- ◆ 自分が住んでいる場所のために、学校に行けない中、勉強して風車を作ったことはすごいと思った。尊敬する。
- ◆ 挑戦しようと思った。周りから何を言われようと、自分が興味を持ったことを最後までしようと思った。

## 成果と課題

ウィリアム少年の存在、生き方を知ることで、マラウイのことに一歩踏み込んで考えさせることができたように思う。ただの外国のこと、と捉えさせるのではなく、一人の人間が住む土地だと考えることで、身近に考えさせるきっかけになったと思う。

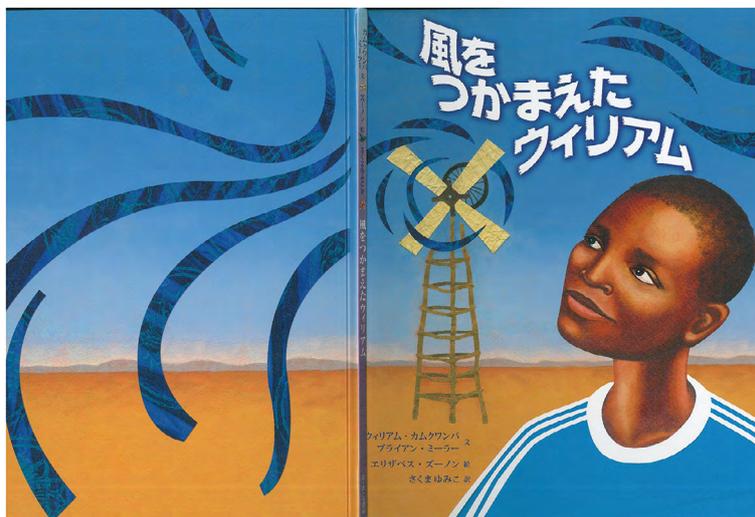
また、ウィリアム少年の生き方と自分の生き方を比較して考えさせることができた。しかしながら、この授業だけでは、マラウイの実態についてはまだ伝えきれていないため、今後の授業で継続的に伝えていく。

参考資料・教材など

「風をつかまえたウィリアム」

ウィリアム・カムクワンバ・ミーラー文

さくまゆみこ訳 さ・え・ら書房



# What is the most important thing to you?

- 実践教科：英語の時間
- 対象学年：3年生
- 時間数：2時間×3クラス
- 対象人数：112名  
(授業を担当する3学級の生徒)

## カリキュラム

### ■実践の目的

- 「What is the most important thing to you?」という問いに対するマラウイ人の答えから、マラウイ人の考え方を知り、自分たちの考えと比較する。
- マラウイが英語を話す国であることに気付かせ、英語の重要性を理解させる。

### ■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<b>【1時限】</b> テーマ：自分の大切なものを英語で表現する。 ねらい：日本人として、自分たちにとって大切なものは何なのかを考えさせる。	① 第3学年の教科書（開隆堂 Sunshine）、Program7の題材である「What is the most important thing to you?」の本文の内容理解を行う。 ② 自分にとって大切なものを、英文とイラストで表現させる。	Sunshineの英語の教科書
<b>【2時限】</b> テーマ：マラウイ人にとっての大切なものや夢を知る。 ねらい：日本人との考えの違いを感じ取らせる。	インタビュー映像を使って、聞き取りをさせる。また、聞き取った内容から、考え方の違いを知る機会とさせる。	マラウイで撮影したインタビュー映像

## 授業の詳細

マラウイのムセチェ中等学校とミトゥンドゥ小学校で現地の子供達にインタビューした映像を見せ、聞き取りをさせた。聞き取った内容から、自分たちの考える大切なものや夢との比較をさせ、考え方の違いを知る機会とした。

### 《生徒の反応》

英語が苦手な生徒も、実際に外国人が話している映像を見ると、必死に聞き取りをしようとしていた。また、話している内容を理解できた時に感動している生徒もいた。

### 《生徒の感想》

- ◆ マラウイの人たちの夢はすごいし、理由も素晴らしいと思った。

- ◆ 世界には努力している人がたくさんいることを改めて知れてよかった。
- ◆ マラウイの写真や映像を見て、アフリカ自体の印象が少し変わって、行ってみたくなった。
- ◆ マラウイの人は、自分よりもすごい想いを持っている人がたくさんいることが分かり、すごくびっくりした。改めて尊敬したし、自分も頑張らないといけないと実感した。
- ◆ マラウイの人は夢がしっかりあって、それに向かって突き進んでいて、自分と比べるとすごく立派だと感じました。
- ◆ 私たちが思っている大切なことと、マラウイの人が思っている大切な事は全然違ってびっくりしました。

## 成果と課題

### ■ 成 果

- ・ 英語の重要性を感じていた。
- ・ 今まで考えたことのなかったマラウイの人の考えに触れさせることができた。
- ・ また、同じくらいの年代の子どもの考えを知ることで、自分たちの考えとの比較をし、今の生活を振り返る機会となった。

### ■ 課 題

- ・ ここでインタビューした子どもたちは、学校へ来ることができている子どもであるため、学校に来ることができていない子ども達の思いにまでは、考えが至っていない。

## 参考資料・教材など

- ・ SUNSHINE ENGLISH COURSE 3 (開隆堂)
- ・ 中等学校、小学校でのインタビュー映像



# あなたにとって、幸せとは？

●実践教科： 人権集会

●対象学年： 全学年、全教職員

●時間数： 1時間

●対象人数： 約600名

## カリキュラム

### ■実践の目的

- マラウイという国の存在を知らせ、マラウイやアフリカへの興味・関心を高める。
- マラウイと日本の実態を比較して提示し、自分たちの生活を振り返る。
- 自分の立場からの考え方だけで物事を見るのではなく、多面的な視点を持たせる。
- 「幸せ」とは何であるかを考え、日常生活を見直す機会とする。

### ■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<b>【1時限】</b> テーマ：外国人の人権について学ぶ。 ねらい：マラウイのことについて講演を行い、「幸せ」について考える。	<b>人権集会の流れ</b> ① 校内の人権意識アンケート結果発表 ② 「世界がもし100人の村だったら」朗読 ③ マラウイ研修についての講演 ④ 平和スローガン発表	・ 「世界がもし100人の村だったら」 ・ マラウイ研修についてのパワーポイント

## 授業の詳細

パワーポイントを用いて、講演を行った。

1. マラウイの基本的な情報を、クイズ形式で確認  
生徒がイメージしている「アフリカ」の先入観をなくすような写真や情報を盛り込んだ。  
(ビルが並んだ街並み、スーツを着ている人、夏にダウンジャケットを着ている姿等)
2. マラウイ訪問で見たものの紹介  
マラウイで衝撃を受けたものを見せた。同じ物事でも、日本人の視点から見ると、他の視点から見るとは、見え方や感じ方は違うということを伝えるよう心掛けた。  
(量の違うコーラの瓶、詰めて椅子に座って授業を受ける生徒、病院での薬袋等)
3. マラウイのニックネームの紹介  
マラウイで出会った人達の笑顔の写真と共に。
4. UNICEF や WHO 等から出されているデータによる比較  
5歳以下での死亡率、読み書きの能力、GNI、自殺率等を紹介した。

### 《生徒の感想》

- ◆ マラウイは、日本と違うところがいくつもありました。しかし、自分たちが普通と考えるのではなく、その国にはその国の普通があって、考えることが違うんだなあと思うようになりました。今回は、話を聞くだけでしたが、日本人もマラウイ人もあまり変わらないなあと思いました。いじめの理由で、「自分と違うから」という人がいたら、「共通点の方が多いよ」と伝えていきたいです。(1年男子)
- ◆ 世界には、マラウイのように貧しい暮らしをしている人がいっぱいいる中で、ぼくたちは幸せな暮らしの中、良い環境に住んでいます。だから、この良い環境を生かして、勉強をいっぱいして、マラウイのような国の人たちを少しでも救えるよう頑張りたいです。(1年男子)
- ◆ マラウイは日本と違い、学校に毎日通うことのできない子どもがたくさんいて、私たちにとって当たり前だと思っていることが当たり前できないということを知りました。そして、私たちは恵まれていることが分かりました。学校に通い、ご飯が食べられる私たちにとって当たり前前に感じていることに感謝しなければならないと思いました。(3年女子)

## 成果と課題

### ■ 成 果

- ・ 授業や講演の後に、教科書にマラウイのことが載っていたことを知らせてくれたり、テレビでマラウイのことが紹介されていたことを、伝えてくれるなど、関心を持つ生徒もでてきた。
- ・ 「幸せ」の定義は難しいことであるが、考えていくことで、日本がいかにか恵まれているのか、ということに気付かせることができた。

### ■ 課 題

- ・ 学校の教育過程の中に関連付けて話をしなければならなかったため、マラウイでの研修で学んだことや伝えたかったことをすべて伝えられたわけではない。しかし、焦点を絞って、生徒達へ伝えることはできたと思う。今後も授業の中で、少しずつ紹介し、考えるきっかけづくりをしていきたいと考えている。



## 参考資料・教材など

「世界がもし100人の村だったら」池田香代子 著 マガジンハウス



マラウイ人は、幸せ？  
(UNICEF 2013)

読み書きの能力  
大人 **75%**  
(女性 **59%**)  
小学校を卒業できる人の割合  
**53%**



# Think globally, Act locally

## ～持続発展教育 (ESD) で世界 (マラウイ) を体感し、「生きる力」を育む～

佐伯 幸治  
SAEKI YUKIHARU

宮崎県立佐土原高等学校 (宮崎県)

担当教科：地理歴史科

- 実践教科：地理 A
- 時間数：3時間
- 対象学年：2年生、3年生
- 対象人数：126名 (選択生)

### カリキュラム

#### ■実践の目的

「地理」はグローバル社会の進展、国際情勢や地球環境の変化などにもなう現代世界が抱える諸課題と生活圏などの地域にみられる諸課題を地理的に考察することで、生徒自らが国際社会の中で国家・社会を形成していく責任者であることを自覚し、主体的にかかわる人材になるよう育成する科目である。つまり地理の授業は国際理解教育の一端を担っており、多様化する国際的な相互依存が交差する現代社会で生き抜くために必要とされる自ら考え、判断し、行動する力といった「生きる力」を育成しなければならない。そのため、従来の一斉講義型のみの授業スタイルから作業的、体験的な学習を織り交ぜた授業をより一層重視して、地理的技能を身に付けさせることで、「生きる力」が育成されるはずである。

よって、今回は地理学習の有用性に気付き、生徒の学習意欲を高めるために、マラウイで得た多様な教材を用いて、フォトランゲージをはじめ、様々な持続発展教育 (ESD) を織り交ぜながら新しい授業スタイルを開発、実践を試みたいと考えている。様々な持続発展教育 (ESD) を実践することで、様々な物事の「違い」を発見することで、「何故?」という疑問を抱かせ、答えを見つける喜びや新たな疑問を生み出すきっかけを体験させることで、物事の本質を知りたいという好奇心を伸ばし、自ら考え、判断し、行動する力といった「生きる力」を育みたいと考える。

#### ■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<b>【1時限】</b> ● テーマ 「国際協力の現状を知る」 ● ねらい 国際社会の中で、日本はどのような役割を果たしているのかを把握させるとともに、日本に期待される国際協力とはどのよ	● <u>経済援助と人づくり支援</u> ・ 地球的課題には何があるかを知る。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ランキング</span> ・ 日本の国連への分担金の割合を確認する。 ・ 日本人が国際組織で働く人が少ない理由を考える。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">KJ法→ランキング</span> ・ ODA の特徴と課題について理解する。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">KJ法→ランキング</span>	● 教科書 『高等学校地理 A』 第一学習社 ● 地図帳 『新詳高等地図』 帝国書院 ● アンケートのまとめ

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p>うなものかを考えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>期待される人的貢献</u></li> <li>・ ODA の 3 本の柱（無償援助・円借款・技術協力）について理解させるとともに、近年では人的な貢献が高く評価されつつあることを理解する。</li> <li>・ 自分ならどの国際協力組織、団体に所属し、どこで何をしたいか考え、発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 先進国の ODA 実績（OECD 資料）</li> <li>● サムカットプラカン 汚水処理プロジェクトレポート（外務省資料）</li> </ul>
<p><b>【2 時限】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● テーマ 「途上国（マラウイ）を体感し、支援する日本を知る」</li> <li>● ねらい 途上国について関心を高めつつ、その現状と課題を把握し、国際協力・援助のあり方を考察させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>途上国（マラウイ）の現状</u></li> <li>・ アフリカで知っている国を生徒同士で確認する。</li> <li>・ 「中南アフリカのイメージ」～アンケートの結果を共有する。</li> <li>・ 「写真や動画で見るマラウイ」 → 撮影した動画を見て、マラウイの概況を知る。 → 写真から気づいた点を書き出し、班で話し合い、表現する。また最も驚いた事についてランキングをする。</li> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center; margin: 5px 0;">       フォトランゲージ→ランキング     </div> <li>● <u>JICA の活動を知る</u></li> <li>・ マラウイの海外研修で活躍されている方々の活動内容を知り、さまざまな国際協力の内容や評価を受ける日本（人）を知る。</li> <li>・ JICA の HP にアクセスしよう。 → 前回の授業で、自分が選んだ国際協力・貢献が現在、JICA で行っているかを調べる。 → JICA の HP にある様々な内容に触れ、活躍されている方々の思いを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地図帳 『新詳高等地図』 帝国書院</li> <li>● アンケートのまとめ</li> <li>● JICA の仕事</li> <li>● マラウイの動画、写真 (添付 1)</li> <li>● マラウイで活躍する日本人～さまざまな国際協力～ (添付 2)</li> <li>● パソコン・タブレット</li> </ul>
<p><b>【3 時限】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● テーマ 「国際協力と自分」 ～ Think globally、Act locally ～</li> <li>● ねらい 地球的課題について、グローバルに考える視点とローカル（身近）な問題としてとらえる視点を身につけさせる。また私たちは地球市民の 1 人とし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● マラウイの子どもたちを救え！！</li> <li>・ 後発発展途上国（LDC）の児童労働問題の原因を考える。 → マラウイの主な貿易品目がタバコであることを確認する。 → マラウイのタバコの葉摘みの写真を見て、児童労働の現状を知り、過酷な児童労働に従事している子どもの声を聞き、問題意識を高める。</li> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center; margin: 5px 0;">       フォトランゲージ・ロールプレイング     </div> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 世界の諸地域 NOW 2015 帝国書院</li> <li>● タバコの葉摘みで身体を壊す子どもたち～マラウイの調査報告書～プラン・ジャパン</li> </ul>

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
て、何ができるかを考えさせる。	<p>→ 児童労働が脆弱な経済基盤であるモノカルチャー経済から発生していることを再確認し、その原因を様々な要因が相互に関連していることを図で表現する。</p> <p style="text-align: center;">[ フォトランゲージ ] ・ [ ランキング ]</p> <p>→ 児童労働の現状について調べ、話し合った内容をもとに自分の考えを表現する。</p> <p>● 「国際協力と自分」</p> <p style="text-align: center;">～ Think globally、Act locally ～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一村一品運動 (OVOP)、高千穂・椎葉地区の世界農業遺産登録を例に、海外で評価されている日本の取り組みが世界を救うことを紹介する。</li> <li>・ (マラウイで) 生徒自身ができる国際貢献・協力は何かがあるかを考え、発表する。</li> </ul> <p style="text-align: center;">[ フォトランゲージ ]</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● マラウイの写真</li> <li>● パソコン・タブレット</li> <li>● 新聞記事 (NIE)</li> <li>● マラウイの写真</li> </ul>

## 授業の詳細

### 1 時限目 「国際協力の現状を知る」

#### 【授業の流れ】

#### ● 経済援助と人づくり支援

I 地球的課題には何かがあるかを班で話し合い、自分たちで順位をつける。(深刻な度合い)

[ ランキング ]

II I の課題を解決する組織の 1 つに国際連合があることを確認する。(紹介する)

III 日本の国連への分担金の割合と事務局の専門職員数を確認する。

IV 国連への分担金拠出に比べて、日本人が国際組織で働く人々が少ない理由を考えさせる。→ 理由を付箋に書かせ、班で話し合い、順位をつける。(正しいと思う度合い)

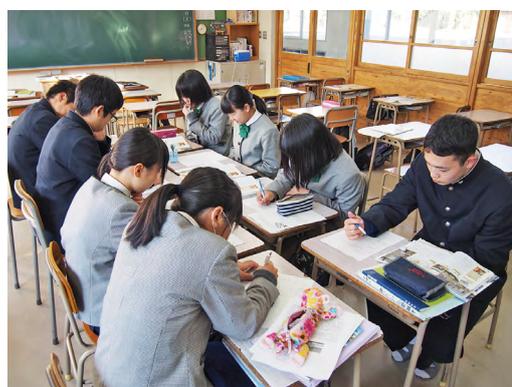
[ KJ 法 → ランキング ]

V ODA の特徴と課題について理解する。

○ ODA の重要性を知る。

→ ODA を知っているか発問する。

→ 1990 年代の 10 年間は世界一の ODA 援助国であったが、2013 年は世界 4 位であることを



★ 話し合いの様子

伝え、何で世界4位に後退したのかを考えさせる。

[KJ法→ランキング]

→逆に同時多発テロを機にアメリカをはじめ欧米諸国は「貧富の格差がテロを生む」として、ODAを増加させたことに触れ、これは貧困の撲滅と開発のための援助資金確保の重要性が世界各国で再認識されたことを理解させつつ、一体化した世界観を実感させる。

- サムカットプラカン汚水処理プロジェクトレポート（外務省資料）を読ませ、ODAが成功する条件について考え、話し合う。 [KJ法→ランキング]

### ● 期待される人的貢献

VI ODAの3本の柱（無償援助・円借款・技術協力）について理解させるとともに、近年では青年海外協力隊、平和維持活動（PKO）、非政府組織（NGO）、非営利組織（NPO）など人的な貢献が高く評価されつつあることを理解させる。

VII 自分が国際貢献するならば、青年海外協力隊、平和維持活動（PKO）、非政府組織（NGO）、非営利組織（NPO）、その他の中から選ばせ、どこでどのようなことがしたいかをまとめ、発表する。

### 【生徒の反応・評価】

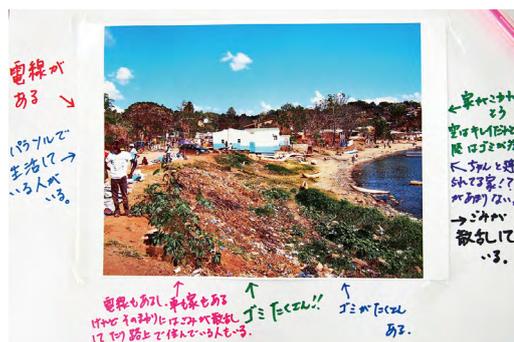
- ◎ 話し合いが活発になればと思い、ESDの手法の1つであるランキングを行ったが、本来、生徒は順位付けを好む傾向にあるのかたいへん盛り上がった。
- ◎ ODAの認知度は低いものの、他者を思いやる気持ちが高いためか国際協力や貢献を積極的に行うべき意見が大半であった。そうした素地があるからこそ、その後の授業でODAの重要性を理解し、人的な貢献が何故、高い評価を受けているのかを理解できたようである。
- ◎ 漠然と認識していた様々な国際協力・貢献の組織について、改めて確認、深化させたことで、身近に感じるようになったという生徒の反応があった。

## 2時限目 「途上国（マラウイ）を体感し、支援する日本を知る」

### 【授業の流れ】

#### ● 途上国（マラウイ）の現状

- I アフリカで知っている国を確認する。
- II 「中南アフリカのイメージ」～アンケートの結果を共有する。
- III 「写真や動画で見るマラウイ」  
→撮影した動画を見せ、マラウイの概況を知る。その後、写真から気づいた点を書き出し、班で話し合い、最も驚いた事についてランキングをする。



★ 気づいた事を書いた写真

フォトランゲージ→ランキング

#### ● JICAの活動を知る

- IV 今回のマラウイ海外研修でお会いした方々の活動内容を紹介し、さまざまな国際協力の内容や活躍する日本（人）を知る。
- V JICAのHPにアクセスしよう。  
→前回の授業で、自分が選んだ国際協力・貢献をしている方がいるかを調べる。

→ JICA の HP にある様々な内容に触れることで活躍されている方々の思いを知る。

### 【生徒の反応・評価】

- ◎ マラウイを知っている生徒は皆無であったが、撮影した動画で概況を知ること、興味・関心が高まり、写真を食い入るように見ていた。また自分の持つアフリカに対するイメージとのギャップがあると、積極的に質問するなど異文化を理解しようとする意欲が感じられた。
- ◎ 写真はできるだけ多くの写真に触れてもらいたいと考え、予算の関係上、L版で印刷した。特に指導者（私）が注目してもらいたいと思った写真については、A4で印刷し、A3紙に貼り付け、余白（縁）に自由に気づいた点を記入してもらったところ、多くの気づきや質問、疑問が記述されていた。またクラスメイトの内容や発想、意見、着眼点について、共感的理解やその洞察力に感銘を受けた生徒もいたようだ。
- ◎ JICA の HP にアクセスしたことで、生徒が思う「何故、豊かで便利な日本を離れ、危険を冒してまで異国の地でボランティアを行うのか」という疑問に対して、様々なカタチではあったが、その答えを示してくれる内容に触れ、生徒は感動していた。

## 3 時限目 「国際協力と自分」～ Think globally, Act locally ～

### 【授業の流れ】

#### ● マラウイの子どもたちを救え！！

- 後発発展途上国（LDC）の児童労働問題の原因を考える。
  - I マラウイの主な貿易品目がタバコであることを確認する。
  - II マラウイのタバコの葉摘みの写真を見て、児童労働の現状を知り、過酷な児童労働に従事している子どもの声を紹介し、問題意識を高める。フォトランゲージ  
→さらに意識を高めるために、多くの写真を使いながら、アフリカの子どもたちと日本のNPO 法人の職員とのやり取り（模擬会話、演出）を取り入れ、事の深刻さと日本との関わりについて考えてもらった。ロールプレイング
  - III 児童労働が脆弱な経済基盤であるモノカルチャー経済から発生していることを再確認し、その原因を様々な要因が相互に関連していることを図で表現する。フォトランゲージ・ランキング
  - IV 児童労働の現状について調べ、話し合った内容をもとに自分の考えを表現する。

#### ● 「国際協力と自分」～ Think globally, Act locally ～

- V 一村一品運動（OVOP）、高千穂・椎葉地区の世界農業遺産登録を例に、海外で評価されている日本の取り組みが世界を救うことを紹介する。（新聞記事を利用しながら説明。）
- VI （マラウイで）今現在、生徒自身ができる国際貢献・協力は何かを考え、発表する。フォトランゲージ

### 【生徒の反応・評価】

- ◎ タバコの葉摘みが人体に悪い影響があることを認識しつつ、お金を稼ぐ過酷な児童労働に従事している子どもの声に生徒一同、絶句の状況であった。また救おうにも単純にモノやお金を渡すだけでは解決せず、そう単純ではないことに気づいたようである。
- ◎ 日本人の普段の取り組みや伝統的な行事が評価され、世界の様々な問題解決に向けて模範となっていることは、日本人として誇らしさを感じつつ、国際協力・貢献の有り様には様々な

スタイルがあり、Think globally、Act locally の精神は故郷や日本、世界を救うものだと感想を述べる生徒もいた。

## 成果と課題

地理学習では参加型学習が有効であると提案されていることもあり、今回はフォトランゲージをはじめ、様々な持続発展教育（ESD）を試みてみた。教科書や資料集の写真と違い、指導者（私）が実際に出向いて撮ったマラウイの写真は生徒にとってより現実味が増し、イメージを膨らませていくことができた有意義な学習であった。漠然として捉えていた発展途上国のアフリカが、伝統的な生活を残しつつも、グローバル社会の中で急成長を続け、生活もより豊かになっている様子に驚くとともに、日本でも見慣れた構造物や文化、特に日系の日本車等が使用されている点には親近感を覚える生徒も多かった。

マラウイで活躍する日本人の様子から、国際協力を行う際、「自立のための支援」が重要である点、そのためには「人材育成」が大きなポイントであることに気づき、理解した生徒も多い。今回の授業で、国際協力や援助の在り方について考えるきっかけになったと考える。また現地で活躍している、または経験者の方々に直接、生徒に現状や思いを述べてもらう機会が少しでもあると、これらの人々がどのような気持ちで国際協力に関わっているかをより理解し、国際協力に関わる人々の「本気さ」を伝えることができたであろう。最後に講義や演習形式の授業に慣れている生徒たちにとって、グループで1つのテーマについて話し合い、発表するという学習形態には若干、戸惑いがみられた。このため、班によっては当初、活発な議論には至らなかったケースもあり、指導者として生徒の緊張を解き、その場の雰囲気を和ませる中で、生徒の知識や経験、個性や能力を引き出し、相互の意見交流や相互理解を促進させ、「共感的理解」を地理教育でどう育むかという課題を今後、克服していきたい。

## 参考資料・教材など

- 教科書『高等学校地理 A』第一学習社
- 地図帳『新詳高等地図』帝国書院
- 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』
- 世界の諸地域 NOW2015 帝国書院
- サムカットプラカン 汚水処理プロジェクトレポート（外務省資料：ODA 改革報告書）
- タバコの葉摘みで身体を壊す子どもたち～マラウイの調査報告書 プラン・ジャパン

### （添付1）マラウイの写真（一部）





(添付2) 研修中に会ったマラウイで活躍する日本人 ～さまざまな国際協力・貢献の例～

職 種	プロジェクト名・活動の場	活動内容
品質管理 (シニアボランティア)	一村一品運動実施能力強化プロジェクト (OVOP)	農民グループの商品の品質に関する巡回指導
デザイン (青年海外協力隊)	一村一品運動実施能力強化プロジェクト (OVOP)	販売促進のためのデザイン考案、トレードフェア出店への支援
数学教育 (青年海外協力隊)	中等理数科教育強化プロジェクト (ムセチェ中高等学校)	数学力向上のため、生徒に対する授業及び教員に対する指導
航空管制 (JICA 専門家)	航空管制人材育成プロジェクト	航空管制人材を育成する指導者
青少年活動 (青年海外協力隊)	ミトゥンドゥ教師研修センター	小学校を巡回し、表現芸術に対する支援
コミュニティ開発 (青年海外協力隊)	国連世界食糧計画 (WFP) 事務所	フィールドオフィスのスーパーバイザーとして、事業計画管理、食料配給計画作成等
公衆衛生 (青年海外協力隊)	ムジンバ県南部病院	保健衛生啓発活動の支援
薬剤師 (青年海外協力隊)	ムジンバ県南部病院	県病院薬局において、薬剤の支払い、在庫管理、発注等のサポート
行政サービス (青年海外協力隊)	ムジンバ県南部病院	小学校におけるエイズ予防啓発活動
コミュニティ開発 (青年海外協力隊)	エディングニヘルスセンター	住民への疾病予防啓発、保健衛生の指導
感染症・エイズ対策 (青年海外協力隊)	ムジンバ県社会福祉事務所	若年層の男性に対するコンドーム使用促進や学校でのエイズ予防活動
障害者支援 (青年海外協力隊)	バンダウエ聴覚障害児支援学校	聴覚障害を持つ青少年全寮制学校での情操教育の支援
農業支援 (JICA 専門家)	持続可能な土地管理促進プロジェクト	持続可能な生産方法で穀物増産を図る研究、支援 (たい肥の改良研究)

# 五感で味わうマラウイ

中 島 和 哉  
NAKASHIMA KAZUYA

佐賀県立唐津東高等学校（佐賀県）

担当教科：地理歴史科

- 実践教科：地理A・文化祭
- 時間数：地理A（4時間）・文化祭（1時間）
- 対象学年：高校2年生（地理A）  
文化祭（希望者・来場者含む）
- 対象人数：地理A 80名・文化祭 120名

## カリキュラム

### ■実践の目的

- フォトランゲージを用い、考え方・ものの見方の多様性・違いを知る
- 貿易ゲームを通し、発展途上国の現状、世界の今を知る
- 写真・ビデオを通して、マラウイの一部を知る
- 全体を通して、マラウイ・アフリカ・世界に興味を持つ

### ■授業の構成（地理A）

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<b>【1～2時限】</b> テーマ：イメージを壊せ！ ねらい：フォトランゲージなどを用い、イメージを覆す	① アフリカ・マラウイのイメージを書かせる ② フォトランゲージを用い、4～5人のグループで作業をおこなう ③ グループごとにフォトランゲージの発表をおこない、共有する	マラウイの写真（5種類）
<b>【3時限】</b> テーマ：発展途上国を知る！ ねらい：貿易ゲームを通して、発展途上国の置かれている状況や、世界の今を体感する	① 8つのグループ（4つの段階のグループをそれぞれ2つずつ）に分かれて、貿易ゲームを体験する ② 授業の最後に、感想を発表し、その考えを共有する	
<b>【4時限】</b> テーマ：マラウイの“一部”を知る！ ねらい：写真のスライドや映像を用いて、マラウイの一部を紹介し、マラウイの一部を知る マラウイのお菓子を試食し、マラウイの一部を味わう	① 写真スライドなどを用い、私が見たマラウイの一部を紹介する ② 授業を通しての感想を記入する ③ マラウイを味わう	写真スライド

## ■授業の構成（文化祭）

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
テーマ：Smile MALAWI！ ねらい：一般来場の方を含め、より多くの人にマラウイの一部を知ってもらう	① 社会科教室を貸し切り、展示と発表をおこなう ② マラウイのお菓子やハイビスカスティーの試食・試飲を体験してもらう	

## 授業の詳細

### 地理 A

#### 【1～2時限】テーマ：イメージを壊せ！

##### ① アフリカ・マラウイのイメージを書かせる

- 生徒のアフリカ・マラウイのイメージ

・暑い ・雨が多い ・動物がたくさんいる ・貧困（所得の格差） ・農業  
 ・国名がかわいい ・太陽が大きい ・砂漠 ・さまざまな民族 ・雄大な自然  
 ・植民地 ・水 ・伝染病 ・治安が悪い ・スタイルがいい ・高い身体能力  
 ・足が速い ・黒人 ・戦争、紛争 ・電気が普及していない ・発展途上国  
 ・飢え（飢餓） ・よくわからない（知らない） など

一番の驚きは、予想以上にアフリカやマラウイに対して否定的なイメージをもつ生徒が多かったことである。一方で、スポーツや自然などについては、肯定的なイメージが多かった。日常生活の中でアフリカやマラウイに触れる情報が少なく、たとえあっても貧困や紛争を伝える報道が多いことがこのようなイメージにつながっていると考えられる。

##### ② フォトランゲージを用い、4～5人のグループで作業をおこなう



上の5枚の写真を使って、フォトランゲージをおこなった。それぞれの写真に対して4~5人のグループを2つずつ割り振り、同じ写真でもグループによって考え方・ものの見方の違いに気づくように配慮した。

③ グループごとにフォトランゲージの発表をおこない、共有する

20分程度の作業のち、それぞれのグループごとに発表をおこなった。生徒たちは自分たちのイメージが、イメージ通りであったり、そうではなかったり、人によって見方・考え方が違ったりすることに大きな関心を持ったようであった。また自分たちの考えやイメージが、固定観念によって作られている部分もあることに気づき、驚いている者が多かった。特に「半そでを着ているから夏」と判断している（本来はマラウイの8月は冬）生徒や、「携帯電話を使っている」「自動車がたくさん走っている」「物がたくさん売られている」など自分たちのイメージとのギャップに驚いたようである。

・ 生徒の感想

いろんな洗身があった。(林の男学生は)何にもした人(の)情報を調べるとど  
じやくした。他の人の洗身を知ると楽しかった。人の意見からいろんな話にながって  
たくエトのことを聞けし興味をもった。行ってみたい!!  
いろんな方向から物事を見ることができる

思っていたよりも色々な発見があった。アフリカ・マラウイというだけで勝手な  
固定観念があったことに気付いた。自分たちの生活を基準にして見ると  
驚くようなことも、現地の人にとってはそれが普通であり、先入観は恐ろしい  
ものだと思えて感じた。

自分の中の勝手な想像と、実際のマラウイの写真とは結構違っていたこと感じることが多かった。  
どうしても日本人基準で見ているところが多く、思い込みや先入観が自分にも多くあった。  
何気なく写真を見て読み取ったことでも、それにはきちんと理由があったりして面白かった。

### 【3 時限】 テーマ：発展途上国を知る！

8つのグループ（4つの段階のグループをそれぞれ2つずつ）を作り、貿易ゲームをおこなった。この活動を通して、発展途上国の置かれている状況や、先進国の立場、世界の今を感じてもらうことができた。

・生徒の感想

ゲームを通して世界の経済状況の縮図を見ることができ、とても興味深かった。先進国と発展途上国の利益の差に驚いた。先進国が発展するには、多くの資源と労働力だけでなく、発展途上国との交渉も必要なのかなと思った。同盟を結んでも、利益の分け方を話し合っていないと、紛争の原因になるかもしれないと思った。

貿易ゲームをして、それぞれの班にお金や、道具や紙などの技術や資源は配られた。私達の班は、紙などの資源はたくさんあるけどお金も、技術もなくて、何も製品を作ることができませんでした。世界にも先進国や発展途上国などいろいろな国があるけど、発展途上国が、がんばって国を発展させたとしても、豊かしいことがわかりました。先進国が、お金だけでなく、技術も提供することが大切だとわかりました。

### 【4 時限】 テーマ：マラウイの“一部”を知る！

過去3時間の授業の内容を踏まえ、写真のスライドを用い授業をおこなった。ここで一番注意した点は、あくまでもマラウイの“一部”を紹介するという点である。私のフィルターを通したマラウイの情報が、生徒たちの「マラウイ」「アフリカ」を作り上げる“すべて”にならないよう配慮した。

またマラウイのお菓子の試食では、意外なおいしさに生徒の多くが驚いていた。

・生徒の感想

世界一貧しい国という言葉やアフリカという言葉を知って、もっと可哀相な国かと思っていたけど、可哀相なばかりではないんだろかなと思った。写真を見て驚かされる事も多かった。改めてお金のいる先進国の暮らしに限らずとも幸せとは言えないんだろかなと思った。むしろ私は、今みたいに時間にとらわれながら小さな事を気にしながら生活する方がよほど可哀相だっけな気がするかもなと感じた。でもだからと言って私は実際にマラウイのような所に行き、暮らしたいする勇気はあまりなくて、この夢な裕福さというものを知らない生活の方が、もっと多くのことを幸せと感じる人間になれたのかもしれないと思った。

日本に暮らしていると不自由がなく、毎日を過ごせます。アライの授業を通して発展途上国を体験できた感じがします。小学生からずっと学校では、貧困な国があること、それを且かけようとする活動があることをたくさん学んできたはずですが、全然わかっていほせんでした。年季に貿易ゲームでは、発展途上国における現状がよく分かりました。でもほんの一部であって、そういう国にはたくさんの困っていることがあると思います。高校生になってこういった授業ができて本当によかったです。ありがたうございました。

意識かわりました！

アフリカは、行ったことのない所なので、小さい頃から、学校やテレビの情報を通して現地の状況を学んできて、その中で「貧困」という印象がとて大きかったです。けど、実際の現地の写真を見ると、みんな服を着ていて、食べ物も私たちと変わらないようなものを食べていると聞き、大きくイメージを変えさせられました。また、借金のデータを見ると大きな差にありまして、アライの人はお金がなくても、自分たちで食料を作るとして、お金の有無で「貧困」ではないんだと学びました。

今日の授業を通して、私たちは先入観に多くの部分支配されているのかもしれないと感じました。「途上国は貧しい」、「半袖だから夏」、「発展途上国は横暴」といったイメージが、私の中には少なからずありました。しかし、それは間違っている部分があったり、わかりあえないところからこのことあると思います。先進国に往んではいるからその発達のスピードがある、わかるようになって自分にも気づきました。先入観を取り除くためには正しい知識が必要とわかったのと、無知であることは怖いと思います。だから日々、知っていくと思います。

そして貿易ゲームをして、すごく悔しいという感情がわいてきたのは、トランプには負けたのではないと思いました。でも他の班の賢い方法を参考にしたり、他の人の失敗をくぐり直さないように自分ももっと楽しいかなと思います。

## 文化祭（展示・発表）

テーマ：Smile MALAWI！

9月6日（日）におこなわれた文化祭において、「Smile MALAWI！」と題して展示・発表をおこなった。当日は50分の展示・発表を3回おこない、合計120人ほどの生徒や保護者にマラウイを知ってもらうことができた。また展示・発表の前後で、「イメージが大きく変わりました」「アフリカに行ってみたくなった」「海外協力隊に関心が出ました、行ってみたい」などの声が聞かれ、この取り組みの成果を実感できた。

また展示に当たっては、地理を選択している生徒に協力してもらい、壁新聞の作成や教室のレイアウトなどをおこない、協力してくれた生徒もいい経験ができたようであった。



## 成果と課題

今回の取り組みを通して感じたこと・成果は、大きく次の3点が挙げられる。

1点目は、生徒のアフリカやマラウイに対するイメージが予想以上にマイナス、もしくは否定的なものであるということがわかったことである。これは私たちの授業での取り組みやメディアからの情報の少なさが大きく関係していると考えられる。生徒たちの興味・関心は無限大であるため、アフリカを身近に、そして肯定的にとらえるようなこのような取り組みを、今後も継続していくことが重要だと感じた。

2点目は、自分たちの持つ先入観・思い込み・固定観念が、狭い視野から出るものであると、生徒自身が気づいたことである。「アフリカは貧しい、遅れている」「栄養失調で苦しんでいる、暗い表情で生活している」という考えが「意外にそうでもない、車も携帯電話も洋服もある」「人々がにこにこ生活をしている」と変化したように、異文化を学ぶことで自分たちの認識や考え方を見つめなおすきっかけになったのではないだろうか。

3点目は、文化祭での企画を通して保護者も含め多くの人に、アフリカやマラウイについて知ってもらう、興味を持ってもらうきっかけを作れたことである。

今回、マラウイ研修に行ったことで、人の輪が広がり、知識の輪が広がり、それが生徒に伝えられたこと、生徒の考えが少しでも変わったことが、とてつもなく素晴らしい経験になりました。ありがとうございました。

# The World is Small!

## ～ Let's skype with JOCV in Malawi! ～

柴田 邦博

SHIBATA KUNIHURO

佐賀県立武雄高等学校（佐賀県）

担当教科：英語科

●実践教科：英語

●時間数：1時間

●対象学年：高校1年生

●対象人数：40名

### カリキュラム

#### ■実践の目的

- Skype 交流を通し、教科書で学習するマラウイを身近に感じさせ、現地の状況への理解を深め、興味意欲を喚起する。
- 本校の教育目標である「国際社会の発展に貢献できる人材」のロールモデルである青年海外協力隊との交流をすることで、生徒の国際的視野を涵養する。

#### ■授業の構成

担当学年（高校2年生）のコミュニケーション英語Ⅱの授業内で取り扱うことも考えたが、既に1学期の段階でマラウイのことを扱ったレッスンの学習を終えていたため、高校1年生を対象にすることとした。コミュニケーション英語Ⅰでマラウイ人の「風をつかまえた少年」ウィリアム・カムクワンバ氏の自伝を扱ったレッスンの導入として高校1年生2クラス（1年3組、1年6組）で同一内容の授業を実施した。なお、私の担当学年ではないため、高校1年生担当の教員とのチーム・ティーチングという形をとった。

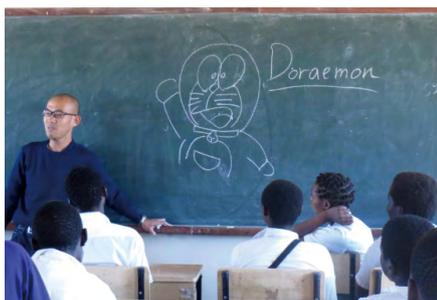
### 授業の詳細

#### 1 導入 ～マラウイ・クイズ（15分間）～

8月の事後研修で他の研修参加者と作成したマラウイに関するクイズを実施した。普段の授業と同様に説明等はすべて英語で行った。ただし、解説の補足説明のスライドには一部日本語を用いた。選択問題については生徒たちが所有しているタブレットPCでSKYMENUという学習支援システムを介して回答してもらった。

Q1 Where are these pictures taken? (これらの写真はどこで撮られた?)

マラウイで撮影した様々な写真からその写真がどこで撮られたものを推測してもらった。



Q2 Where is Malawi? (マラウイはどこにある?)

Europe / Asia / **Africa** / South America

Q1 で見せた写真からアフリカか南アメリカと推測した生徒が多かった。

Q3 What is the capital city of Malawi? (マラウイの首都はどこ?)

Nairobi / Cairo / **Lilongwe** / Bangkok

正解発表後、首都リロングウェの写真で見せ、生徒が思い描いているアフリカへのイメージを変えることを心がけた。



Q4 What is the main food of Malawi? (マラウイの主食は何?)

rice / bread / potato / **nsima**

シマがメイズ (トウモロコシ粉) から作られること、多くの家庭や職場で食事前に作られていることなどにも触れた。



Q5 What is the official language of Malawi? (マラウイの公用語は何? 1つはチェワ語、もう1つは…。)

One is Chichewa. The other is … **English** / French / Japanese / Spanish



公用語が英語だからといって、すべての国民が英語を話せるという訳ではないということ、かつてイギリスの植民地であったことから、イギリス英語が使われていることにも触れた。(Centre など)

Q6 What is the life expectancy in Malawi? (マラウイの平均寿命はどのくらい?)

( 54 ) years old.

まず、“life expectancy”の意味を確認した。答えを発表した後、国民がだいたい54歳くらいで亡くなるという意味ではなく、5歳未満で死亡する乳幼児が多いため平均寿命の年齢が低下することを補足した。

Q7 What is the literacy rate of Malawi? (マラウイの識字率はどのくらい?)

( 75 ) percent.

まず、“literacy rate”の意味を確認した。正解を発表すると生徒たちは意外と数値が高いという印象を持ったようだ。

Q8 What is the poverty rate in Malawi? (マラウイの貧困率はどのくらい?)

( 72.2 ) percent.

まず、“poverty rate”の定義(=1日1.25ドル以下で生活している人々の割合)を確認した。生徒たちは多くの人が貧困に苦しんでいることは分かったようだが、1.25ドル以下というのがどれほどの貧困を意味するのかを想像するのは難しかったようである。

2 展 開 ～マラウイで活躍する青年海外協力隊と Skype 交流 (30分)～

マラウイ研修で訪問した木村隊員(1-6)、角田隊員(1-3)に協力をしてもらい、Skypeで本校とマラウイをつないだ。交流の前に隊員の活動について簡単に説明した。Skypeがつながった瞬間、教室で歓声が起こったのが印象的だった。質問をしたい生徒たちが1人ずつ電子黒板の前に出てきて、事前に考えてきた質問をするという形をとった。英語の授業中なので当初英語で行うことも考えたが、興味意欲の喚起や日本人に対して質問をするということなどから鑑みて、日本語で行うことにした。最初は恥ずかしがっていたようだが、時間が経つにつれ、雰囲気も和らぎ、しばらくしたら電子黒板の前には質問をしたい生徒で行列ができていた。途中回線がとぎれることはあったものの、電波状況は概ね良好だったように思われる。

### 【質問例】

- ・現地の食べ物で一番好きな食べ物は何ですか？
- ・サッカーはどのくらい人気があるか。どのようにしてやっているのですか？
- ・マラウイに行って感じた日本のすごさとは？
- ・マラウイの治安はどうですか？
- ・日本に帰って一番にしたいことは何ですか？
- ・彼女はいますか？

質疑応答の後、それぞれの隊員から生徒たちへメッセージをいただいた。

### （木村隊員のメッセージ：要約）

日本にいたらなかなか考えないが、このような授業は発展途上国のことを考える機会になる。僕と話すことで何か少しでも感じてもらえて、何かのきっかけになればと思う。国際協力は目指して損がない分野。それは自信を持って言える。勉強にせよ部活にせよ今やっていることは無駄にはならない。ぜひ高校生活を満喫して欲しい。



### 3 まとめ ～ライティング（5分間）～

導入のマラウイ・クイズや青年海外協力隊員との Skype 交流で得た情報を英語でまとめる活動を行った。タブレット PC でタイピングしたものを佐賀県独自の学習支援システム SEI-net を介して提出をさせた。

## 【+α 文化祭 たけお万博 Malawi 館】

より多くの生徒や保護者、一般の方々にマラウイのこと、本研修で学んだことを知ってもらうため、9月の文化祭において、「Malawi 館」という展示を実施した。

### 主な展示・催物内容

#### ・シマ、コンドレー販売・試食会

今回の研修の参加者2名と過去にマラウイでJOCVとして活躍された方1名が来校され、シマ、コンドレーを作ってもらい、販売、試食会を行った。食べやすいようにと協力して頂いた方に海苔の佃煮まで用意してもらった。生徒にとっては少し抵抗があったようだったが、食べた生徒は「おいしい」と口にしていった。

#### ・JOCV とのビデオ通話交流

WebEx というビデオ会議システムを用いて、マラウイにいる青年海外協力隊とビデオ通話を行った。希望する生徒が自由に会話するという形式をとった。

#### ・Malawi Quiz

マラウイに関するクイズを掲示し、来場者に答えをを考えてもらった。

#### ・スライドショー上映

研修で撮影した写真で作ったスライドショーを教室の電子黒板で上映した。

#### ・Where do you want to live in the future?

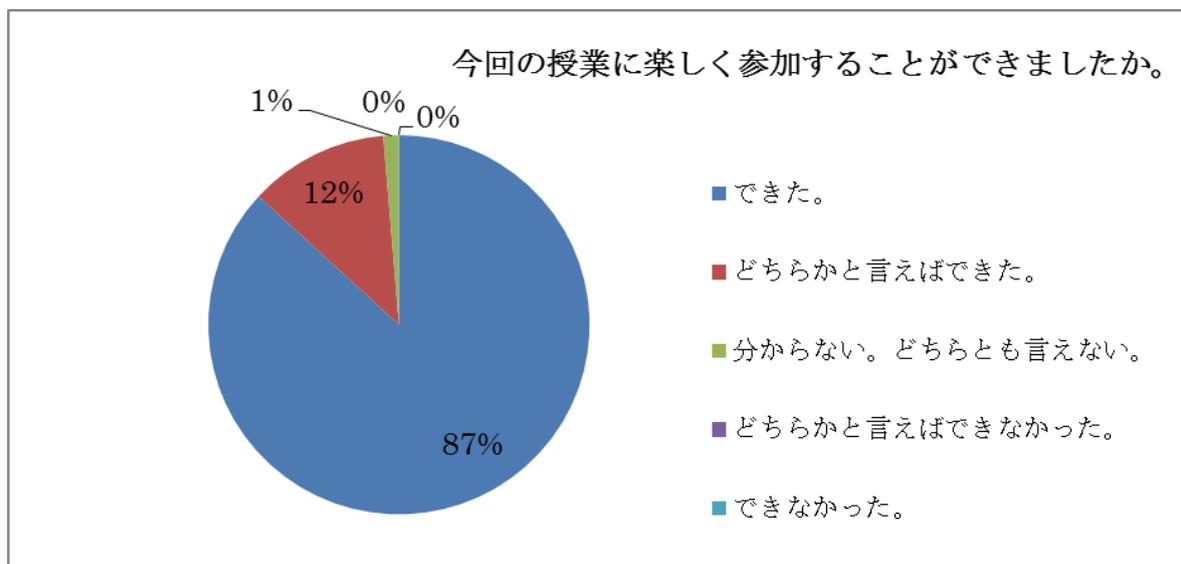
世界地図の将来住みたい国のところにシールを貼ってもらった。

#### ・マラウイの物品販売会

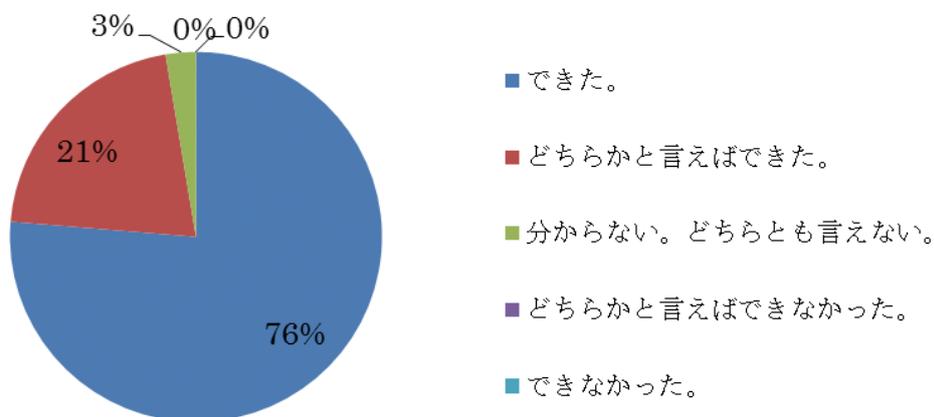
研修の際に購入したもの（ムズズコーヒー、モリンガパウダー、ブックカバーなど）を販売した。現地の物価を認識してもらうため、現地と同じ値段で販売した。

## 成果と課題

### ■ アンケート結果



今回の授業でマラウイへの理解を深めることができましたか。



- ① 「今回の授業に楽しく参加することができましたか。」という問いには99%、「今回の授業でマラウイへの理解を深めることができましたか。」という問いには98%の生徒が肯定的に回答（「できた」「どちらかと言えばできた」）していることから、今回の授業は生徒には概ね好評だったことが窺える。
- ② Skypeは生徒が世界を身近に感じる有効な手段であることを実感した。

※生徒の感想（抜粋：原文ママ）

- ・こちらから一方的に質問するだけでなく自由に対話することができればもっと深い授業になると思った。
- ・とても遠いところなのでSkypeで繋がったことに驚きました。そして質問したり、やり取りができたので、それにも驚きましたが楽しかったです。世界のいろんな地域にいる人と話せる機会は少ないので、貴重な体験ができてよかったです。
- ・世界とつながっている感じがしてよかった。
- ・世界が小さくなったように思い、身近な存在になった。
- ・実際に現地で働いている方の声が聞けて、ただ話を聞くよりも関心を持って授業に参加できたと思います。また、機会があったらやってみたいです。
- ・現地の人と話してみるのも良いと思うので次は現地の人と話す授業があればいいなと思いました。
- ・マラウイの状況がリアルだったので面白かった。
- ・電波環境が悪かったようなので、スムーズにやりたい。

- ③ 担当学年（高校2年生）で使用している教科書でもウィリアム・カムクワンバ氏の自伝を扱ったが、研修前に既に学習を終えていたので、日々の授業の中で体系的に授業を計画できなかったことが悔やまれる。ウィリアム氏の自伝は高校の複数の英語の教科書で扱われているので、次年度以降、このトピックを扱う際には計画的に授業を実践したい。
- ④ 本授業は、生徒の興味意欲の喚起に焦点を当てたため、生徒の深い思考を促す活動の時間をとることができなかった。

参考資料・教材など

ELEMENT English Course I Lesson 8 “The Boy Who Harnessed the Wind”

# 世界の未来と日本の役割

岡留 真吾  
OKADOME SHINGO

さつま町立盈進小学校（鹿児島県）

担当教科：国語

●実践教科：社会科（10時間）  
道徳（1時間）

●対象学年：6年生

●対象人数：41名

## カリキュラム

### ■実践に当たって

6年生社会科「世界の未来と日本の役割（全10時間）」の単元目標は以下の通りである。

我が国の国際協力、国際連合の働き、国際交流について意欲的に調べ、世界平和の大切さと我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考え、世界の平和を守るために大切なことは何か、自分の考えをもつことができる。

学校でのユニセフや赤い羽根共同募金への子供たちの協力を見ていると、あまり積極的ではないことが分かる。理由を聞くと、「あまり興味がないから。」という答えである。海の向こう側で困っている人たちと言っても、「どんなに困っているか」、「なぜ困っているか」など姿や原因が分からないからである。だから、「自分には関係ない。」と思ってしまうのだ。

日本も戦後、アジア救済公認団体による「ララ物資」による給食支援等海外からの協力ももらっていた。また、世界銀行からも社会資本充実のために様々な融資が行われ、黒部第4ダム、新幹線、東名高速道路などの建設が行われた。さらには、日本は世界中の様々な先進国や発展途上国からたくさんの物を輸入に頼っている。私たちの生活になくはならなくなったスマホやパソコン、ゲーム機器にはレアメタルが使用されている。そのレアメタルの権益をめぐるコンゴや隣国の国では国や軍、武装勢力などによって紛争が行われている。私たちが豊かな生活を求めてレアメタルを使う機器の需要が伸びれば伸びるほど、紛争が長引くというのもまた事実である。私たちの生活は常に他国に支えられており、私たちの消費行動や生活様式が世界中にある様々な課題に影響を与えている。

そう考えると、発展途上国の人々への協力を「あまり興味がない」、「自分には関係ない。」とは言えないはずだ。そこで、私は単元目標にある『世界の平和を守るために大切なことは何か、自分の考えをもつことができる。』の箇所をさらに具体化して、次のような目指す子供像を考えた。

世界中の様々な国とつながり合っている日本人。つながり合っている世界中の国の中の一日本人としての自覚をもち、主体的に世界の様々な問題に関心をもち、よりよい判断ができる子供。さらには、自分にでもできる国際貢献を考え実践できる子供。

そこで、目指す子供像を具現化するために、現在の本学級の子供の実態を考えて、授業化するに当たり以下の視点で単元開発を行い、授業を組み立てていく。

- 「覚える事項が多く、内容にもあまり興味をもてないので社会科が嫌い。」と答える子供が3割いる。その中には、「書かれてあることが難しく、読んでも意味が分からない。または、読めない。」と答える子供が1割いる。そこで、本単元ではどの子供も主体的に課題を解決できるように参加体験活動やシミュレーション活動、動画の視聴、青年海外協力隊員やさつま町在住の外国人GTとの対話、討論活動を取り入れていく。
- 10時間という小単元において、終末まで子供の課題意識が継続できるように、導入では参加型体験活動を取り入れる。そこで、「これは不公平だ。なんとかしなければいけない。この問題を解消するために今の日本は何をしているんだ。世界はどうなっているのだ。」という強い学習動機から単元の学習計画を立てさせ、終末の「自分にでもできる国際貢献～僕の私の意見文～」という学習への目的意識をもたせたい。

### ■ 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p><b>【1時限】「世界の諸問題」</b></p> <p>世界のどこかで起きている戦争や紛争、地球温暖化や食糧問題など日本や世界の人々がこれらの問題にどのように取り組んでいるのか話し合わせ、学習の目的意識をもたせる。※本授業は2時間で行う。もう1時間は道徳の時間「世界がもし100人の村だったら」と抱き合わせて実施する。</p>	<p>本授業は6年生児童82名を体育館で合同で実施する。</p> <p>前半は、「世界がもし100人の村だったら」の教材を使い言語や人口、文化、宗教などの多様性と格差・貧困の問題を参加型体験学習を取り入れることで構造的にとらえることができるようにする。</p> <p>また、後半では世界で起こっている戦争や紛争、地球温暖化等の影響により困っている人たちがいることをフォトランゲージで気付かせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 世界地図</li> <li>・ 「世界がもし100人の村だったら（開発教育協会）」の役割カード、</li> <li>・ 児童用板書資料、</li> <li>・ 海水面につかっただツバルの写真など児童の問題意識を醸成するフォトランゲージ用写真</li> </ul>
<p><b>【2時限】「日本とアフリカのつながり」</b></p> <p>私たちの身の回りにあるモノについて日本から遠く離れたアフリカとのつながりを見付け、私たちの生活がアフリカをはじめとする世界中の国々や地域から支えられていることに気付かせる。また、アフリカをはじめとする世界中にある課題が私たちの生活と密接に関わっており、自分たちの消費行動や生活様式により大きな影響を与えていることに気付かせる。</p>	<p>スマホやゲーム機、チョコレートなど子どもたちにおなじみのモノが描かれてある絵カード18枚を配布し、アフリカとどのようにつながっているのかをグループで話し合わせる。また、コラム「レアメタルが軍事資金に」を読んで、考えたことをグループで話し合わせる。</p> <p>本時のワークショップで出た「日本はアフリカなどの国から支えられている」という現実と第1時限で出た「世界の諸問題」を関係付けて子供たちから学習問題と学習計画を立てることができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国際理解教育実践資料～世界を知ろう！考えよう！～（JICA）ワーク①掲載の絵カード</li> <li>・ レアメタル問題における動画</li> <li>・ 第一時で使用した写真資料（板書用）</li> </ul>

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p><b>【3時限】「世界の平和と安全を守る国際連合Ⅰ」</b>            国連の中のユニセフ、ユネスコ、平和維持活動の目的や活動内容についてインターネットや図書資料で調べて理解できるようにする。</p>	<p>子供にとって目的や活動内容が比較的分かりやすい左記3つを調べ学習の対象とする。また、子供が知っている活動内容が分かりやすく豊富に掲載されているHP「国連キッズ」を使って調べ学習を行わせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>世界中の人々が平和に暮らすことができるようにするために、日本はどんな活動をしているのだろう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ HP 国連子供キッズ</li> <li>・ 「国際連合の働き（角川出版 1992）」</li> </ul>
<p><b>【4時限】「世界の平和と安全を守る国際連合Ⅱ」</b>            前時で調べた機関や活動に携わってきた2人の日本人の動画を見て、国連の働きや携わる人たちの願いを考える。</p>	<p>前時で調べたユニセフやユネスコ、平和維持活動の目的や活動内容を比べることで、国連の目的を考えさせる。また、国連WFP アジア地域局長の忍足謙朗さん、国連事務次長明石康さんの動画を使って2人の活動詳細や願い、苦勞を捉えさせ、国連では様々な国の人たちが協力し合って世界の平和のために活動していること、またわが国がその重要な働きをしていることに気付かせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ NHK「プロフェッショナル～仕事の流儀～忍足謙朗」の動画</li> <li>・ 国連平和維持活動—わたしたちの国際平和協力」（日本広報センター）</li> </ul>
<p><b>【5時限】「地球環境を守るための取組」</b>            地球環境の悪化を防ぎ、持続可能な社会を実現するために、国際連合を中心として、様々な努力をしていることを理解させ、今後さらに日本に求められる取組はどんなことかを考える。</p>	<p>環境問題の原因と解決のための世界の取組である国連人間環境会議、地球サミットでの決定事項などの取組を調べさせる。さらに、京都議定書での決定がうまくいかなかった原因について先進国と発展途上国の南北問題について理解させる。発展途上国が議定書に調印しなかったことについてどう考えるか討論をさせた上で、先進国や日本の今後の取組はどうあるべきか考えさせるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 世界の二酸化炭素排出量グラフ</li> <li>・ 南北問題の概要を示したプリント</li> <li>・ 環境問題に対する世界や日本の取組をのせたプリント</li> </ul>
<p><b>【6時限】「NGOとODA」</b>            日本の世界貢献には、国連以外にも NGO や青年海外協力隊など支援を必要としている人々ために教育・医療・農業などの幅広い分野での活動がなされていることを理解させる。</p>	<p>世界には 67,000,000 人の学校に行けない子供がいる。教育が受けられないことで起こる負の連鎖を絵カードを使って並べ換えさせるようにする。さらには、負の連鎖を断ち切るためには、どのような支援が必要になるのかをグループで考えさせることで、日本の NGO や ODA における活動に結びつける。</p> <p>さらには、終末 15 分で実際にコートジボワールに行った元青年海外協力隊員の方を GT として招聘し、参加動機や現地での苦勞や喜びを捉えさせたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国際理解教育実践資料～世界を知ろう！考えよう！～ワーク②の絵カード（JICA）</li> <li>・ 様々な分野で活躍している青年海外協力隊の写真</li> <li>・ 青年海外協力隊の GT</li> </ul>

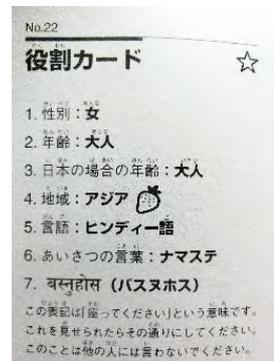
時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p><b>【7時限】「文化やスポーツを通じた国際交流」</b></p> <p>いろいろな分野で国際交流が広がる中で、自国の文化や伝統を大切にする一方で、お互いの文化や伝統を理解し合い、差別や偏見なく交流し合うことが、平和な国際社会を築くことにつながることを考えさせる。</p>	<p>さつま町在住には、外国人が59人いらっしゃる。人数割合の多いフィリピン、中国、韓国、アメリカ出身の4名をGTとして招聘し、日本にいらした理由、楽しかったこと、苦労したこと、悲しかったことをシンポジウム形式で話をしてもらおう。後半25分で、子供たちからの質問や意見に答えていただく時間を設け、国際交流を行う上で大切なことは何かを考えることができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外国人GT4名</li> <li>・ 前单元「日本とつながりの深い国々」で学習した各国の伝統や文化に関して疑問に思ったこと等をあらかじめ質問内容として考えさせておく。</li> </ul>
<p><b>【8時限】「世界の水・食糧・エネルギー問題」</b></p> <p>世界の水・食糧問題の原因を知り、自分にもできる解決方法を考えさせる。</p>	<p>「ほくら地球調査隊～ウェブコンテンツ～(JICA)」を使って、世界の水・食糧問題の原因を調べさせ、日本が年間640億m<sup>3</sup>の水を間接輸入している実態、日本の食料輸入におけるフードマイレージの問題や世界の食料価格の高騰等を理解させる。</p> <p>さらには、その課題から自分たちにもできる課題解決方法はないかを考えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ほくら地球調査隊～ウェブコンテンツ～(JICA)」</li> <li>・ グループ討議</li> </ul>
<p><b>【9時限目】「自分にもできる国際貢献 ～僕の私の意見文～」</b></p> <p>今の自分たちにもできる国際協力や日本人が行える国際協力や将来の国際協力のあり方について意見文を書く。</p>	<p>「水」「食料」「エネルギー」「リサイクル」「書き損じはがき回収や募金活動」「我が国及び他国の文化や伝統に関心を持ち、知ろうとすること」「世界で起きていることに興味を持ち、知ること」等、既習事項の観点を示して意見文を書かせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前時までの板書資料</li> <li>・ 2学期に国語科で使った意見文の手引き</li> </ul>
<p><b>【10時限目】「自分にもできる国際貢献 ～僕の私の意見文～」</b></p> <p>書き上げた意見文の発表会を行い、国際協力における視野を広げるようにする。</p>	<p>グループで意見文を聞き合い、各班代表児童の発表から学級代表児童を一人決めるようにする。代表児童については、児童集会で発表したり、町や新聞の広報に掲載してもらったりして幅広く啓発を図っていくようにする。</p>	

## 授業の詳細

### 1 時限目 「世界の諸問題」「世界もし100人の村だったら（開発教育）」を使って

#### ① 子供の活動の流れ（社会科1時間+道徳1時間 計2時間扱い）

- ① この「世界がもし100人の村だったら」という教材は、参加型体験活動を取り入れた学習で、国際理解教育・開発教育なので盛んに用いられている手法の一つである。世界の総人口を100人にしたとき、男女比・年齢層比・大陸別人口密度・言語の多様性・富の配分率・識字率などは、どのようになっているかを体験できる活動のである。学年合同82名、体育館で実施した。子供たち一人一人には、「男性・老人・アジア・中国語（ニーハオ）・文字が読めない…」など上記観点の情報が書かれてあるカードを配布した。カードは一人一人異なる情報が書かれてあり、「同じ言語の人同士で集まりなさい。」



【カード例】

「書かれてある地域（大陸）に移動しなさい。」などの教師の指示通りに行動することによって、楽しみながらも世界の多様性と格差・貧困問題を構造的に捉えることができる。

- ② 後半20分は、世界で起こっている戦争や紛争、地球温暖化等の影響により世界で困っている人たちの写真をフォトランゲージで見せる。それらはどこでどんな問題を抱えているのかを話し合わせる。

#### ② 子供の活動の成果・反応

- ① 体験活動を取り入れたり、途中でグループ討議を入れ込んだりすることで、前单元「日本とつながりの深い国々」や国語科「平和について意見文を書こう」等で学習した知識・認識が線につながり、面となってつながっていった。
- ② 子供たちの振り返りを読むと、予想通り「日本に生まれてよかった。」「世界にはいろんな人たちがいろいろな立場で生活をしているんだ。」「世界にはいろんな問題があるのを知ってびっくりした。」という感想が大半を占めていた。

### 2 時限目 「日本とアフリカのつながり」

#### ① 子供の活動の流れ

- ① 『国際理解教育実践資料～世界を知ろう！ 考えよう！（JICA）』のワーク①掲載の絵カード18品目を配布し、アフリカとどのようにつながっているのかを調べて確かめる。
- ② コラム『レアメタルが軍事資金に』を読み、感想を話し合い、学習のめあてと計画を立てる。コラム要約は以下の通りである。



【ワーク①掲載の絵カードの一部】

スマホやパソコン、ゲーム機器にはレアメタルが使われている。そのレアメタルを巡ってコンゴでは、国や軍、武装勢力などによって紛争が起きている。多くは違法採掘から活動資金を得ている。日本でスマホ等の需要が伸びると、紛争が長引く現実がある。アフリカが抱える問題には、私たちの消費生活が影響している。

## ② 子供の活動の成果・反応

- ① アフリカから輸入されている物はチョコレートとダイヤだけだと思っていたグループがほとんどであった。自分たちの暮らしがアフリカをはじめとする世界中の国から支えられていることに驚いていた。
- ② 自分たちの消費行動や生活様式が、アフリカをはじめとする世界中にある課題と大きく関わっていることに驚いていた。さらには、前時で「世界中で起きている様々な課題は実は人事ではなかったのだ。」「なんとかしたい。日本はそのために何かしているのか。」という思いをもつことができ、子供が主体的に学習計画を立てることができた。



【コラムの感想を話し合う子供】

## 3・4時限目 「世界の平和と安全を守る国際連合Ⅰ・Ⅱ」

### ① 子供の活動と流れ

- ① 3時間目でインターネット『国連キッズ』を使って、国連の中でも比較的に子供に分かりやすい活動である「ユネスコ」「ユニセフ」「国連平和維持活動」に焦点を当ててどんな目的でどのような活動をしているのかを調べる。
- ② 4時間目で、「ユネスコ」「ユニセフ」「国連平和維持活動」の目的や活動内容を比較させることで、国連そのものの目的と構成を考えた。さらに、国連 WFP アジア地域局長の忍足謙朗さん、国連事務次長明石康さんの動画を使って2人が取り組んできた活動詳細や願い、苦勞を捉える。動画は2本とも50分程度の番組であるが、50分番組中の忍足さんの願いや苦勞のインタビュー場面に限定して5分間程度を視聴させた。



【NHK 仕事の流儀 プロフェッショナル】  
「食料支援、届けるのは未来」  
よりインタビュー場面の画像

### ② 子供の成果・反応

- ① 忍足謙朗さん、明石康さんが任務を遂行するためには命の危険もあったこと、与えられた条件下では任務遂行が難しい様々な物的・金銭的・人的困難があったにも関わらず、それでも



【4時限目板書】

各国の仲間と任務を遂行したその使命感に心を打たれていた。

- ② 2人の任務が『ただ食料を届けさえすればよかったのか。』『ただ正当な選挙を行えばよかったのか。』をグループ討議することで、2人の最終ゴールが「現地の方々が自立できること」を目指しており、一つ一つの援助は緻密に計算されていることを子供自身で考えることができた。

## 5時限目 「地球環境を守るための取組」

### ① 子供の活動と流れ

- ① 二酸化炭素排出は、豊かで便利な生活や利潤を求めるがために排出されている事実を確認する。その結果、世界の各地で異常気象や海面上昇などで困っている国があることをスライドで確認する。
- ② 環境問題を解決するための世界的な取組を、資料を使って調べさせ、国連を中心として各国が様々な努力をしていることを調べる。
- ③ 京都議定書の中の二酸化炭素排出量削減について、発展途上国側の言い分と先進国側の言い分をそれぞれ考えさせ、討論を行った。その上で、日本を含む先進国の今後の役割について考える。



【5時限目板書】

### ② 子供の成果・反応

- ① 「発展途上国にとっては、今までさんざん経済優先のために二酸化炭素を排出してきたからこそ、今の環境問題を引き起こしている。これからは、発展途上国だって同じように産業を発展させていきたいのに、いきなり二酸化炭素排出削減と言われても不公平感を感じるはず。そうは言っても、このまま排出していいというわけにもいかないし・・・。」と全員が真剣に議論をしていた。
- ② 日本を含むこれからの先進国に求められることは、発展途上国へのエネルギーエコ政策技術援助や環境をよりよくする技術開発をして途上国に援助することなど、現在求められていることを子供自身が考えることができた。

## 6 時限目 「NGO と ODA」

### ① 子供の活動と流れ

- ① 教育が受けられないことで、どんな事が次々と引き起こされるのか絵カードを使って並べ換えさせる。
- ② 教育が受けられないことで起こる負の連鎖を断ち切るためには、どのような支援が必要になるのかを絵カードをもとにグループで考えさせる。さらに子供たちの発表をもとに、アプリカで農業、医療、教育等様々な分野で活躍する青年海外協力隊の姿を写真や映像を使って説明することで日本の NGO や ODA への取組をおさえる。
- ③ 終末では、コートジボワールに行った元青年海外協力隊員の本校職員を GT として招き、参加動機や現地での苦労や喜びを捉える。

### ② 子供の成果・反応

- ① 絵カードを並べ替えて「自力で悪循環から抜け出せるか話し合う活動」を通して、貧困状況に陥ることは怠惰や個人の努力不足ではなく、貧困状況に一度陥ってしまうと個人の努力では悪循環から抜け出すことが難しいことを実感していた。
- ② 絵カードは、負の連鎖を断ち切るために、どんな分野での支援が必要になるかを考える手立てにもなった。さらには、教師がこれまでに渡航した国の青年海外協力隊の写真や動画、また教師自身が実際に NGO として井戸掘り事業に携わっていたときの写真を提示することで、子供にとって縁のない遠い世界だったものが、より身近なものに感じることができた。
- ③ 元青年海外協力隊員の話を書くことで、「国際協力の理念や大切さは分かるが、実際に現地に行って活動するとなると話は別。実行するのは、様々な面で難しい。」という子供の考えが、「国際協力は特別なことではなく、どんな形でも貢献できる。自分にもできることがある。」と国際協力に対するハードルが下がり、前向きな気持ちが出てきた。



【6時限目板書】

## 7時限目 「文化やスポーツを通じた国際交流」

### ① 子供の活動と流れ

- ① さつま町在住外国人で人数割合の多いフィリピン、中国、韓国、アメリカ出身の4名と「国際交流 in さつま町 これからの国際交流の在り方」についてシンポジウムを行う。前半10分で4名が「ここが変だよ！ 日本人！～でもそれって本当に変？」を題目に、フリートークを行っているのを子供たちが聞く。

※ 4名には、あらかじめ「日本文化で驚いたことを話してもらうように伝えておく。さらには、差別や偏見で見ることのないような態度や見方の育成が大切であるという授業の意図を伝えておく。



【外国人の質問に応答する子供たち】

- ② 途中15分で、4名が感じた「日本人の変だと思ふ文化や考え方」について子供たちが応答する。さらには、前単元「世界の中の日本」で学習した4国の文化や伝統について、驚いたことや不思議だなと思ったことを4名に質問する。
- ③ 国際交流を行う上で大切なことは何かをグループで考えて発表する。

### ② 子供の成果・反応

- ① アメリカの方が「日本人は何をするにしても『すみません』と謝る。なぜそんなに謝らなくていけないのか。」の疑問に、子供たちは興味津々になった。しかし、どのように説明したらよいか分からずグループで議論になっていた。結局、「それは謝っているのではない。『ちょっと待ってください。』とか『ちょっといいですか。』などの意味合いで使っていることの方が多いです。それは日本人の相手を気遣う思いやりです。」と説明できた。子供たちは、それぞれの国にはそれぞれ大切にしている文化や伝統があり、それらを互いに説明して尊重する態度が大切であることを理解していた。

## 8時限目 「世界の水・食糧問題」

### ① 子供の活動と流れ

- ① 水・食糧不足に悩んでいる国の写真と本校児童の残食の写真を提示して、なぜこのような格差が生まれているのかを話し合う。
- ② 格差の原因を「ぼくら地球調査隊～ウェブコンテンツ～(JICA)」を使って、世界の水・食糧問題の原因を調べ、日本が年間640億m<sup>3</sup>の水を間接輸入している実態、日本の食料輸入におけるフードマイレージの問題や世界の食料価格の高騰等をまとめる。
- ③ 世界の水・食糧問題を解決するために今の自分にもできる事を考え、発表する。

### ② 子供の成果・反応

- ① 日本の食糧自給率の低さと食糧輸入量の多さ、食糧廃棄率の高さ、先進国の食糧輸入による食糧価格高騰などによって、発展途上国の人々に食糧が行き届かない現状があることを知り、『世界の水・食糧問題』は自分たちがその一原因を作っていることを実感していた。そのため、自分にもできる国際協力について真剣に議論して、以下のような国際協力宣言書を掲げて取り組むようになった(一部掲載)。

- ・ 食事を残さないのは当たり前で、買い物に親と行くときは、できる限り地産地消に努めるようにアドバイスする。等



【8時限目板書】

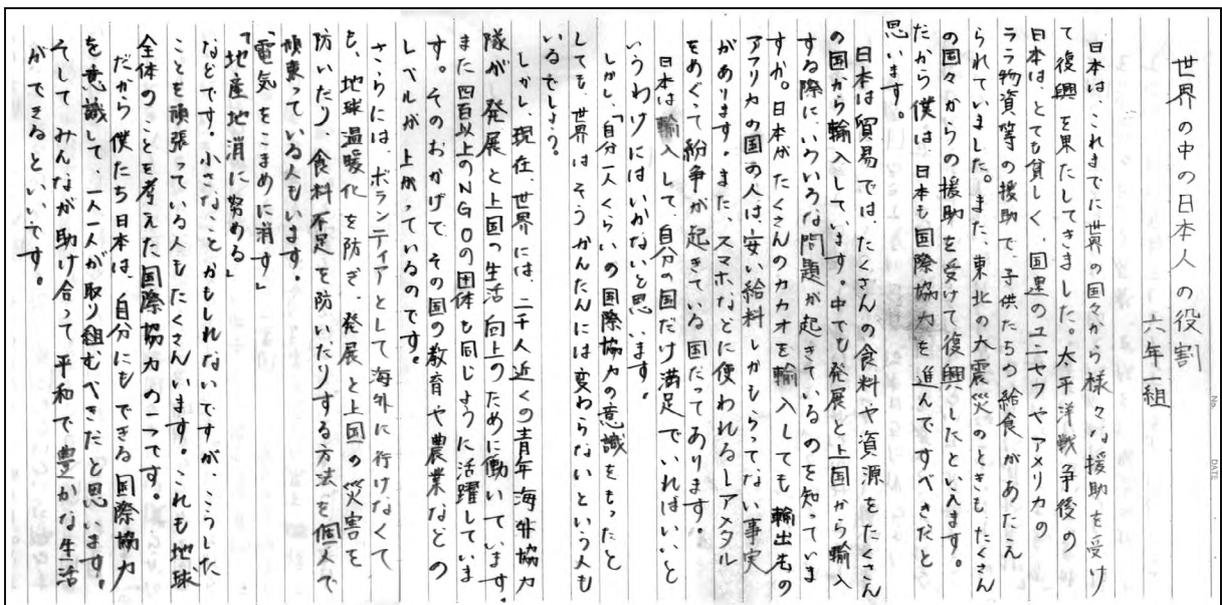
## 9・10時限目 「自分にもできる国際貢献～僕の私の意見文～」

### ① 子供の活動と流れ

- ① 「水・食料不足解消のために」「二酸化炭素排出抑制のために」「リサイクル」「書き損じはがき回収や募金活動」「我が国及び他国の文化や伝統に関心をもち、知ろうとすること」「世界で起こっていることに興味をもち、知ること」等、既習事項の観点を示して意見文を書く（意見文の様式については国語科で学習した手引きを利用する）。
- ② 互いの発表を聞き合うことで、国際協力に関する視野を広げる。

### ② 子供の成果・反応

- ① これまで学習した内容を再構成して意見文を書くことで、これまで学んできた点でしかなかった知識が線でつながり面となって知識のネットワーク化ができた。



【9時限目で書いた子供の意見文】

## 成果と課題

### ■ 成 果

- ① 単元導入で「世界がもし 100 人の村だったら」を使って世界の不均衡を体験的に学習した。その中で、子供が抱いた疑問や強い憤りが学習の起爆剤になり、「なぜこのような不均衡が起こるのか。」「世界や日本は解決するために一体何をしているのか。」という疑問を深化・発展させながら学習を進めることができ、単元を終えてほぼ全員がこの単元を「楽しかった。」と答えていた。
- ② これまで学習した内容を全て関連付け、世界中の様々な国とつながり合っている『自分』を意識できるようになった。つながり合っている世界中の国の中の一日本人としての自覚をもち、自分にもできる国際貢献を考え実践できるようになった。
- ③ まだまだ少数ではあるが、「なぜテロが起こっているのか。」「なぜ TPP は導入されたのか。」等疑問をもち、インターネットで調べて日記に書いてくるなど、主体的に世界の様々な問題に関心をもてるようになってきた。

### ■ 課 題

- ① 世界の様々な問題に関心をもち進んで調べたり、考えたりできる子供を育成するには、様々な教科との有機的関連を図った授業構築が求められる。また、毎日の新聞記事をどのように教育活動に取り入れていくのかも研究していく必要がある。

## 終わりに

本単元は、6年生の3学期3月に実施する社会科の一番最後の単元である。卒業を間近に卒業式練習、通知表や指導要録の記入等で慌ただしくなり、どちらかという深い教材研究のもと、児童の関心・意欲・態度を高める実践がなされにくい単元である。昨年度私は縁あって教師海外研修プログラムに参加し国際協力における現場を視察させていただいたことで、私自身は幸運にも国際協力の大切さを身にしみて感じる事ができた。

私が今回教師海外研修プログラムに参加させていただいた目的は、「マラウイのことを子供たちに伝える」ことではないと感じています。この2週間の研修を通して培った「世界の情勢を進んで知ろうとする姿勢、世界の中の日本人の役割を意識して行動できる姿勢」をこれからの子供たちに指導していくこと、そして自分以外の先生方がその意義に納得していただき、いつでもどこも再実践できるような単元構成をつくることだと考えています。

そのような意味で本実践が少しでも多くの先生方の参考になることを期待します。また、授業以外の場でも、子供たちに国際協力の事を伝えられる機会があれば、喜んでお話をさせていただきたいと思います。

## 12時間労働、弟妹背負い登校「それでも目は輝いていた」



↑ スライドを使い児童らに説明する岡留真吾教諭(左) =さつま町

# アフリカの子 命の力感じた

さつま町の盈進ひびき小学校の岡留真吾教諭(42)は国際協力機構(JICA)の教師海外研修のメンバーに選ばれ8月11〜12日、アフリカ南東部のマラウイへ渡航した。9月28日には同町宮之城屋地の天神公民会の十五夜行事で特別授業。「世界の中で日本が果たす役割を意識してほしい」などと語った。研修は、開発途上国の現状や九州から計8人、真内2人が、国際協力への理解を深め、教育、青年海外協力隊員らが活動するに役立ててもらうことが目的。学校や病院などを視察した。

## 生き抜く力、培って さつま・盈進小 岡留教諭報告

報告会は、岡留教諭が土産として持参したバレーボールを、同公民会の春山智さん(48)が集めた縁で開いた。マラウイは1人当たりの国民総生産(GDP)が日本の約0・7%の242年で最貧国の一つ。報告会では文化や生活のほか、乳幼児死亡率が日本より28倍も高く、隊員が栄養指導する様子などを紹介。弟や妹を背負って学校に来る子や、タバコ農園などで1日12時間働き学校に来られない子がいる現状なども説明した。

岡留教諭は「それでも子どもたちの目はキラキラ輝き『今の生活は幸せ』と感じることのできる心の豊かさがあった。日本の子にも生き抜く力や、本当の幸せに気付く力を伝えたい」と話した。

3学期には担任する6年生の社会科授業でも報告する。盈進小1年の盛島大煌君は「同じ小学生がものすごく頑張っていて驚いた。もっと勉強したい」と話した。(天塚政志)



土産のバレーボールをマラウイの子に渡す岡留真吾教諭=中央上(岡留さん提供)

【南日本新聞 10月12日の記事より】

# Malawi を伝え続ける

古賀 富士子  
KOGA FUJIKO

福岡県立福岡高等視覚特別支援学校（福岡県）

担当教科：英語科

●実践教科：英語、HR、生活単元  
（その他：読み語り会、掲示物、  
寄宿舎で）

●時間数：38時間+a

●対象学年：本科・専攻科 1～3年生

●対象人数：全校生徒（53名）

## カリキュラム

### ■実践の目的

- マラウイを知ることで、視野を世界へと広げる。「幸せとは、豊かさとは何か」を考える。
- キャリア教育の視点から、自分の生活を見つめ直し、多様な価値観を受け入れる力をつける。

### ■授業の構成（F：普通科、H：保健医療科、G：生活技能科、S：専攻科）

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p><b>【1-9 時限】</b> 対象：F×4、G×2、 H、S×2 テーマ：マラウイについて知る ねらい：（クラスごとに設定） ①マラウイの基本情報を知る ②マラウイ人の生活を体験する ③マラウイで活躍する日本人を知る</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ クイズ形式で進め解答は写真で示し推測させ、説明をする。</li> <li>・ 体験活動（具体物を触る、チテンジを巻く、水運び、シマ作りなど）</li> <li>・ お菓子やルイボスティーの試食（試飲）</li> <li>・ マラウイでの医療活動（ISAPH）について</li> </ul>	<p>PPT、世界地図、風車の模型、マラウイの教科書・お菓子・チテンジ布・紙幣・硬貨、ISAPH 資料、メイズ、鍋、IH、紙コップ、割り箸、</p>
<p><b>【10-24 時限】</b> 対象：F（5×3） テーマ：William Kamkwamba ねらい：ウィリアムの生き方を知る 「学ぶとは？」「幸せとは？」を考え、自分の生活を見つめ直す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ マラウイ人の生活を想像しながら、ウィリアムの気持ちを考えながら、英文を読む。</li> <li>・ 現在のウィリアムの家について</li> <li>※ William のスピーチを聞いて感想を発表</li> <li>※ Memory Banda の紹介（マラウイの女性の生き方考える）</li> </ul>	<p>教科書（啓林館） ELEMENT Communication I L8 William の家や風車の写真や動画、TED 動画 風車の模型</p>

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p><b>【25-30 時限】</b>  対象：F (3×2)  テーマ：世界を知ろう、考えよう！  ねらい：アクティビティを通して</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①教育の問題を考える</li> <li>②グローバル化と相互依存を考える</li> <li>③水と衛生の問題を考える</li> <li>④これらの問題解決のために、現地で働く JICA 隊員の仕事について知る。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①「学校に行けない」を起点とし、原因・結果の関係になるように、12 枚のカードを発生順に並べて、各自発表する。</li> <li>② 16 品目のそれぞれが、アフリカからの輸入品かどうかを考えて発表する。その他、アフリカとつながりがあるもの考える。</li> <li>③ ペットボトルの水で歯磨きをし、水運びを体験する。水運びに関する英文を読む。 1 日の生活で使用する水の量を計算する。</li> <li>④ JICA 隊員の動画を見て仕事内容を推測する。</li> </ol>	「国際理解教育実践資料集」(JICA)、12 枚の絵カード、輸入品目が描かれた学習プリント、JICA 隊員の動画、歯磨きセット、ペットボトル、10L の水、教科書 (桐原書店) WORLD TREK English Communication II L9
<p><b>【31-32 時限】</b>  対象：F×2  テーマ：南アフリカの ALT と交流しよう！シマ (パプ) を食べよう！  ねらい：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①アフリカの主食を知る</li> <li>②マラウイと南アフリカは同じアフリカでも全く異なることを知る</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 南アフリカの基本情報について知ろう。</li> <li>・ 世界地図で位置の確認をしよう</li> <li>・ ブブゼラを吹こう！</li> <li>・ アフリカのダンスを踊ろう！</li> <li>・ シマを美味しく食べよう！</li> <li>・ お礼のメールを ALT に送信しよう！</li> </ul>	PPT、世界地図、ブブゼラ IH、鍋、紙コップ メイズ、割り箸、塩昆布、岩海苔、味海苔
<p><b>【33-38 時限】</b>  対象：F (2×3)  テーマ：障害者支援のために働く人  ねらい：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①マラウイの聾学校を知る</li> <li>②現地で活躍する・世界で活躍する視覚障害者の存在を知る</li> <li>③他の途上国について知る</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ マラウイの障害者の教育施設について知る</li> <li>・ JICA 隊員の活動を紹介する。</li> <li>・ 和歌山盲学校卒業生の石田さんについて</li> <li>・ フィリピンについて書かれた英文を読んで、マラウイ以外の途上国を知る。</li> <li>・ 浅川智恵子さんのスピーチ英文を読み、浅川さんの自立心を学ぶ。</li> </ul>	聾学校の写真、JICA 隊員の資料、「できることの見つけ方」石田由香理・西村幹子著 岩波ジュニア新書、PPT (フィリピンについて) TED 動画 (浅川智恵子)

## 授業の詳細（授業内容別に）

### 【1】マラウイの基本情報について

#### （1）基本情報に関するクイズ（PPT）

英問英答を作成し、写真や動画を見せて推測させて、答の説明をしていく。クラスにより英語の習熟度が異なるので、パワーポイントの英語表現を少しずつ変えて作成する。また、全盲生徒に対しては、「日本では〇〇だけど、マラウイでは〇〇」と日本とマラウイを比較して説明をしていく。

クイズの内容：

マラウイの位置、首都、人口、主食、独立した年、どこの国の植民地だったか、使用言語、労働者（作業員）の給料、平均寿命、William Kamkwamba について等



#### （2）体験活動

視覚以外の感覚（触覚、味覚、聴覚）を最大限に活用しながら、マラウイについて興味関心をもたせる。

- マラウイのお菓子、南アフリカのルイボスティーの試食
- マラウイの紙幣・硬貨、国旗、教科書、チテンジ布等を触る
- シマ作りとシマの試食
- マラウイの NGO の人たちの出迎えや中等学校生徒のインタビューの動画を視聴



#### <生徒の感想>

- ・ マラウイの人々は、今の日本人にはないものをもっていると考えさせられた。
- ・ マラウイの生徒は、日本人よりも上手に英語を話していた。
- ・ シマは、おかゆのようで食感もよくておいしかった。
- ・ NGO の人たちは、明るくお客さんを出迎えて、録音された声も明るくて元気だったことが私はびっくりしたが、すごく嬉しかった。元気をもらえた。

#### ■参考資料・教材など

- 1) 「マラウイを知るための 45 章」 栗田和明著 明石書店
- 2) 「自分に何ができるのか？ 答は現場にあった」 山田耕平著 東邦出版

### 【2】ウィリアムカム・カムクワンバの生き方について

現在、高校英語の教科書の多くに、William Kamkwamba の話が載っている。本校採択教科書には掲載されていないので、掲載されている教科書を集め、生徒の習熟度に合う英文を選択し、拡大文字と点字でテキストを作成する。（※使用教科書 ①啓林館 ②桐原書店）

全盲の生徒には、風車の模型を作って、風力発電の原理を補足説明する。マラウイ人の生活を想像しながら英文を読み、ウィリアムの気持ちを考えて英文を読んでいく。「もし自分がウィリア

ムだったら」また、「幸せ・豊かさとは何か」を考えさせる。

William Kamkwamba という人物が、一生忘れない存在になるように、ウィリアムの実家訪問時の写真や動画を見せ、可能な限りウィリアムの当時の状況を理解させる。

また、動画資料を参考に、マラウイにおける女性の生き方についても考える機会をもつ。



① ウィリアムの話が掲載されている英語の教科書



② 風車第1号



③ 風車の模型

### <生徒の感想>

- ・ これから先、ウィリアム君の風力発電により一般家庭にも電気が通ることを祈っています。アフリカに良い風が吹きますように。
- ・ 貧富の差がとてもあり、電気や水も確保されない中の生活、その中でも独自に知恵を絞って過ごしていることが感心するし、見習うべきところだと思います。
- ・ もし、私がウィリアム君の立場だったら、そもそも風車を作ろうという発想には至らないだろうし、他人から馬鹿にされたらきっとそこで折れてしまうだろうと思います。大人であっても、きっと日本ではほとんどの人が私と同じではないかと思います。それを、ほんの少年だった彼が成し遂げてみせたというのは本当に驚くべきことだと思いました。
- ・ マラウイでは、女子が学校にも行かないで早く結婚させられるなんて、日本では考えられません。メモリーバンドの "I'll marry when I want." がいつまでも耳に残っています。

### ■参考資料・教材など

- 1) TED William Kamkwamba: 'How I built a windmill' (2007), 'How I harnessed the wind.' (2009), Memory Banda: 'A warrior's cry against child marriage.' (2015.7)
- 2) 「風をつかまえた少年」ウィリアム・カムクワンバ ブライアン・ミラー 文藝春秋
- 3) 「風をつかまえたウィリアム」ウィリアム・カムクワンバ さえら書房
- 4) 中学校教科書 NEW CROWN 3 Lesson 7 We Can Change Our World. (三省堂)
- 5) 高校教科書 ELEMENT English Communication I Lesson 8 The Boy Who Harnessed the Wind. (啓林館)、WORLD TREK English Communication II Lesson 9 The Boy Who Harnessed the Wind. (桐原書店)、Perspective English Communication II Lesson 1 A Hunger for Knowledge (第一学習社)、Unicorn English Communication II Lesson 5 The Boy Who Harnessed the Wind. (文英堂)、Crown English Communication II Lesson 1 A Boy and His Windmill. (三省堂)

### 【3】「JICA 国際理解教育実践資料集」を参考にした授業実践

#### (1) P.22-23：貧困を考える (Negative Chain) <NZ 出身の ALT との TT>

「学校にいけない」ことからどんなことが発生するかを考える。原因・結果の関係になるように、12枚の絵カードを順に並べていく。1枚ずつ、絵カードを説明しながら進めていく。カードを並べた後に、1人ずつそのスパイラルを発表する。また、JICA 隊員の仕事を紹介し、教育の重要性について考え、意見を出し合う。

#### (2) P.10-12：アフリカと日本の関係 (Import Goods from Africa)

- ① 16品目のイラストを見ながら英語で表現していく。
- ② 16品目それぞれが、アフリカから輸入されたのかをどうかを考える。
- ③ その他、身近なものでアフリカとつながりがあるものを考える。

#### (3) P.34-37：水は「限りある資源」

- ① ペットボトル (500ml) の水をできる限り少量しか使わずに、歯磨きをしよう。
- ② 水運びを体験してみよう。(10Lの水を頭上に置いて運ぶ。)
- ③ Innovative Products : A Q Drum の英文 (※桐原書店 WORLD TREK English Communication II) を読み一人のアイデアでアフリカの人の生活が変わることを知る。
- ④ 「世界の水事情」について、クイズ形式で確認する。"How much water do we need?"の表に実際の使用量を埋めていき、「1日に使う水の量」を出して、感想を発表する。



① ペットボトルの水で歯磨き



② 水運び体験

Tap Water	10 min. = 120 L	Washing clothes 4.2 kg =115 L
	1 min. = 1.2 L	8.0 kg =144 L
	30 sec. = 0.6 L	Flushing 6 L, 8 L
	10 sec. = 0.2 L	Bathwater 200 L

1	Washing your (face + mouth + teeth)	L
2	Flushing	L
3	Breakfast	L
4	Brushing your teeth	L
5	Flushing	L
		L
6	Lunch	L

③ 「1日の生活にどのくらいの水が必要か？」

#### <生徒の感想>

- ・ マラウイの主な輸出品がタバコで、日本とも取引があることを知り驚きましたが、それ以外にも意外にも数多くのもがアフリカからの輸入だと知り驚きました。
- ・ 実際に、頭の上にバケツを載せて運んだりして、マラウイで、水を手に入れることや運んだりすることの大変さを知りました。また、初めて1日の水の使用量を計算してみると、約300Lになり驚きました。水道がなければ、10Lの容器で30往復も運ばないといけないことになります。今後は水を使うときはありがたさを忘れずに、大切に使いしていきたいと思います。

#### ■参考資料・教材など

- 1) 独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 「国際理解教育実践資料集」

#### 【4】 マラウイとは異なる国、南アフリカについて（南アフリカの ALT との交流）

マラウイの授業を進めていく途中で、「マラウイの姿＝アフリカ大陸に住む人々の全体像」だと誤解させないために、アフリカ出身の ALT との交流授業を計画する。

（福岡県内には、唯一、南アフリカ出身の ALT が田川市に配属されていたので、派遣依頼を行い実施することができた。来校後、フォーマルな衣服に着替えて授業をしてくれた。）

授業内容：南アフリカの ALT と交流しよう！

- ① 南アフリカの基本情報について知ろう！（PPT を用いて）
- ② 体験活動：ブブゼラを吹いてみよう！ダンスしてみよう！パプ（シマ）を作ろう！

##### <生徒の感想>

- ・ 南アフリカの PPT を見て、マラウイとは異なり、南アフリカは都会だと思った。
- ・ アフリカの主食（メイズ）は、国によって呼び方が変わること（マラウイではシマ、南アフリカではパプ、ケニアではウガリなど）を初めて知った。
- ・ ティベロ先生が、塩昆布や岩海苔をパプに載せて海苔巻きにして「パプぎり」と言ったのは、ナイスネーミングだと思った。
- ・ ブブゼラの音を出すのは、思ったよりとても難しかった、
- ・ アフリカの popular music のことを Afro-pop 言う言葉を初めて知った。
- ・ Tebello 先生と一緒に伝統的なダンスを教わって踊ったりできて楽しかったです。
- ・ 授業後に、シマ粉の残りをもらった Tebello 先生が、「久しぶりに家でパプが食べられる」と喜んでいるのを見て、「シマ（パプ）こそ、アフリカの味だ」と思いました。



○南アの Tebello 先生との TT の様子（PPT、ダンス、シマの試食、シマ作り、ブブゼラ）

## 【5】海外で活躍する日本人

### (1) マラウイの乳幼児のために働く日本人

専攻科は、あんま指圧マッサージ師・鍼灸師の国家資格取得のために、理療の専門知識を学ぶ学科である。マラウイの医療活動に関する日本人の活動を紹介し、乳幼児の死亡率を下げるために、県内の聖マリア病院が長年マラウイ支援を行っていることをPPTで紹介する。現地の動画や写真を見せそれらが何をしているところかを推測させて授業を進めていく。

### (2) マラウイの聴覚障害者のために働く日本人

聾学校内で撮影した写真からマラウイでの特別支援教育を探る。本校との施設設備や教材のちがいに気付かせ、そこで働く JICA 隊員を紹介する。また、マラウイで見かけた障害者（①全盲の母を連れて物乞いする家族、②改造車イスに乗る肢体不自由者）にも触れる。

### (3) フィリピンの視覚障害者のために／世界の視覚障害者のために働く 視覚障害者

① 和歌山盲学校卒業生の石田由香理さん：現在、視覚障害者としては初めて、外務省インターンとしてフィリピンで働いている。本も出され、ブログも書かれているので、それらを参考に、視覚障害者の石田さんの生き様を追い、その積極性を考える。また、マラウイとはまた全く異なる途上国フィリピンについての英文を読む。フィリピンについて PPT を用いて説明を加える。

② IBM フェロー浅川智恵子さん：自らが視覚障害者で、視覚障害者支援のプロジェクトやアクセシビリティ実現のための研究をされている。TED スピーチ（2015, 12）の動画を見て、その内容把握をして、浅川さんの独立心について考える。

#### <生徒の感想>

- ・ マラウイの乳幼児の死亡率を下げるために、昔からマラウイとつながって支援をしていた病院が福岡県にあることを知り驚きました。
- ・ 私たちは、日常的に物への有難さを感じるべきだと思いました。今後も発展途上国などの貧しい国への援助を続けていくことが大切だと思います。
- ・ 日本の福祉制度が他の国に比べてどれほど充実しているかを、強く感じました。



①青空の下で体重測定



②妹を負ぶって登校



③聾学校の先生

## ■ 参考資料・教材など

- 1) ISAP ニュースレター 第121号「マラウイの活動地域にソーラー発電パネルと冷凍冷蔵庫を設置」聖マリア病院国際事業部 山崎裕章
- 2) 「<できること>の見つけ方—全盲女子大生が手に入れた大切なもの」石田由香理・西村幹子 著 岩波ジュニア新書」、石田由香理さんのブログ”Diary in the Philippines”
- 3) アクティブ・リーディング Basic (アルク) Lesson 13 Children living in Garbage
- 4) TED : Chieko Asakawa : ‘How new technology helps blind people explore the world’

## 【6】 授業以外での実践

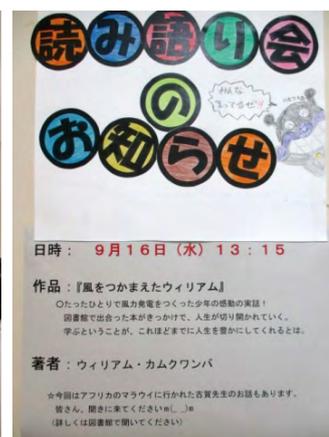
- (1) 保健室前に、マラウイの小学生と交流した時の写真（使用済み点字用紙での封筒作り等）を掲示し、マラウイという国について、また教育現状について説明する。
- (2) 図書委員会の読み語り会（毎月開催）で、10月に絵本「風をつかまえたウィリアム」を発表。前半は生徒の朗読、後半はPPTを用いて、マラウイおよびウィリアムを紹介。
- (3) 舎監時に、寄宿舍で「シマ作り」をして、生徒・職員とシマの試食会を開き、マラウイの主食や生活について説明する。



① 壁新聞



② 読み語り会（生徒・職員対象で昼休みに開催）



### <実践授業全体の生徒の感想>

- ・ 『Malawiと日本、どちらが幸せか?』と尋ねられた時に、答ができませんでした。Malawiの人の生活環境や給料を知った時、Malawiでの生活は私には無理だと感じました。ネット、温かい浴槽、洋式トイレ、しゃぶしゃぶ。どれが欠けても私には耐えられません。私は、自分の家は貧乏だと思っていましたが、恵まれていることには変わりはありません。しかし、Malawiの人々の笑顔を見たとき、姉が妹を負っているところを見たとき、皆で歌を歌っているところを見たとき、どうしようもなく羨ましいと思いました。

自分と言う個性を捨ててでも社会に合わせることが暗黙のルールとされている。腹立ったから、面倒見切れないから、このような無責任な理由で、自ら自分の家族の命を絶つ非道な行いが毎日繰り返される。自分が目標を果たすことにおけるライバルは踏み潰して自分だけ進もうとしなくてはならない。このような日本では、Malawiの人々のような、あんなにも綺麗な笑顔で笑うことはできないと思います。しかし、Malawiの人々は、日本はとても幸せな国だと思われているかもしれません。もし、Malawiの人々が日本へ来られた時、お金はあ

るのに、なぜ、日本人は心が貧しいのかと思われぬように、心を豊かにする国づくりをしていかなければなりません。行政に関わる仕事を希望する身として心を豊かにする国づくりについては日々考えていますが、やはりお金がなくては成せないことだと考えてしまいます。自分の視野の狭さが憎らしいです。今でも Malawi と日本、どちらが幸せなのか、答えられませんが、Malawi から学ぶことはまだまだたくさんあると思います。

- ・ 現実を知るために、実際に他国を訪ねるといふ勇氣は、私にはまだありません。だからと言ってニュースを見るだけでなく、その現実についてまず自分の考えを持つようにすること。そして発信していくことが大切だと思いました。また、それ以上にしなければならぬと感じたことは、日常を幸せだと思ふことです。

## 成果と課題

視覚から得られる情報量の割合は約 87% と言われている。視覚障害のある生徒たちは、同時に情報障害にもなり得る。そのため世の中の情報に疎くなり、視野が狭くなりがちである。また、幼少期より周りから支援されることが多く、時として必要以上の支援を受ける生徒も中にはいる。日本の障害者福祉制度は手厚く、障害のある生徒の学ぶ環境を整えているが、生徒自らが判断し、自分で考え選択し行動する機会を減らしている一面も見られる。キャリア教育の視点からも、英語の授業を通して、世界に興味を持ち視野を広げ、多様な他者の考え方や立場を理解し、他者と協力・協働して社会に関わることが出来る生徒を育てたいと、日頃より考えている。

今回、マラウイ教師海外研修で学んだことを授業で実践する中で、生徒たちは少しずつではあるが、世界へ目を向けるようになったと思う。実際、日常生活の中で、「マラウイ」という言葉をよく口にするようになった。給食を食べている時、暖房の入った温かい教室で授業を受けている時など、生徒たちは私たちが当たり前だと思っているこの生活は、世界規模で考えると当たり前ではなく、有難いことだと言葉に出してくれるようになってきた。途上国の現実を知った者として、今後、「具体的に何をするか」を考えさせたい。実際に現地で活躍されている JICA の隊員や海外で活躍されている視覚障害者の話や、具体的にボランティア活動に取り組んでいる方々の話を教材で扱い、生徒にも自分でできることを考えさせ、それに取り組ませたいと思う。



この実践授業に終わりはない。今後も、授業だけではなく、さまざまな教育活動の中で、マラウイのことを生徒に伝え続けていきたい。

生徒が、この学び舎を去って、時間が経ったときに、

「そういえば、昔、アフリカのマラウイって国についての授業があって、シマを食べた!」「電気や水もないところで生活しているのに、子どもたちの笑顔は素敵だった!」と、日本とは異なる住環境の中でたくましく生活する『心温かきマラウイ人』のことをふと懐かしく思い出してくれる日が来るように、体験を重視した授業を展開していきたい。

